箕瀬遺跡

2010年3月

長野県飯田市教育委員会

箕瀬遺跡

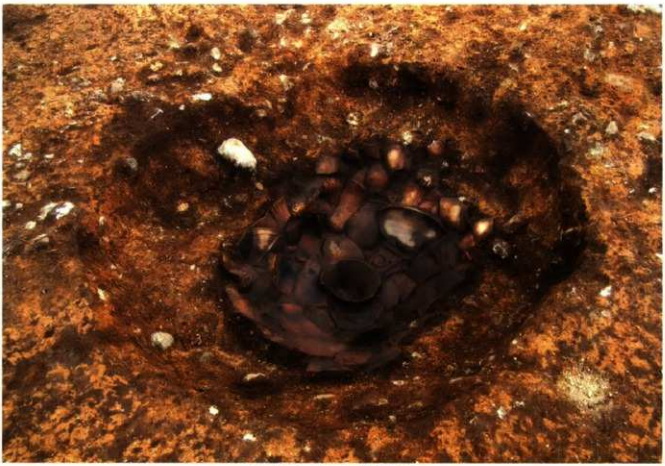
2010年3月

長野県飯田市教育委員会

縄文時代中期後葉土器群

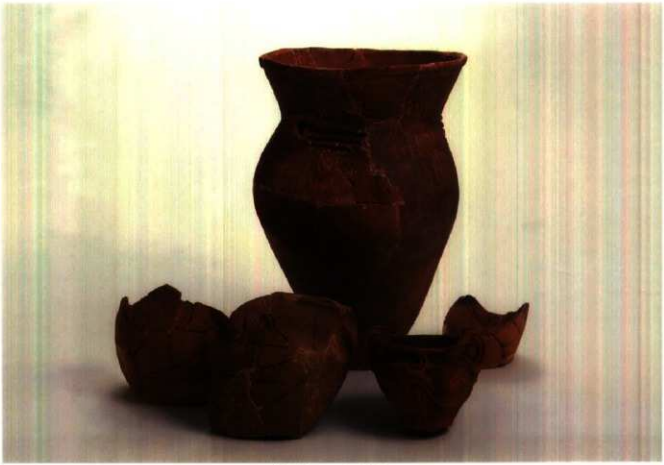
北側調査区（東から）

北側調査区（西から）



住居址 24　炉　土器出土状況

住居址 24　炉　出土土器



住居址 06　出土土器

住居址 09　出土土器

住居址 13　出土土器

住居址 24　出土土器

住居址 25　出土土器

住居址 25　出土土器

縄文時代中期石器群

石英斑岩製石器群

住居址 08　炭化物出土状況

序

私たちの飯田市は、中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。そして、美しい自然に恵まれ、長い歴史と貴重な伝統文化に包まれた、人情豊かなまちとして知られています。

箕瀬遺跡が存在する橋南地区は、飯田の象徴ともいえる風越山を背景とした俗に「丘の上」と呼ばれる飯田市の中心市街地です。三州街道・遠州街道・秋葉街道などの起点として、また下伊那唯一の近世城郭である飯田城の城下町として、古くから栄えてきました。城下町の町並みは整然と美しく区画され、小京都と謳われるほどでした。

しかし、戦災は免れたものの昭和22年の飯田大火により、丘の上の大半は灰燼に帰し、美しい町並みの大半は消えてしまいました。ですが、GHQの下で新たに防災都市として、見事な復興を成し遂げており、「りんご並木」などは飯田の新たなシンボルとなっています。

丘の上は、城下町形成以来のおよそ400年の歴史が明らかにされていますが、それ以前の姿は断片的に把握されているに過ぎません。旧石器時代以来、連綿とした人々の営みの痕跡が見付かっていますが、近年、縄文時代や弥生時代、古代の遺跡も知られるようになってきました。ここ箕瀬遺跡では、平成13年度に発掘調査が実施されており、縄文時代、平安時代の遺跡が見付かっています。

埋蔵文化財は、なかなか身近に感じられることが難しいかと思いますが、私たちの祖先の足跡を示しており、この地の歴史を語る上で欠くことができません。しかし、一度壊すと二度と元通りにすることはできません。できる限り現状で保存するのが最善といえますが、現代社会の基盤整備との間では記録保存により後世に伝えることもやむを得ないことと考えております。今回の発掘調査により、丘の上において、市内でも有数の縄文時代の集落が発見されました。その詳細については、本書に掲載しておる通りですが、今後、本書が広く活用されるとともに、地域の皆様に歴史と文化財が身近に感じられるようになれば幸いです。

最後になりましたが、文化財保護にご理解を賜りご協力いただきました関係者の方々に、深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞といたします。

平成22年３月

飯田市教育委員会
教育長　伊澤宏爾

例　言

1．本報告書は、平成20年度に実施した埋蔵文化財包蔵地箕瀬遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2．調査個所は、飯田市箕瀬２丁目2561番地１である。
3．発掘調査は日本たばこ産業株式会社の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
4．調査は、下平博行、羽生俊郎が担当した。平成20年度に現地調査を、平成21年度に整理作業および報告書作成作業を行った。
5．今次調査の図面類・遺物の注記には、「MNZ２－2561－１」の記号を、遺構には以下の記号を用いた。
竪穴住居址：SB　土坑：SK　方形周溝墓：SM　小穴：グリット名の後にP　出土地点不明：ZZZ
6．本遺跡に於ける発掘調査位置は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図の区画、Ⅷ－Lc74　23－39（社団法人日本測量協会　1969「国土基本図図式　同適用規定」参照）を中心に位置し、一部同区画23－31、23－40にかかる。グリット設定は飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づいて、有限会社キリュウに委託した。
7．土層・土器観察については、小山正忠・竹原秀男　2005『新版標準土色帖』による。
8．遺構・遺物の計測値のうち、未調査、破壊・破損等の数値は現存値を（　）内に示した。
9．遺構実測図の線については、上端は太線、下端は細線、破線は推定のライン等を表現している。
10．遺物実測図における網は、土偶・石器では剥落・磨耗等を、土師器では内黒を表現している。
11．土器の断面図では、縄文～土師器は白抜、須恵器は黒塗、施釉陶器は網で表現している。
12．石器の石材について、表中では以下に省略した。
硬砂岩：硬　緑色岩：緑　石英斑岩：石　粘板岩：粘　結晶片岩：結　花崗岩：花　砂質片岩：砂
黒曜石：黒　下呂石：下　チャート：チ　安山岩：安　砂岩：サ　不明：不
13．出土土器の一部の実測については、株式会社シン技術コンサルに委託した。
14．遺構写真は主に羽生俊郎が撮影し、遺物写真については、西大寺フォト　杉本和樹氏に委託した。
15．縄文時代中期中葉の土器編年については井戸尻編年、同後葉については、吉川金利（2003）に準拠した。
16．本書は、第４章４節は坂井勇雄が、それ以外は羽生俊郎が執筆・編集し、山下誠一が総括した。
17．本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目　　次

序

例言

目次

第1章　経　過　1
第1節　調査と調査に至る経過 …… 1
（1）　調査に至る経過 …… 1
（2）　調査の経過 …… 1
（3）　作業日誌 …… 2
第2節　調査組織 …… 3
（1）　調査団 …… 3
（2）　事務局 …… 3
（3）　指導・協力 …… 3
第2章　遺跡の環境　5
第1節　地理的環境 …… 5
第2節　歴史的環境 …… 6
第3章　調査結果　9
第1節　調査区の設定 …… 9
第2節　基本層序 …… 9
第3節　遺構 …… 10
（1）　縄文時代 …… 10
①住居址06・②住居址07 …… 10
③住居址09 …… 12
④住居址10・⑤住居址11・⑥住居址12 …… 14
⑦住居址13 …… 16
⑧住居址14・⑨住居址15・⑩住居址16・⑪住居址18 …… 18
⑫住居址22・⑬住居址23・⑭住居址24 …… 20
⑮住居址25・⑯土坑06・⑰小穴 …… 22
（2）　弥生時代 …… 26
①住居址17・②住居址20・③方形周溝墓01 …… 26
（3）　平安時代 …… 28
①住居址08・②住居址19 …… 28
③住居址21 …… 30
（4）　中世・時期不明 …… 30
①柱穴・②土坑04・③土坑05 …… 30
（5）　遺構外等出土遺物 …… 30
第4章　遺物　36
第1節　縄文時代中期中葉の土器 …… 36
（1）在地系 …… 36
（2）東海系 …… 37
（3）関東系 …… 37
（4）北陸系 …… 37
第2節　縄文時代中期後葉の土器 …… 38
（1）在地系 …… 38
（2）唐草文系 …… 39
（3）東海系 …… 39
（4）関東系 …… 39
（5）その他 …… 40
第3節　その他の縄文土器 …… 41
第4節　弥生時代 …… 41
第5節　平安時代 …… 41
第6節　縄文時代の石器 …… 42
①打製石斧・②磨製石斧 …… 42
③横刃形石器・④敲石・⑤磨器・⑥石錘・⑦磨石・⑧石皿 …… 43
⑨剥片類 …… 44
⑩石核・⑪石鏃・⑫石錐・⑬器種不明・⑭石匙・⑮削器・⑯両極石器 …… 45
第5章　調査のまとめ　71
第1節　集落の変遷 …… 71
（1）縄文時代 …… 71
（2）弥生時代 …… 72
（3）古墳時代 …… 72
（4）奈良・平安時代 …… 72
（5）中近世 …… 73
第2節　縄文時代中期の土器について … 73

（1）中期中葉の様相 …… 73
（2）中期後葉の様相 …… 74
①Ⅱ期・②Ⅲa期・③Ⅲb期・④Ⅲc期・74
⑤Ⅳa期・⑥Ⅳb期 …… 75
第3節 縄文時代の石器 …… 75
第4節 住居址06・24にみられる炉内への
土器敷行為について …… 76
（1）住居址06・24での出土状況 …… 76
（2）伊那谷における他遺跡の様相 … 76
（3）炉内への土器敷行為の形態分類 77
①炉の形態・②炉底の状態 …… 77
（4）炉内への土器敷行為がもつ意味 79
（5）今後の課題 …… 80
第5節 終わりに …… 80
引用・参考文献 81
抄録 121

挿図目次

挿図1 遺跡位置図 …… 4
挿図2 調査区位置図 …… 7
挿図3 遺構分布図 …… 8
挿図4 基本層序 …… 9
挿図5 住居址06 …… 11
挿図6 住居址07 …… 12
挿図7 住居址09・10 …… 13
挿図8 住居址11 …… 15
挿図9 住居址12 …… 16
挿図10 住居址13・16 …… 17
挿図11 住居址14・15 …… 19
挿図12 住居址18・22 …… 21
挿図13 住居址23・25 …… 23
挿図14 住居址24 …… 24
挿図15 住居址24 炉・土坑06 …… 25
挿図16 住居址17・20 …… 26
挿図17 方形周溝墓01 …… 27
挿図18 住居址08 …… 29
挿図19 住居址19 …… 31
挿図20 住居址21・土坑04・05 …… 32
挿図21 小穴割付図① …… 33
挿図22 小穴割付図② …… 34
挿図23 小穴割付図③ …… 35
挿図24 住居址06出土土器 …… 46
挿図25 住居址06・07・10出土土器 …… 47
挿図26 住居址09出土土器 …… 48
挿図27 住居址11出土土器 …… 49
挿図28 住居址12・14出土土器 …… 50
挿図29 住居址13出土土器 …… 51
挿図30 住居址13・15・16出土土器 …… 52
挿図31 住居址18・22出土土器 …… 53
挿図32 住居址24出土土器 …… 54
挿図33 住居址24出土土器 …… 55
挿図34 住居址23・24出土土器 …… 56
挿図35 住居址25出土土器 …… 57
挿図36 遺構外出土縄文土器・土偶・住居址
17・20 方形周溝墓01出土遺物 … 58
挿図37 住居址08・19・21出土土器 …… 59
挿図38 打製石斧 …… 60
挿図39 打製石斧・横刃形石器 …… 61
挿図40 横刃形石器 …… 62
挿図41 横刃形石器 …… 63
挿図42 磨製石斧・敲石 …… 64
挿図43 礫器・石錘・磨石・石皿 …… 65
挿図44 石核・剥片 …… 66
挿図45 石鏃・石錐・不定形石器・石匙・
削器 …… 67
挿図46 剥片・石核 …… 68
挿図47 両極石器 …… 69
挿図48 縄文時代中期後葉住居址変遷図 … 70

図版目次

巻頭図版１　縄文時代中期後葉土器群
巻頭図版２　北側調査区
巻頭図版３　住居址24　炉　土器出土状況・同出土土器
巻頭図版４　住居址06出土土器・住居址09出土土器
巻頭図版５　住居址13出土土器・住居址24出土土器
巻頭図版６　住居址25出土土器
巻頭図版７　縄文時代中期石器群
巻頭図版８　石英斑岩製石器群・住居址08炭化物出土状況
図版１　北側調査区（部分）・南側調査区　85
図版２　住居址06・埋甕・埋甕（断面）……　86
図版３　住居址06炉　礫出土状況・土器出土状況・完掘　……　87
図版４　住居址09・住居址13　……　88
図版５　住居址09　埋甕・住居址13　埋甕・住居址10（炉）　……　89
図版６　住居址07・住居址11　……　90
図版７　住居址12・住居址14・住居址15……　91
図版８　住居址22・住居址24　……　92
図版９　住居址24　遺物出土状況・炉　土器出土状況・炉　完掘　……　93
図版10　住居址18・住居址23・土坑06　……　94
図版11　住居址25・遺物出土状況　……　95
図版12　住居址17・住居址20・方形周溝墓01　……　96
図版13　方形周溝墓01　主体部　断面・主体部完掘・掘り方　……　97
図版14　住居址08・カマド１・カマド２……98
図版15　住居址19・カマド・遺物出土状況・P３・P４　……　99
図版16　住居址21・カマド・遺物出土状況……　100
図版17　遺跡近景（平成13年度撮影）・作業風景・現地見学会風景　…　101
図版18　遺物　住居址06（１・２・３・４）……　102
図版19　遺物　住居址06（７・８他）　……　103
図版20　遺物　住居址09（25・26）・住居址11（48）・住居址12（53）　……　104
図版21　遺物　住居址11・住居址12　……　105
図版22　遺物　住居址07・住居址10・住居址15　……　106
図版23　遺物　住居址13（68・69他）　……　107
図版24　遺物　住居址14・住居址16　……　108
図版25　遺物　住居址18・住居址22　……　109
図版26　遺物　住居址24（113～116）　……　110
図版27　遺物　住居址24（117・118他）　…　111
図版28　遺物　住居址24（120）・住居址25（138・135・136）　…　112
図版29　遺物　土偶・住居址23・遺構外　113
図版30　遺物　打製石斧・横刃形石器　…　114
図版31　遺物　磨製石斧・横刃形石器（２）・礫器他　……　115
図版32　遺物　石皿・磨石・石錘・敲石・剥片　……　116
図版33　遺物　石鏃・石錐・石核・両極石器・削器　……　117
図版34　遺物　石匙（329・330）・弥生時代石器・住居址06埋甕２内礫　……　118
図版35　遺物　住居址17・方形周溝墓01・住居址19　……　119
図版36　遺物　住居址19・住居址21・住居址08（土器・炭化米）　……　120

第1章　経　過

第1節　調査と調査に至る経過

（1）調査に至る経過

平成19年8月1日付　東京都港区虎ノ門二丁目2番1号　日本たばこ産業株式会社　不動産室長長越山光宏より、文化財保護法第93条による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。工事計画は飯田市箕瀬二丁目2561番地1において既存建物を解体し造成するものである。当該地は埋蔵文化財包蔵地箕瀬遺跡内に位置し、計画地の北側隣接地では平成13年に発掘調査が実施されており、縄文時代・平安時代の住居址等が確認されていることから、予備調査を実施し、発掘調査の計画立案・費用積算等を行なうこととなった。

平成20年2月13日付で、東京都港区虎ノ門二丁目2番1号　日本たばこ産業株式会社　不動産室長越山光宏と飯田市長　牧野光朗との間で飯田市埋蔵文化財包蔵地箕瀬遺跡予備調査業務の委受託契約を締結した。予備調査は同年2月25日に行ない、重機によりトレンチ調査を実施した。その結果、弥生時代の方形周溝墓等の遺構が検出された。そこで、工事主体者であるジェイティ不動産株式会社名古屋営業所と飯田市教育委員会との間で保護協議を行ない、平成20年度に発掘調査を実施することとなった。

（2）調査の経過

以上の経過を経て、平成20年4月7日付で埋蔵文化財発掘調査に関する委受託契約を締結し、同年4月15日より調査に着手した。

調査は排土の都合上、計画地を南北に二分して実施することにした。4月15日から16日にかけて北側部分について重機による表土剥ぎを行ない、その後、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づくグリット設定を、有限会社キリュウに委託し、同月21日から作業員による遺構検出・掘削等の作業を開始した。この間、市街地での調査のため見学者が多く、地元橋南地区のまちづくり委員会からも見学会実施の要望が寄せられたため、5月31日に現地見学会を実施した。見学者は150人と多く、その関心の高さが伺えた。6月4日までに北側部分の調査を終了し、翌5日から南側部分の調査に着手した。重機作業の結果、建物基礎や暗渠等水路による撹乱が著しく、南側はおよそ2分の1が破壊されていた。このため、遺構が現存する部分を調査対象とし、6月9日にグリット設定と作業員による遺構検出・掘削作業に着手した。6月24日にはほぼ現地作業が終了して機材等を撤収し、同月26日、重機による埋め戻し作業を行ない、現地作業を全て終了した。

翌平成21年度は4月6日付で整理作業に関する委受託契約を締結し、飯田市考古資料館にて資料の整理作業と報告書刊行を行なった。

（3）作業日誌

平成20年4月

15日（火） 北側重機作業開始。
16日（水） 重機作業、基準点設置。
17日（木） 雨天中止。
18日（金） 資材搬入。
21日（月） テント設営、資材搬入、遺構検出。
22日（火） 遺構検出、住居址06・08掘削。
23日（水） 住居址06掘削、遺物出土状況実測。住居址08掘削、出土状況撮影、実測。住居址10撮影、実測、掘削。住居址11掘削。
24日（木） 雨天中止。
25日（金） 住居址08遺物出土状況撮影、実測、炭化米取上げ。住居址10・11・14掘削。
28日（月） 作業中止。
29日（火） 祝日。
30日（水） 住居址06撮影、実測。 重機作業。住居址11掘削。

平成20年5月

1日（木） 住居址06炉断割り、実測、撮影。住居址08・11・14写真撮影。
2日（金） 住居址06炉・埋甕実測、撮影。住居址08カマド断割り。住居址07・12掘削、住居址11実測。
5日（月） 祝日。
6日（火） 祝日。
7日（水） 住居址12・15掘削。
8日（木） 方形周溝墓01他検出。住居址07掘削。住居址12・15撮影、実測。
9日（金） 方形周溝墓01周溝掘削、主体部検出状況実測、撮影。住居址07掘削。
12日（月） 方形周溝墓01周溝掘削、主体部木棺痕跡実測。住居址07撮影、住居址09掘削。
13日（火） 住居址09掘削。方形周溝墓01周溝・主体部掘削、断面実測、撮影。
14日（水） 遺物搬出等。
15日（木） 方形周溝墓01撮影、実測。
16日（金） 住居址09写真撮影、実測。住居址13・16掘削。住居址13・18掘削。住居址16・17実測。方形周溝墓01実測。
19日（月） 機材搬出、現地調査完了。
20日（火） 遺物搬出等。
21日（水） 住居址13・19・20掘削。
22日（木） 住居址13・20撮影、実測。住居址19・21掘削
23日（金） 住居址13埋甕撮影。住居址18・19・21・22掘削。
26日（月） 住居址19・21カマド撮影、実測。住居址18・22掘削、断面実測。
27日（火） 住居址19カマド・住居址18撮影、実測。住居址22・23掘削。
28日（水） 住居址22・23掘削、撮影。住居址19実測、調査区撮影。
29日（木） 雨天、図面整理等。
30日（金） 調査区撮影。

平成20年6月

2日（月） 方形周溝墓01主体部掘削、実測。住居址19カマド掘削、実測。住居址22・23実測。
3日（火） 雨天中止。

4日（水） 方形周溝墓01主体部掘削、写真撮影。
住居址09・13埋甕実測、掘削。
住居址19カマド掘削・実測。
5日（木） 方形周溝墓01主体部・土坑06実測、写真撮影。重機作業。
6日（金） 現場中止。
9日（月） 南側調査区検出、基準メッシュ設置。
住居址22炉写真撮影。
10日（火） 遺構検出、住居址24・25掘削。
11日（水） 住居址24・25掘削、断面実測。
12日（木） 雨天中止。
13日（金） 住居址24掘削、住居址25遺物出土状況撮影、実測。
16日（月） 住居址24遺物出土状況撮影。
17日（火） 住居址24掘削、遺物出土状況撮影。
18日（水） 住居址24断面実測、撮影、掘削。
住居址08掘り方掘削。
19日（木） 住居址24掘削。
20日（金） 住居址24掘削、撮影、実測。
23日（月） 住居址24、調査区撮影。
24日（火） 住居址24炉土器撮影、実測、掘削。
機材等搬出。
25日（水） 機材搬出。
26日（木） 重機作業。現場終了。

第2節　調査組織

（1） 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会　教育長	伊澤　宏爾			
調査担当者	下平　博行	羽生　俊郎			
調　査　員	澁谷恵美子	坂井　勇雄			
作　業　員	伊東　裕子	金井　照子	唐沢古千代	小島　康夫	小平まなみ
	椎名　祥二	杉山　春樹	関島真由美	竹本　常子	中田　恵
	中平けい子	中村地香子	服部　光男	樋本　宣子	福沢　育子
	福沢トシ子	松下　省三	松本　恭子	宮内真理子	森藤美知子
	森山　律子	吉川　悦子			

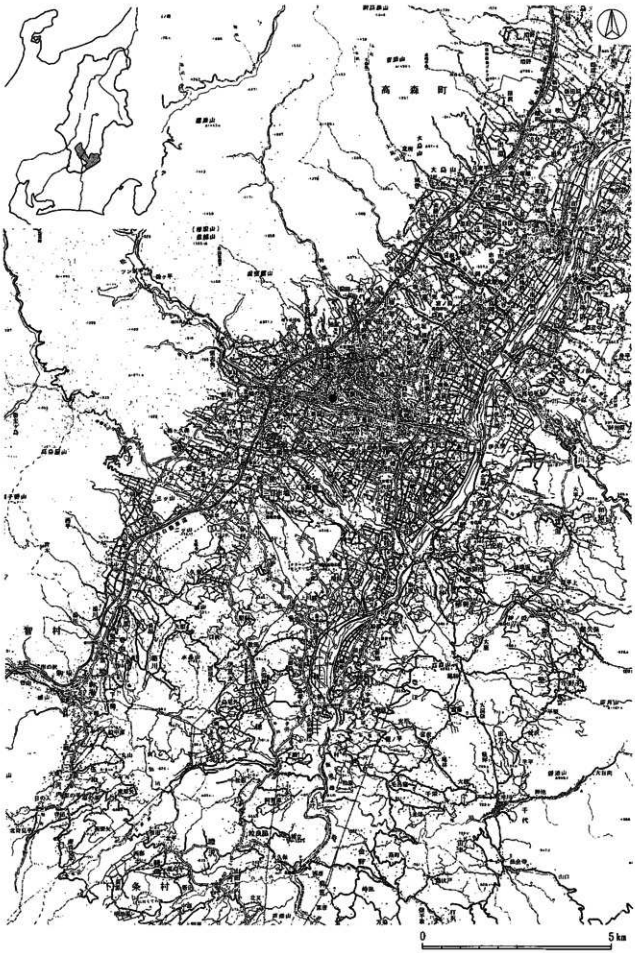
（2） 事務局

飯田市教育委員会

教育次長	関島　隆夫				
生涯学習・スポーツ課長	宇井　延行				
文化財保護係長	山下　誠一				
文化財保護係	宮澤　貴子	澁谷恵美子	下平　博行	坂井　勇雄	
	羽生　俊郎				

（3） 指導・協力

長野県教育委員会文化財・生涯学習課　高橋健太郎　贄田　明　村松　武　吉川　金利



挿図１　遺跡位置図

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境（挿図１）

飯田市は、長野県の南部を並走する中央アルプスと南アルプスに挟まれた、一般に伊那谷と呼ばれる伊那盆地の南部に位置する。これに赤石山地と伊那山脈に挟まれた、遠山郷と呼ばれる峡谷を含む。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央を天龍川が南流する。天龍川は約250万年前に流れ始め、約200万年前に南アルプスが、続いて約80万年前から中央アルプス・伊那山脈が急激に上昇を始めて形成された。この上昇は山地と沖積地の間に逆断層を形成させ、幾重もの段丘を発達させた。この段丘は伊那谷の地形的特徴であり、地質学上では、火山降下物の堆積を基準として、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの５つに大きく編年されている（下伊那地質誌編纂委員会　1976『下伊那の地質解説』）。一般的には、低位段丘Ⅰを境に上段（うわだん）と呼ばれる高燥地と、下段（しただん）と呼ばれる肥沃な低湿地に大別される。そして、天龍川に注ぎ込む支流により分断されて、見事な田切地形となっている。

地理的にみると、北は諏訪・塩尻地方に、南は天龍川と秋葉街道伝いで遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いに三河地方へと通じている。長野県のみならず東国の南の玄関口にあたる交通の要衝といえ、多くの街道が飯田を起点・通過している。上段か下段かは議論の分かれるところだが、古代には東山道が通過し、座光寺地区恒川遺跡群には伊那郡衙が設置された。伊那街道は明治以降三州街道と呼ばれ、三河高原から矢作川伝いに三河地方に通じ、現在は国道153号線となった。遠州街道は天龍川に沿い遠州地方へと通じ、現在の国道151号線がほぼ該当する。秋葉街道は松尾八幡で遠州街道から分岐し、伊那山脈を小川路峠で越え遠山郷に至り、青崩峠・兵越峠を越えて秋葉神社へ通ずる。現在の国道256・152号線がほぼ該当する。大平街道は県道　幸助・飯田線が該当し、飯田から松川沿いに中山道へと通ずる。これらの街道は原始より自然発生的にあったとみられ、中世末期から近世初頭にかけて整備されておよそ現在の路線となった。近世には中馬が発達し、これらの街道を多くの文物が流通した。

箕瀬遺跡は、松川左岸の段丘上、一般に「丘の上」と呼称される中心市街地の西端に位置し、調査地点は段丘の縁辺部にあたり、標高はおよそ500mを測る。北西には当市を代表する風越山（かざこしやま　標高1535m）を背負う。北から東側には中世末期から近世初頭に整備された飯田城とその城下町が段丘突端まで広がり、源長川が流れている。調査地東側には中世愛宕城跡があったといわれ、調査地点付近まで洞が入り込んでいる。南には松川が流れており、比高差およそ40mの段丘崖が形成されている。この辺りの段丘は、縁辺部ほど乾燥しており、上位の段丘崖下は湧水しやすく湿地化している傾向が強い。中央部は湿地と微高地が縞状に繰り返しており、遺跡の分布は複雑である。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、２月の平均気温は1.4℃、８月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量は年間雨量約1600㎜、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少ない太平洋気候の様相を呈している。

第２節　歴史的環境（挿図２）

旧石器時代の飯田市は、山本地区の石子原遺跡・竹佐中原遺跡において、旧石器時代初頭、あるいはそれ以前に遡る可能性のある石器群が出土している。この他の資料は断片的で、不明な点が多い。

市内では縄文時代に入ると、河川に面した低位段丘上に草創期の遺物が散在する。その後西側の山麓周辺に遺跡が集中し、時期が下るとともに台地先端へと遺跡の分布が広がる。縄文時代中期になると、山麓から下段にまで、爆発的に遺跡数が増加する。しかしながら縄文時代後期から晩期にかけては市内他地域と同様に遺跡数は極端に減少し、わずかに権現堂前遺跡のみとなる。この権現堂前遺跡は縄文時代後期後半から晩期が主体で、当該期の拠点的な遺跡と捉えられよう。

弥生時代に入ると、前述の権現堂前遺跡から東海的な条痕文系土器が出土しており、稲作の萌芽期にも人々が居住していたことが推測される。しかし、市内全域をみても弥生時代前期の遺跡数は少なく、遺跡数が増加するのは弥生時代後期に入ってからである。下段では比較的規模の大きい集落が形成され、上段では拠点的な大規模集落もみられるが、小規模な集落が散在する状況である。山麓の裾部や段丘崖下等で発達する湧水や、小河川を利用した水田耕作と台地上の畑作が生活基盤であったと推定される。

古墳時代中期以降、伊那谷では市内竜丘・松尾・上郷・座光寺地区に多くの古墳が築造される。そして、馬具と馬埋葬施設が多いことが特筆され、牧を生産基盤とした集団の存在が背景に推定されている。

続く奈良～平安時代では、座光寺地区下段の恒川遺跡群から正倉群等が確認されており、古代伊那郡衙に比定されている。当遺跡周辺では古代の調査事例が乏しく、状況は不明な点が多い。

文献により、当遺跡周辺は古代伊那郡麻績郷に含まれ、中世は郡戸荘飯田郷に含まれていたとみられる。鎌倉時代から室町初期の飯田郷の地頭は、阿曽沼氏であったことが、室町時代中期には地頭が阿曽沼氏から坂西氏と変わったことが推測される。坂西氏は、室町時代守護職の権威が衰退し在地領主の荘園支配や国衙領の横領が進む中では、飯田城築城や白山社奥社本殿を造営するなど、相当の勢力を有するようになっていったと考えられる。

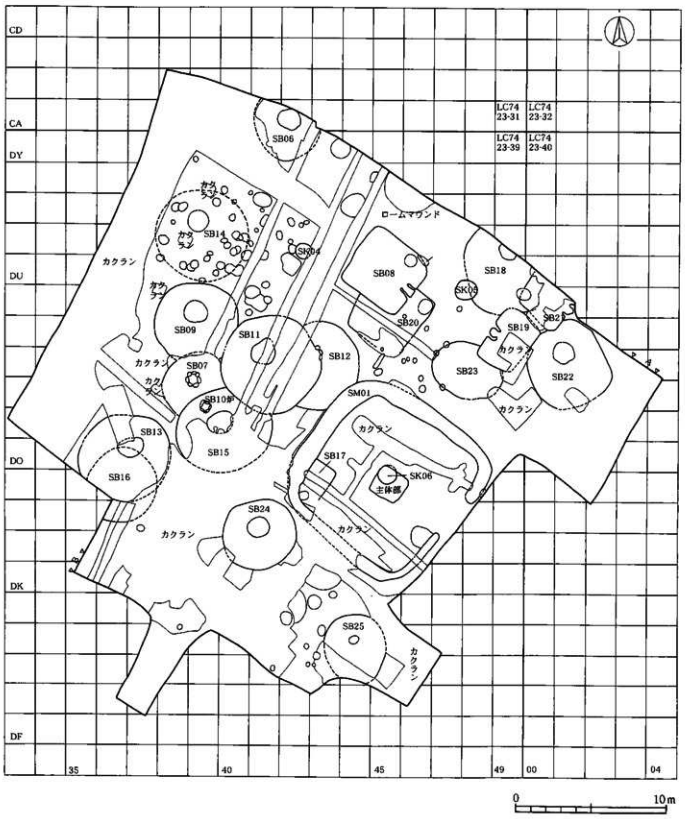
その後、飯田は武田・織田・徳川・豊臣・脇坂・堀氏等の支配を経て、飯田城と城下町からなる現在の小京都と呼ばれた町並みと、各地とを結ぶ街道が整備された。箕瀬は城下町の最外郭、惣構の内側にあたり、三州街道の出入口で桝形が設けられていた。飯田城の絵図によれば、調査地点周辺には足軽長屋があったとされる。近世を通じて飯田町や周辺の農村では、農業や生糸・和紙・元結・傘・柿・漆器などの小工業が発達し、さらに中馬により全国市場と結びつき、独自の発展を遂げた。

明治維新の後に飯田城は廃城となり、城下町は戦時下の空襲は免れたものの、昭和22年の飯田大火により灰塵に帰した。その後はGHQにより防災都市として復興し、防火帯道路や裏界線が設けられた。中心部のりんご並木はその後に整備されたもので、当市のシンボルとして現在も親しまれている。

当遺跡は、上述の如く近世に飯田城の城下町であったことがまず特筆される。それ以前中世には愛宕城の城下であったことも遺跡の特徴といえる。近年は隣接地の発掘調査により、縄文時代中期と弥生時代後期、平安時代の集落址であったことが確認され、城下町形成以前の原始・古代の様相も明らかになりつつある。

黒田柏原遺跡
城山城跡
今村遺跡
宮の上遺跡
今宮遺跡
原の城遺跡
見城垣外遺跡
宮前遺跡
高田遺跡
栗屋元遺跡
北垣外遺跡
羽根垣外遺跡
風越窯址
飯田城下町遺跡
藤山遺跡
城下町
方角東遺跡
飯田城跡
箕瀬遺跡
桜丸
三の丸
洞遺跡
出丸
二の丸
愛宕城跡
本丸
山伏丸
上茶屋遺跡
鼎中平遺跡
下山遺跡
上山遺跡群
0
500m

挿図２　調査区位置図


CD
CA
DY
DU
DO
DK
DF
35
40
45
49
00
04
LC74 23-31
LC74 23-32
LC74 23-39
LC74 23-40
SB06
SB14
SK04
ローム マウンド
SB08
SB18
SK05
SB20
SB19
SB21
SB09
SB11
SB12
SB23
SB22
SB07
SB10
SM01
SB13
SB15
SB17
SK06
主体部
SB16
SB24
SB25
カクラン
0
10m

挿図３　遺構分布図

第3章　調査結果

第1節　調査区の設定

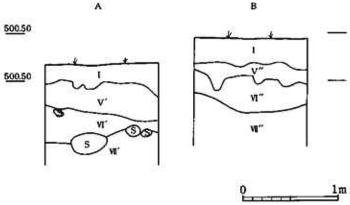
今次調査地点は飯田市箕瀬二丁目2561番地1、発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による区画、Ⅷ－Ｌｃ74　23－39他に位置する。調査範囲の面積はおよそ1500㎡である。

第2節　基本層序（挿図3・4）

平成13年度調査地点の層序に対応させている。そのため、今次調査区の観察地点では現れていない層がある。同一の層でも様相が異なる場合は「´」をつけて表した。地山は下層ほど砂地が強くなる傾向がある。Ⅵ・Ⅶ層中に花崗岩と石英斑岩の円礫～亜角礫を含む。遺構にも礫が露出していたり、礫の抜穴が残る場合もある。

周辺の調査事例からして、遺構の掘り込みはⅤ層から掘り込んでいるものとみられるが、平面的な検出作業が困難であるため、Ⅶ層上面まで掘下げて検出作業を行なった。

調査地は段丘の縁辺部に位置するため乾燥しているが、西側ではかつて水田耕作が行なわれたとのことであり、水田層が部分的に残っていた。全体的に水田耕作と建物基礎による撹乱が著しく、特に西側と南側では遺構が完全に破壊されて確認できない状況であった。



層位	色	土質	しまり/粘性	備考
Ⅰ				表土・造成土・攪乱
Ⅱ				旧水田層、平成13年度調査地点
Ⅲ				旧水田鉄分沈殿土、平成13年度調査地点
Ⅳ	7.5YR3/1 黒褐	LiC	△/○	旧耕土、平成13年度調査地点
Ⅴ	7.5YR4/4 褐	HC	△/○	漸移層、平成13年度調査地点
Ⅴ'	10YR4/3 にぶい黄褐	SiCL	○/△	漸移層、径10mm以下の花崗岩を1%含む
Ⅴ''	2.5Y4/2 暗灰黄	SCL	△/△	漸移層、径5mm以下の花崗岩を10%含む
Ⅵ	7.5YR4/3 褐	HC	○/○	地山、平成13年度調査地点
Ⅵ'	10YR5/6 黄褐	L	○/△	地山、径1cm以下の花崗岩を1%含む
Ⅵ''	2.5Y5/6 黄褐	SL	△/×	地山、径1cm以下の花崗岩を30%含む
Ⅶ	10YR5/6 黄褐	SL	○/△	地山、拳大～径50cmの亜角礫を1%含む 径1cm以下の花崗岩を1%含む
Ⅶ'	2.5Y5/4 黄褐	LS	△/×	地山、径1cm以下の花崗岩を4%含む 拳大の亜角礫を含む層

挿図4　基本層序

第3節　遺　構

（1）　縄文時代

①住居址06（SB06　挿図5・24・25　巻頭図版4　図版2・3・18・19・34）

CA42を中心に位置し、半分近くが調査区外である。各所で撹乱、削平を受けており平面形は不明、規模は残存値で（3.6）×（3.3）m、主軸はN18°Wを示す。壁は一部分しか確認できないがゆるやかに立ち上がり、検出面から13cmを測る。床は貼床で堅く、周溝は部分的であるが2条確認されていることから、建替えまたは重複が考えられる。内側の周溝は幅15～20cm、深さ7～10cm、外側の周溝も幅は同様、深さは4～9cm、いずれも北側で途切れている。柱穴は大小8基確認されており、P1～4が主柱穴とみられる。

炉址は石囲炉で、炉縁石は全て抜かれている。掘り方の規模で、155×125cmの楕円形に近い平面形を呈し、深さは37cmを測る。底部の北側と炉址の南側の床面に焼土が認められた。底部付近には土器の底部を中心とした破片が粗雑に敷かれており、その上に扁平な炉縁石が廃棄されていた。

埋甕が住居址の南端で2基重複して設置されていた。断面観察では、埋甕2が埋甕1を切っている。埋甕1は、土器3・4（番号は遺物図の遺物番号に対応。遺構図中の番号とは異なる。以下同じ。）を用い、平均値で5cm、50g程度の礫を29個甕内部に充填していた（挿図5　下段表参照）。礫の石材は特殊なものではなく在地系のものであり、一部を除き大きさも揃っている。目的は不明だが、意図的に詰め込んだものとみられる。そのうち3点（234・286・288）には加工の痕跡があり石器として認められる。土器3は胴部のみだが、頸部の割れ口は、割った後に平滑に処理している可能性がある。埋甕2は、脚部を除去した台付土器2を、口縁を上に斜めの状態で埋納されており、石皿状の花崗岩を伏せて蓋をしている。

覆土は単層で、覆土出土遺物は投棄とみられ、中央で多く出土している。8の一部と9～12は炉から出土している。8と8－2は同一個体である。

本遺構は、中期後葉に位置付けられるが、炉址出土の1と埋甕2の2では、若干の時期差が存在する可能性が残る。

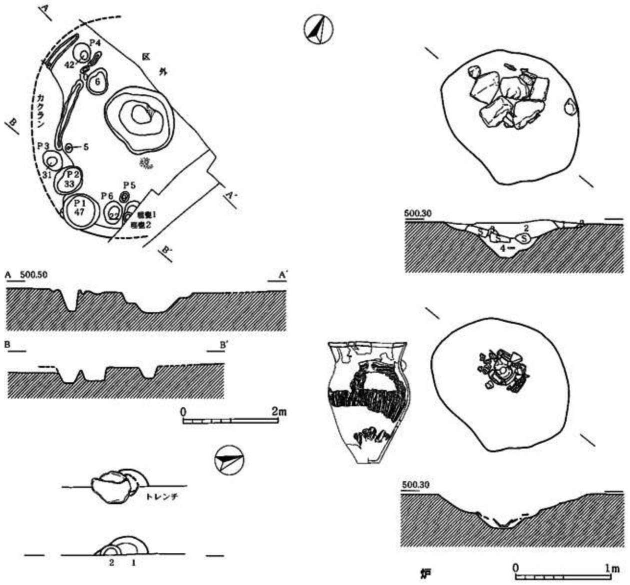
②住居址07（SB07　挿図6・25　図版6・22）

DQ39を中心に位置する。住居址09・10・11・15に切られている。プランはほぼ円形、規模は（3.2）×4.2m、主軸はN20°Wを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは26cmである。床は全体的に貼床してあり堅固である。周溝は全面に巡らしてあり、幅12～20cm、深さ3～9cmを測る。P1～P4までが主柱穴とみられる。

炉址は石囲炉で、やや扁平な川原石を楕円形に組む。規模は、炉縁石の内側で70×55cm、炉縁石からの深さは27cm、掘り方（炉縁石外側）では105×105cmを測る。焼土は底部全般に疎らである。

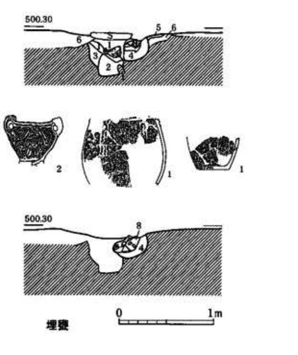
覆土は単層で、上部全面に礫が混入している。全般に遺物は少ない。

炉の形態、重複、遺物等からして、本遺構は中期後葉に位置付けられる。



炉

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR2/1 黒	SiC	×/×	径5mm位の焼土粒、炭化物含む
2	10YR3/2 黒褐	SiC		炭化物の焼土粒で土器含む
3	2.5YR5/8 明赤褐	SiC		焼土多い
4	10YR3/1 黒褐	SiC		炭化物等混入



埋甕

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR3/2 黒褐	SiC	○/△	炭化物径5mm以下を1%含む地山ブロック径5mm1%含む。埋甕2埋土
2	10YR3/1 黒褐	SiC	○/△	埋甕埋土
3	10YR4/3 にぶい黄褐	SiCL	○/○	径1cmの地山ブロックを4%含む。埋甕埋土
4	10YR4/3 にぶい黄褐	SiCL	△/○	径1cmの地山ブロックを20%含む。埋甕1埋土
5	10YR5/6 黄褐	SiCL	○/○	SB貼床
6	10YR4/2 灰黄褐	SiC	△/△	径2cm以下の地山ブロックを30%含む。SB掘り方
7	10YR4/2 灰黄褐	SiC	○/△	径1cmの地山ブロックを3%含む。埋甕埋土。径5cm以下の扁平礫を甕内に充填
8	10YR2/1 黒	SiC	○/△	埋甕埋土。径5cm以下の扁平礫を甕内に充填

番号	石材	法量(mm・g) 縦	横	厚	重量	備考	番号	石材	法量(mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
224	硬砂岩	56	49	20	57	磨石		変輝緑岩	59	35	14	48	
285	砂質片岩	58	53	27	108	凹石		花崗岩	51	41	13	47	
288	砂質片岩	60	55	25	104	礫器		閃緑岩	48	35	19	47	
	変輝緑岩	50	49	23	98			閃緑岩	46	38	16	41	
	泥質片岩	70	48	21	81			変輝緑岩	46	35	15	40	
	石英斑岩	53	44	29	79			変輝緑岩	48	42	16	38	
	花崗岩	49	48	21	76			変輝緑岩	54	33	12	33	
	変輝緑岩	59	43	16	73			砂質片岩	39	32	19	28	
	花崗岩	68	44	19	70			泥質片岩	41	35	14	22	
	砂質片岩	57	52	17	69			変輝緑岩	37	25	15	18	
	花崗岩	51	44	19	68			泥質片岩	42	27	10	16	
	砂質片岩	50	43	16	67			泥質片岩	30	23	13	9	
	花崗岩	64	39	19	58			泥質片岩	34	20	8	8	
	泥質片岩	49	47	13	56			緑色岩	38	10	3	2	
	変輝緑岩	59	40	16	55								

挿図5　住居址06

③住居址 09（SB09　挿図７・26　巻頭図版４　図版４・５・20）

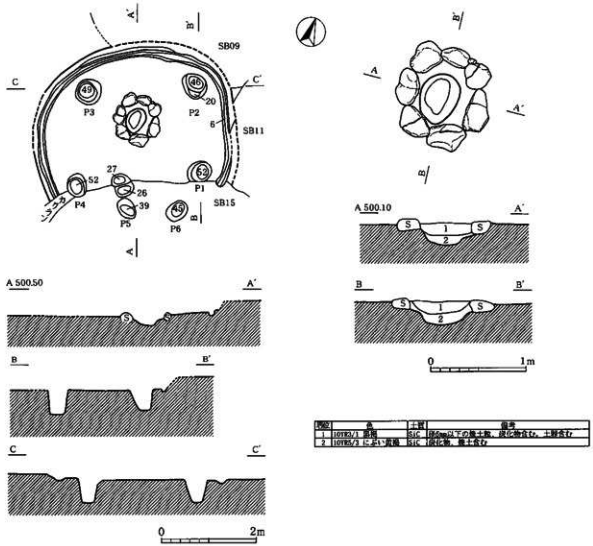
DS39を中心に位置し、住居址07を切り、住居址11に切られる。プランは横長の楕円形を呈し、規模は(4.9)×5.5m、主軸はN14°Wを示す。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは10cmを測る。貼床は全体的に堅固である。周溝は部分的に切れているものの全周に巡らされており、幅は14～22cm、深さは11cmを測る。主柱穴は、P１～P３、P５～P７であろう。

炉址は中央奥壁寄りに位置し、石囲炉とみられるが炉縁石は抜取られている。掘り方は楕円形に近い平面形で、160×140cm、床面から38cm掘り込んでいる。焼土は中央部に分布し、濃密ではない。

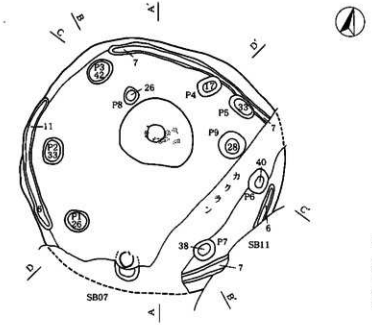
埋甕は南端に１基確認された。正位に設置され、蓋はなかった。土器25は口唇部のみを全体的に丁寧に打ち欠いている。

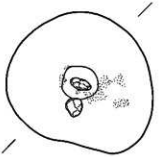
遺物は覆土の中央付近、上層を中心に出土している。破片が多く投棄とみられるが、遺構との時期差はほとんどないものとみられる。在地系の土器の数量が卓越していることが特徴的である。

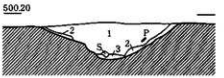
当住居址は、出土遺物から中期後葉に位置付けられる。

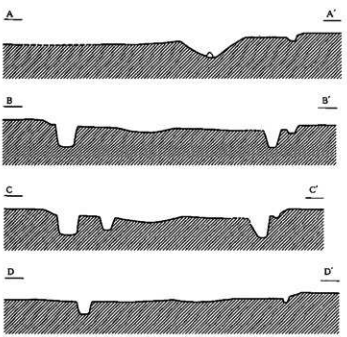


挿図６　住居址 07



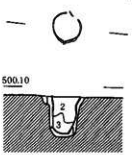






SB09

0 2m



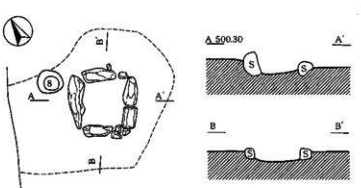
0 1m

SB09 炉

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR5/2 灰黄褐	SiC	×/×	径5mm～1cm大のロームブロック、炭化物、土器含む
2	10YR5/4 にぶい黄褐	SiC		ロームブロック多量に含む
3	10YR5/8 明赤褐			焼土粒多量に混入

SB09 壁壁

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR5/2 灰黄褐	SiC	×/×	ロームブロック含む
2	10YR4/1 褐灰		×/×	ロームブロック 径2cm少し含む
3	10YR5/3 にぶい黄褐		×/×	ロームブロック多量に混入 炭化物なし



SB10炉

0 1m

挿図7 住居址 09・10

④住居址 10（SB10　挿図７・25　図版５・22）

DQ39に位置する。検出面で石囲炉とその周囲で僅かに床面と確認したに留まる。住居址07・15を切る。住居址の具体的な規模等は不明。炉址の主軸を採用すればN59°　W、またはこれに直行する方角となる。

炉址は、棒状の礫を方形に組んでいる。炉縁石の内側の寸法は50×42cm、床面からの深さは12cm、外側で73×73cmを測る。焼土は疎らである。

遺物は、少量である。図化したもののほか、土器の無文部がある。

本遺構は、炉の形態と出土遺物から、中期後葉に比定される。

⑤住居址 11（SB11　挿図８・27　図版６・21）

DR41を中心に位置する。住居址07・09・12・15を切り、トレンチ状の撹乱を受けている。平面形は隅丸の５角形、規模は6.4×6.3m、主軸はN45°　Wを指している。今次調査区内で最も規模が大きい。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面からの深さは37cmである。床は全体的に強固に締められているが、貼床ではない。周溝は全周に及び、幅は10～20cm、深さは９cmを測る。主柱穴は５又は６基、P４とその両脇の小柱穴は入口施設の可能性がある。P１・２の底部は部分的に硬化面があり、柱のあたりと考えられる。P６は底部が不整形であるが、住居址12の柱穴と切り合っているためである。

炉址は、中央北よりに石囲炉が設置されている。炉縁石は一部のみ残っており、他は抜取られたか、または撹乱によるものか、残っていない。掘り方の規模で150×(180)cmの逆台形を呈し、炉縁石から底部までの深さは55cmと、かなりの規模であったとみられる。底部は比較的広範囲が焼土化しており、特に下端周辺が著しい。

覆土はレンズ状の堆積をしており、１層から比較的多くの遺物が出土している。遺物の量に対して復元できた個体は少なく、投棄されたものであろう。図化したものは少ないが、時期決定はP６出土の36を優先したが、覆土出土遺物の多くはこれよりも若干新しい傾向がある。逆にこれよりも古い遺物があるが、重複する住居址12の混入と考えられる。

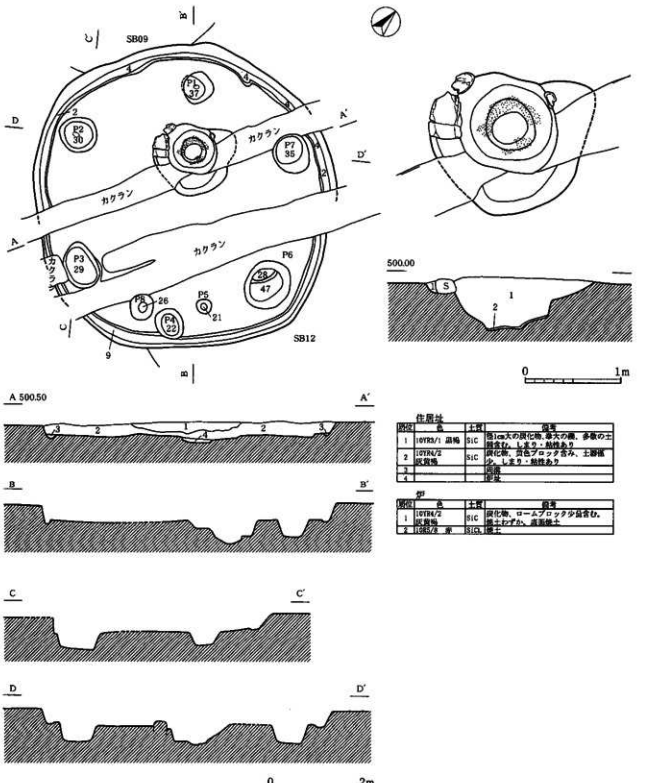
本遺構は中期後葉に位置付けられる。

⑥住居址 12（SB12　挿図９・28　図版７・21）

DR43を中心に位置し、住居址11、方形周溝墓01に切られる。平面形は円形を呈するものとみられ、5.8×(2.4)m、主軸はN21°　Wを指す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面から床面までの深さは30cmである。床は全体的に堅固である。P５の北側に花崗岩の礫塊があるが、地山(Ⅵ・Ⅶ層)に自然に含まれている礫で、遺構・遺物ではない。周溝は外側と内側の２条が確認された。外側の周溝は全周しており、幅25～30cm、深さ15cm、内側のそれは幅25～30cm、深さ26cmを測る。主柱穴は５または６基とみられる。P７は住居址11の柱穴と重複している。周溝や柱穴の状況から建物の建替えが行なわれたとみられる。

炉址は中央北よりに石囲炉がある。川原石を用いた炉縁石が３つ残っているが、他は住居址11に切り取られており、火床も住居址11の周溝に切られている。土層断面は不規則な堆積をしているが、重複遺構の影響か、遺構の縁辺部のためかよく分からない。

覆土は単層で、上層の中央部より遺物が多くは破片で出土しており、投棄とみられる。171は今次調査



住居址

期位	色	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐	SiC	径1cm大の炭化物、最大の礫、多数の土器含む。しまり・粘性あり
2	10YR4/2 灰黄褐	SiC	炭化物、黄色ブロック含み、土器微少。しまり・粘性あり
3			周溝
4			炉址

炉

期位	色	土質	備考
1	10YR4/2 灰黄褐	SiC	炭化物、ロームブロック少量含む。焼土わずか。直面焼土
2	10BG5/8 赤	SiCL	焼土

挿図8　住居址 11

では少なかった土偶の右腕部である。

炉址の形態や覆土であるが遺物からして、当住居址は、中期後葉に位置付けられる。

⑦住居址 13（SB13　挿図10・29・30　巻頭図版５　図版４・５・23）

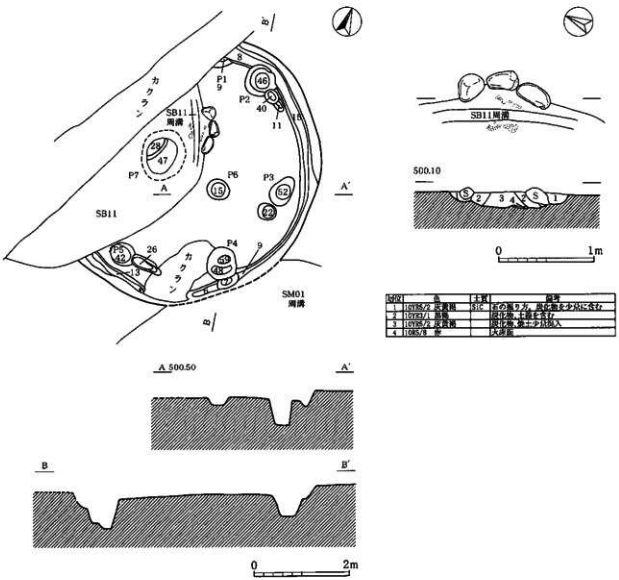
調査区の西端、DO36を中心に位置し、極僅かに未調査部分が残る。住居址16に切られ、また多くの攪乱を受けている。平面形は若干変形した円形である。規模は6.0×5.6m、主軸はN15°Eを指す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面からの深さは38cmを測る。床は貼床はなされていないが、堅固であり、周溝はほぼ全周して南側で途切れる。幅およそ20cm、深さは15cm、主柱穴は６基。

炉址は中央北よりにあり、石囲炉である。炉縁石は一部抜かれており、部分的に残る。攪乱により原位置を失っている可能性もある。掘り方の規模は、(124)×172cmの長方形で、炉縁石から底部までの深さは45cmを測る。底部の部分的に焼土が認められたが、あまり強くない。

埋甕が１基南端に設置されている(68)。深鉢の胴部以下を正位に埋納している。

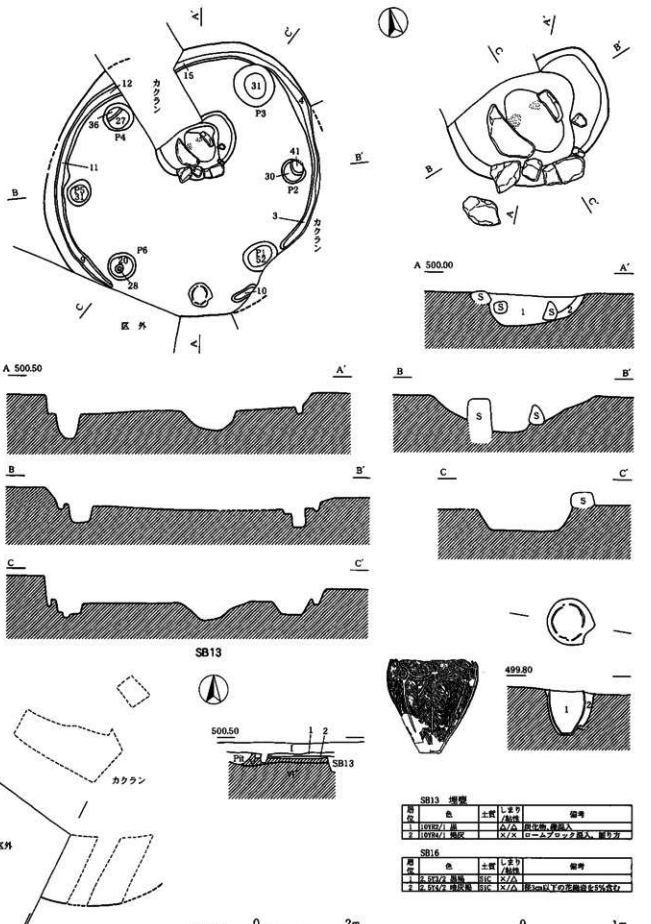
覆土の堆積状況は、攪乱が著しいため不明であった。遺物は上層中央部から多く出土し、床面付近からも若干出土している。いずれも破片が多く、時期差があることから投棄されたものであろう。住居址16の混入もあると思う。75は、住居址24覆土出土の124と同一個体とみられる。

本遺構は埋甕の年代からして、中期後葉に位置付けられる。



図位	色	土質	説明
1	1CYR5/2 灰黄褐	SiC	石の無り方、炭化物を少量に含む
2	1CYR3/1 黒褐		炭化物、土器を含む
3	1CYR5/2 灰黄褐		炭化物、焼土少量混入
4	1CR5/8 赤		大炉盆

挿図９　住居址 12



SB13 堆積

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR2/1 黒		△/△	炭化物、焼土粒入
2	10YR4/1 褐灰		×/×	ロームブロック混入、貼り方

SB16

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	2.5Y5/2 暗褐	SiC	×/△	
2	2.5Y5/2 暗灰褐	SiC	×/△	径3cm以下の炭化物を5%含む

挿図 10　住居址 13・16

⑧住居址 14（SB14　挿図11・28　図版７・24）

調査区の北西側、DV39を中心に位置する。大部分が削平されているため、炉址と柱穴と床面の一部を確認したに留まり、図上で復元した。プランは不明であるが、円形または多角形とみられる。規模は、主柱穴の距離で測れば(5.4)×(4.8)ｍとなる。主柱穴は６基、建替えられているものとみられる。

炉址は石囲炉とみられ、炉縁石は残っていない。掘り方は138×143cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。底部は底部が全体的に比較的強く焼けている。

遺物はＰ７（DW38Ｐ１）から62・65が、炉から63・64・66・67が、Ｐ１（DV38Ｐ１）から329・254が出土した。

本遺構は出土遺物からして、中期後葉に位置付けられる。

⑨住居址 15（SB15　挿図11・30　図版７・22）

DP39を中心に位置し、住居址07を切り、住居址10・11に切られ、半分以上は撹乱で壊されている。プランは円形とみられ、規模は(2.9)×6.4m、主軸はN20°Ｗを指す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、高さは27cmを測る。床は堅固で、周溝は２条確認された。外側の周溝は全周しており、幅25cm、深さ19cmを測る。内側の周溝は北側にのみ確認され、幅20cm、深さ10cmを測る。主柱穴は４基残っており、復元すれば６基になろうか。周溝と柱穴の重複からして、建替えられているものとみられる。

炉址は中央北よりに石囲炉が確認された。炉縁石はほとんど抜取られている。掘り方は(150)×(175)ｍを測り、楕円形を呈するものとみられる。一部残る炉縁石は花崗岩であるが、自然風化によるものか被熱によるものか表面が剥離している。火床はかなり強く焼けており、赤化が著しい。

覆土は単層で、遺物は全般的に少ないが撹乱による影響も大きいとみられる。86・87は炉址よりの出土で、同一個体の可能性がある。

本遺構は、遺物から中期後葉に位置付けられる。住居址11とは同時期であるが、重複関係からして、住居址11に先行する可能性が高い。

⑩住居址 16（SB16　挿図10・30　図版24）

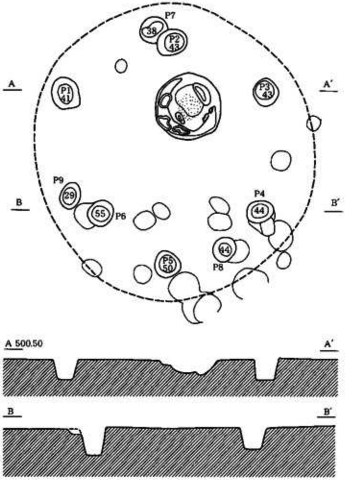
調査区の西端、DN36を中心に位置し、住居址13を切る。検出面直下に床面があるため、多くの撹乱を受けて遺存状況は悪い。住居址13を掘削中に一部床面を把握したに留まり、遺構の詳細は不明である。住居址13と重複する部分では明瞭な貼床が確認されたが、断面掲載部分では不明瞭であった。

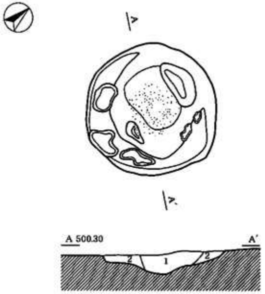
撹乱と重複により、覆土の状況は不明、遺物は住居址13のものが混在している可能性がある。逆に、住居址13の70は、本址の遺物の可能性がある。

本遺構は、遺物の年代からすれば中期後葉に位置付けられる。

⑪住居址 18（SB18　挿図12・31　図版10・25）

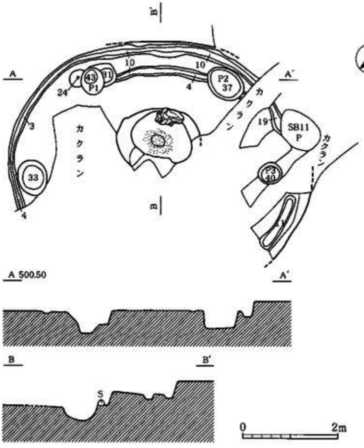
DU49を中心に位置し、およそ４分の１は調査区外のため未調査である。住居址19・21、土坑05に切られる。プランは隅丸方形を呈すものとみられ、規模は(5.8)×(4.2)ｍ、主軸はN11°Ｗを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは20cmである。床は固く叩き締められている。周溝は部分的に途切れるが、ほぼ全周しており、幅20cm、深さ19cmである。主柱穴は２基確認されており、おそらく全体で４基にな

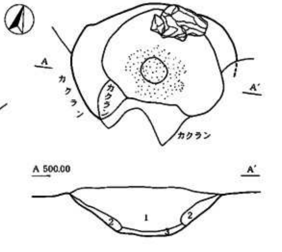




層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR3/2 黒褐	SiC	○/△	炭化物径1mm、焼土粒径1mmを1%含む
2	10YR4/2 灰黄褐	SiC	○/△	炭化物径2mmを1%含む。地山ブロック（ローム）径5cmを10%含む。炉縁石の抜り方

SB14





層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR3/1 黒褐	SiC		炭化物、黄色ブロック含む。しまりなし
2	10YR5/3 にぶい黄褐	SiC		黄色ブロックを多量に含む。石の抜取り痕か
3	10YR5/2 灰黄褐	SiC		焼土粒、炭化物多量に含む

SB15 0 1m

挿図 11　住居址 14・15

るものとみられる。P2の底部には柱のあたり（図中網部）が確認された。

炉址は中央北よりにあり、半分が調査区外である。石囲炉とみられるが、炉縁石は抜かれている。掘り方の規模で、(115)×(110)cm、床面からの深さ52cmを測る。底部はやや赤化している。

覆土はレンズ状に堆積しており、上層中央から土器片・礫等が多く出土した。投棄または流れ込みとみられる。土器の年代は、中期中葉、中期後葉と年代幅が大きい。炉址からは105が出土している。

本遺構の年代は、中期後葉である。

⑫住居址 22（SB22　挿図12・31　図版8・25）

調査区の東端、DR01を中心に位置する。住居址19・21に僅かに切られ、部分的に撹乱を受けている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は(5.2)×5.0m、主軸はN23°Wを示す。壁はゆるやかに立ち上がり、床との比高は36cmを測る。床は堅く叩き締められている。周溝の幅は25cm、深さ16cm、全周する。主柱穴は4基が四隅にある。

炉址は中央北側にあり、石囲炉である。炉縁石は全て抜かれている。平面形は掘り方ではほぼ円形であるが、抜取り痕より内側では一辺70cm前後の方形を呈す。掘り方の規模は142×140cmである。焼土は比較的薄く、底部に部分的に残る。

覆土はレンズ状に堆積し、1層中央部を中心に礫や遺物が比較的多く出土した。投棄と考えられ、土器は破片が多い。石器では、当地方では稀な蛇紋岩に類似した石材の磨製石斧282、使用痕著しい石匙330が注目される。

本遺構の年代は、覆土出土遺物から中期後葉に位置付けられる。

⑬住居址 23（SB23　挿図13・34　図版10・29）

DR48を中心に位置し、住居址19、中世の小柱穴に切られる。部分的に撹乱を受けており、覆土も不鮮明であったため断面を中心に把握した。4.6×3.7mの楕円形を呈し、主軸はN67°Wを示す。壁はゆるやかに立ち上がり、高さは29cmである。貼床はなく、地山との区分は不明瞭であった。明確な住居内施設は確認できなかった。

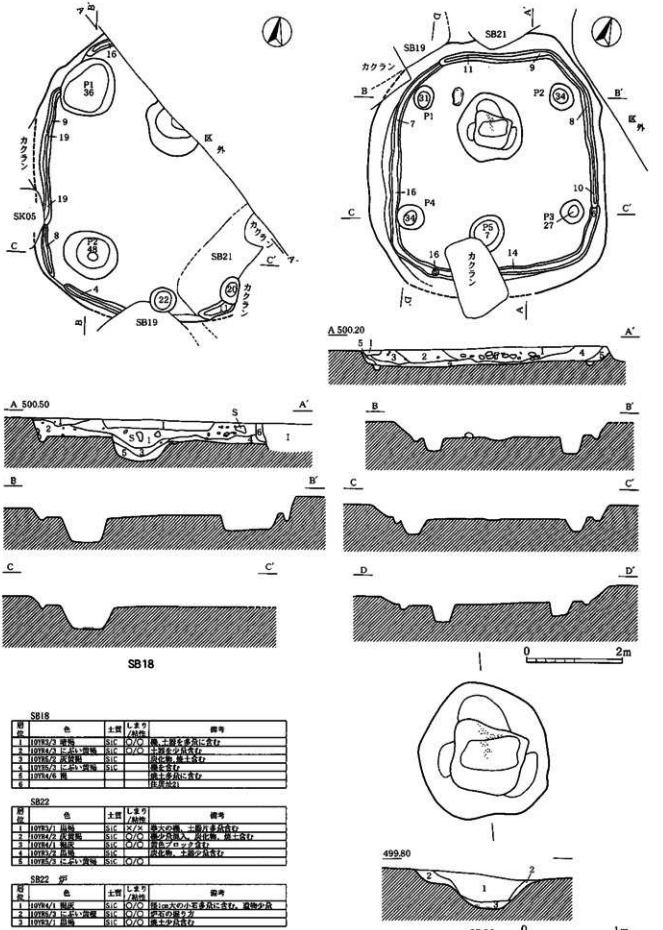
覆土の堆積状況は、浅く、また撹乱を受けており不明である。遺物は少量出土し、投棄または流れ込みと考えられる。重複する住居址19からも中期中葉の163が出土している。

時期は、遺物と形態から中期中葉に位置付けられる。

⑭住居址 24（SB24　挿図14・15・32～34　巻頭図版3・5　図版8・9・26～28）

DL41を中心に位置する。重複関係はないが、撹乱・削平を受けている。平面形は隅丸の五角形を呈す。規模は4.8×4.5m、主軸はN12°Wを指す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、深さは58cmを測る。床は、貼床で固く叩き締められているが、一部南西側で凹凸の激しい個所があった。周溝は東・西・北の3辺で確認され、幅20cm前後、深さ17cm、南西側で27cmと深い個所がある。主柱穴は4基、入口部分にも1基穴がある。

炉址は石囲炉とみられ、中央北よりに設置されている。炉縁石は全て抜取られており、掘り方の規模で132×145cmの円形を呈し、掘り方の内側で一辺80cm前後の方形となっている。深さは43cm。炉の内側



SB18

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR3/3 褐色	SiC	○/○	礫、土器を多含に含む
2	10YR4/3 にぶい黄褐	SiC	○/○	土器を少量含む
3	10YR5/2 灰黄褐	SiC		炭化物、焼土含む
4	10YR5/3 にぶい黄褐	SiC		礫を含む
5	10YR4/6 褐			焼土多量に含む
6				地山ローム

SB22

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR3/1 黒褐	SiC	×/×	極大の礫、土器片多量含む
2	10YR4/2 灰黄褐	SiC	○/○	礫少量混入、炭化物、焼土含む
3	10YR4/1 褐灰	SiC	○/○	貼床ブロック含む
4	10YR3/2 黒褐	SiC		炭化物、土器少量含む
5	10YR5/3 にぶい黄褐	SiC	○/○	

SB22 ㎡

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR4/1 褐灰	SiC	○/○	径1cm大の小石多量に含む、炭化少量
2	10YR5/3 にぶい黄褐	SiC	○/○	炉床の貼り床
3	10YR5/1 褐灰	SiC	○/○	焼土少量含む

挿図 12　住居址 18・22

に土器片が丁寧に敷き詰められていたことは特筆される。土器の底部を炉の底部中央に据えている。全部で113～115の３個体使用されている。敷き詰められた土器の上面には、２次焼成の痕跡は認められず、焼土・炭化物の堆積も濃密ではなかった。また土器としての使用時に付着したであろう、お焦げが残っていた。火床は、土器片の下位、遺構の底部が火床である。焼土は薄い。

覆土はレンズ状の堆積で、遺物は２層の中央部から最も多く出土している。炉址出土以外は、床面付近のものも投棄と考えられるが、炉址直上から出土した117は遺棄かもしれない。118は、全て同一個体であるが、接合しない。図の器形ではなく、もっと器高が低いので注意して欲しい。120は、明らかに口縁部を欠いているが、割れ口に磨き状の光沢があり、口縁として再生させた可能性がある。124は75と同一個体とみられる。

本遺構は、炉址出土土器からして、中期後葉に位置付けられる。

⑮住居址 25（SB25　挿図13・35　巻頭図版６　図版11・28）

調査区の南端、DI44に位置する。重複はないが攪乱・削平を受けている。プランは楕円形を呈するものとみられ、規模は(4.0)×(3.8)m、主軸はN17°Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、14cmである。床は部分的に硬化面があるものの、軟弱で不鮮明である。主柱穴はP１～６が考えられるが、配置、深さが不規則でよくわからない。周溝は確認されなかった。

炉址は中央北よりに位置し、石囲炉とみられる。炉縁石は南側半分が抜取られている。規模は、掘り方で52×66cmの楕円形を呈し、炉縁石の内側で－×23cm、深さは炉縁石の上から25cmを測る。焼土は僅かで火床は不明瞭である。

覆土はレンズ状の堆積をする。遺物は１層から比較的多く出土した。投棄と考えられる。北陸系である138、東海系の153～155は、当地方に特徴的な胎土・焼成ではなく、搬入品の可能性が高い。138は大変脆く、細かく割れてしまい、十分な復元ができなかった。153・154は同一個体である可能性が高い。

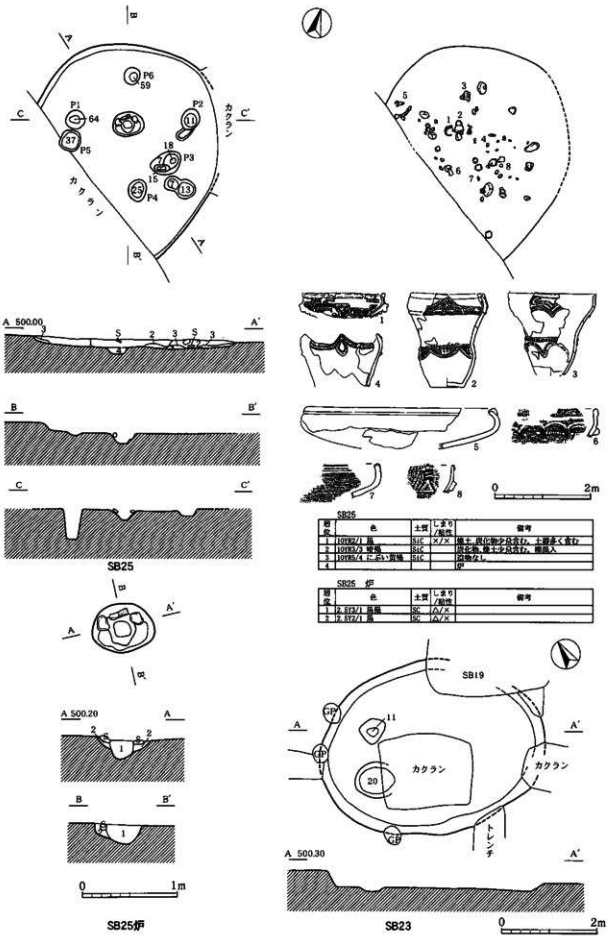
本住居址は出土遺物より、縄文時代中期中葉に比定される。

⑯土坑 06（SK06　挿図15　図版10）

DN45に位置する。方形周溝墓01の主体部に切られている。平面は直径125cmの円形を呈し、断面は底部が若干広がるフラスコ状である。深さは71cmを測る。底部より縄文土器とみられる破片が出土したが、詳細な時期は不明である。縄文時代の貯蔵穴と考えられる。

⑰小穴（挿図21～23）

DU40の周辺には比較的小規模な穴が分布する。覆土や出土遺物等からして、縄文時代中期の遺構と考えられる。周辺の状況から、住居址14のように床面・壁が削平された住居址の柱穴も含まれているとみられる。しかし、具体的に住居址として把握することはできなかった。



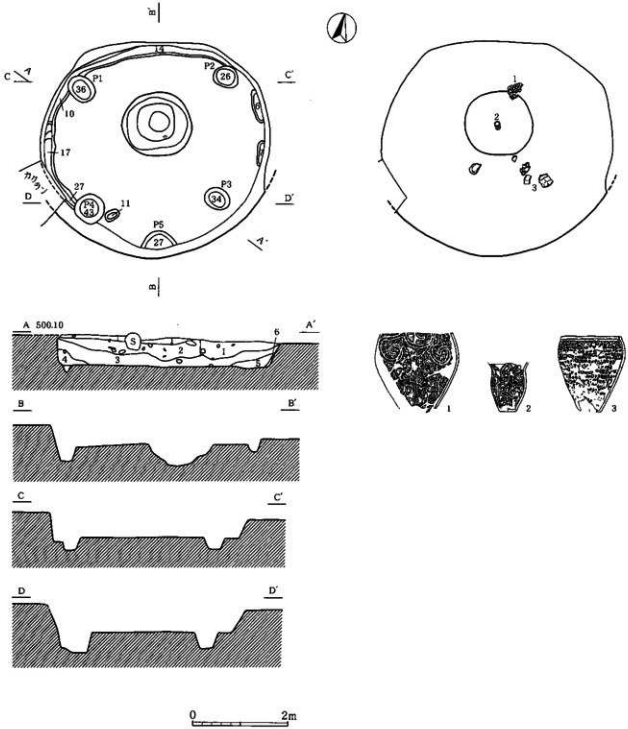
SB25

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR2/1 黒	SiC	×/×	焼土、炭化物少量含む。土器多く含む
2	10YR3/3 暗黒	SiC		炭化物、焼土少量含む。焼黒入
3	10YR5/4 にぶい黄橙	SiC		炭物なし
4				炉

SB25 炉

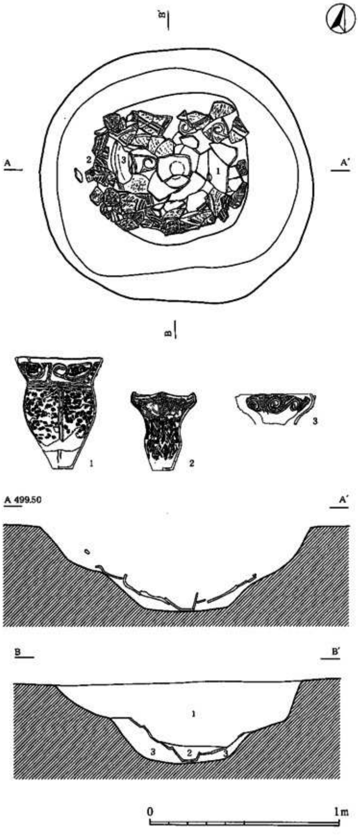
層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	2.5Y3/1 黒黒	SC	△/×	
2	2.5Y2/1 黒	SC	△/×	

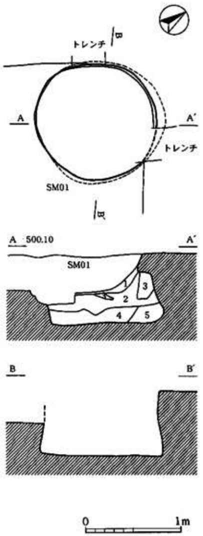
挿図 13　住居址 23・25



時代	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR2/3 黒褐	SiC	○/△	径3mmの花崗岩を2%含む。炭化物を2%含む
2	10YR2/2 黒褐	SiC	○/△	〃、炭化物を3%含む。炭物も多い
3	10YR2/2 黒褐	SC	○/△	径1cm以下の花崗岩を25%含む
4	2.5Y2/1 黒	SC	○/△	〃
5	10YR2/1 黒	SiC	○/△	径3mm以下の花崗岩を2%含む
6	10YR2/1 黒	SiC	○/△	

挿図 14　住居址 24





SK06

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐	SC	△/×	径5mm以下の花崗岩を5%含む
2	7.5Y4/3 暗オリーブ	S	△/×	径1cm以下の花崗岩を5%含む
3	7.5Y3/1 オリーブ黒	S	△/×	〃
4	10YR3/2 黒褐	SiL	△/△	
5	2.5Y4/3 オリーブ褐	SiCL	△/○	

SK06

SB24 炉

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR2/1 黒	LS	×/×	焼土ブロック(10YR6/2灰黄褐色)が混ざる。炭化物と細かい土器が混入。炭混入か
2	2.5Y3/1 黒褐	SC	△/△	径5cm以下の花崗岩を4%含む
3	2.5Y2/1 黒	SiC	△/△	炭化物及び径5mmの花崗岩を4%含む

SB24

挿図 15 住居址 24 炉・土坑 06

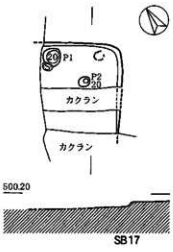
（2） 弥生時代

①住居址 17（SB17　挿図16・36　図版12・35）

DN42を中心に位置する。方形周溝墓01に切られ、南側は撹乱を受ける。プランは方形を呈するものとみられ、規模は(1.9)×(1.7)mである。主軸は不明。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは14cmを測る。床面は軟弱で、周溝も確認されなかった。柱穴は2基が残る。

炉址等は確認されず、覆土は単層で遺物も少ない。東隅で土器の胴部が出土している。

本遺構は、遺物から後期に位置付けられる。

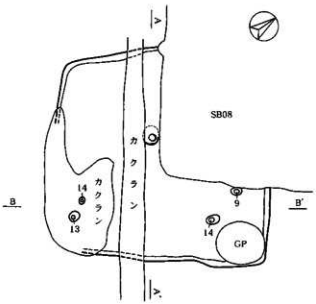


②住居址 20（SB20　挿図16・36　図版12）

DS45を中心に位置する。住居址08と中世の柱穴に切られ、撹乱を受けている。プランは方形を呈し、規模は4.5×4.5mを測る。主軸は炉の位置が中央のため不明である。壁は緩やかに掘られており、13cmと浅い。床は軟弱で周溝も確認されていない。柱穴は小規模なもので、中世の柱穴との区分はできなかった。

中央で壺の胴部が出土しており、その中に礫が入れられていた。覆土は焼土粒等を含み、土器埋設炉とみられる。174は無文部で、古墳時代前期の可能性もあるが、おそらくは弥生時代中期とみられる。

本遺構は、遺構の形態や遺物からして、弥生時代中期終末に位置付く。

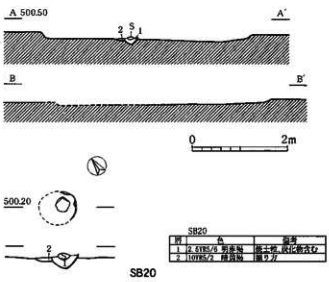


③方形周溝墓 01（SM01）

（挿図17・36　図版12・13・35）

調査区の東端に近いDM45を中心に位置する。これより南東側は徐々に傾斜してきており、段丘崖となる。住居址12・20と土坑06を切り、南西側で撹乱を受けている。平面形は正方形を呈し、南東側に陸橋を設ける。周溝内法は、9.1×(9.5)m、外法は9.5×(11.3)mを測り、主軸はN57° Wを指す。周溝の幅は1.3m、深さは0.5mを測り、隅部で幅、深さが減じる。陸橋の幅は2.8m。墳丘の盛土は確認されなかった。

埋葬施設は、中央に位置する。掘り方の一部を重複

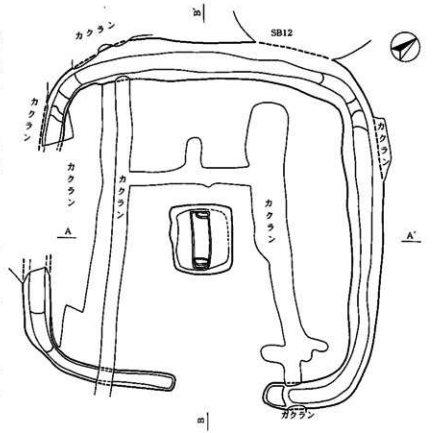


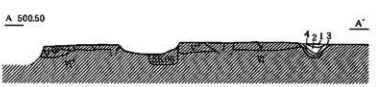
挿図 16　住居址 17・20

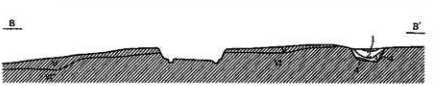
する土坑06と同時に掘ってしまった。棺材は確認できなかったが、断面観察からして木棺と考えられる。木棺の痕跡は、174×58cm、深さ42cm、小口材の部分で53cmを測る直方体である。掘り方は214×200cmの方形で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は板状の構造に近い。

主体部からの出土はない。周溝からは、1層を中心に土器・石器・礫が出土している。土器は弥生時代中期であり、住居址17との重複と矛盾し、混入であろう。礫は一部焼けたとみられるものがある。断面観察箇所では確認されなかったものの、周溝1層の上部では、炭・焦土粒が僅かに確認された箇所もあった。

本遺構は、遺構の形態と重複関係からして、弥生時代後期以降に位置付けられ、古墳時代の可能性もある。





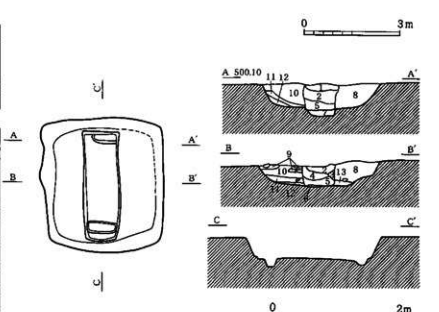


周溝

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR1.7/1 黒	SiC	△/△	極大～小炭化大遺を含む。礫は焼けているものもある。弥生、縄文遺物出土
2	10YR3/1 黒褐	SiC	△/△	縄文遺物出土
3	10YR3/2 黒褐	SiC	△/△	縄文遺物出土
4	10YR3/2 黒褐	SiC	△/△	径5cmの地山ブロックを10%含む。縄文遺物出土

主体部

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	2.5Y4/2 暗灰黄	SiCL	×/○	
2	2.5Y4/2 暗灰黄	SiCL	×/○	径1cm以下の地山ブロックを3%含む
3	2.5Y4/6 オリーブ褐	SiCL	△/○	
4	2.5Y3/1 黒褐	SiCL	×/○	径1cm以下の地山ブロックを1%含む。径1cm以下の花崗岩を5%含む
5	2.5Y3/2 黒褐	SiCL	×/○	
6	2.5Y4/6 オリーブ褐	SL	○/○	
7	2.5Y4/3 褐	SC	△/×	小石の層状層
8	2.5Y5/6 黄褐	SiCL	○/△	径5cm以下の地山ブロックを40%含む
9	2.5Y3/2 黒褐	SiC	△/△	
10	2.5Y3/2 黒褐	SiC	○/△	径5cm以下の地山ブロックを20%含む
11	2.5Y2/1 黒	SiC	○/△	
12	2.5Y4/6 オリーブ褐	SiCL	○/○	
13	2.5Y4/2 暗灰黄	SiC	△/△	



挿図 17　方形周溝墓 01

（3） 平安時代

①住居址08（SB08　挿図18・37　巻頭図版8・図版14・36）

調査区の北側、DU45を中心に位置する。住居址20を切る。プランは方形、規模は4.7×4.4m、主軸はN131°Eを指す。壁はほぼ垂直に掘り込んでおり、検出面からの深さは15cmである。床は中央部を中心に貼床してあり堅固であるが、周辺部は不明瞭である。周溝は北西側を除いた3辺に巡らし、部分的に途切れる。幅10～20cm、深さ8cmを測る。柱穴はいずれも小規模で主柱穴は不明である。周辺には中世とみられる柱穴が幾つか確認されており、それとの完全な区分はできなかった。

カマドは2基確認された。カマド1は、北西壁中央付近に僅かに火床が確認されただけであり、カマド2より古いとみられる。カマド2は部分的に構築部材として石を用いた両袖式で、南東壁中央部に設けられている。両袖間は外側で85cm、内側で35cm、焚口から奥壁までは95cmを測る。煙道部分は攪乱を受けているためか確認されず、支脚も確認されなかった。

その他の屋内施設として、P2が貯蔵穴の可能性がある。

覆土から床面には多量の炭化物と焼土が含まれており、また床面と壁面が焼土化しており焼失家屋と推察される。埋土の堆積状況からして、5層は建築部材としての粘土が落ち込んだ可能性もある。

遺物は炭化物では構築部材と考えられる木材の他に、藁状のもの、多量の米とみられる穀類が出土した。土器類はカマドの周辺を中心に出土している。破片が多く完形に復元できたものは少ない。注目すべき遺物は、181は釉が剥落している施釉陶器で、おそらく緑釉陶器であろう。また本遺構に伴うかは不明であるが、図化できないほどの青磁の細片が1点出土している。

本遺構は、出土遺物より9世紀末～10世紀に位置付けられる。

②住居址19（SB19　挿図19・37　図版15・35・36）

DS49を中心に位置する。住居址18・23を切り、中央部に攪乱を受けている。プランは横長の長方形で、規模は2.8×4.0m、主軸はN60°Wを示す。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは28cmである。床は軟弱で周溝も確認されなかった。主柱穴は不明である。

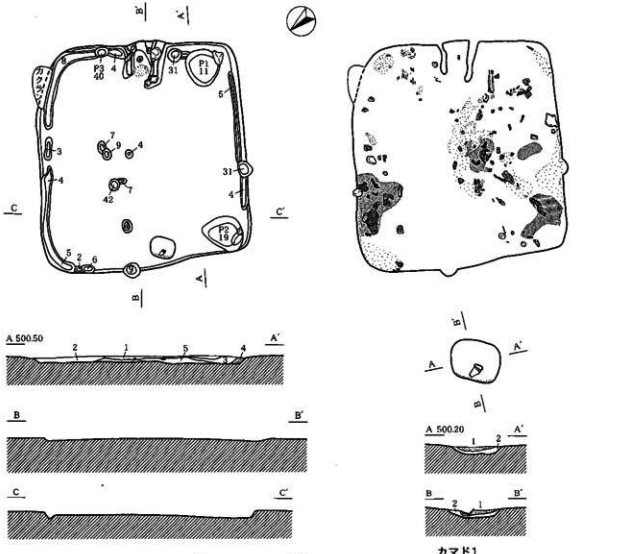
カマドは北西側の壁中央に設置されている。芯材に川原石を用いた両袖式のカマドで、火床の中央奥よりに支脚があり、崩落しているが天井石が落ち込んでいた。煙道は確認できなかった。両袖間は、外側で135cm、内側で40cm、焚口から奥壁までは78cmを測る。

住居内施設としては、P2～4が挙げられる。P2は下端が奥壁側へ入り込んだ竪穴で、深さ10cm、P3は奥壁から水平方向に20cm掘り込んだ横穴である。P4は深さ12cmの竪穴で、平らな石数個で蓋をするような状況であった。

覆土は自然堆積でなく、埋め戻されたものとみられる。

遺物はカマド周辺とP2・3から出土している。

本遺構は出土遺物より、9世紀末～10世紀に位置付けられる。



住居址

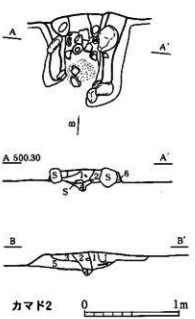
層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	7.5Y3/1 オリーブ黒	SiC	◎/△	焼土粒径5mmを1%、炭化物径1mmを1%、地山ブロック径2mmを3%含む。縮り良い
2	2.5Y4/2 暗灰褐	SiC	○/△	地山ブロック径5mmを4%、炭化物径3mmを2%、焼土粒径1mmを1%含む
3	2.5Y3/2 黒褐	SiC	○/△	地山、焼土、炭化物径1mmを2%含む
4	2.5Y3/2 黒褐	SiC	○/△	焼土粒径2cm以下を1%含む
5	2.5Y3/2 黒褐	SiC	○/△	炭化物径2cm以下、焼土粒径2cm以下、地山ブロック径1cm以下を10%含む。炭化した建築用材、土器出土

カマド1

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	5YR4/4 にぶい赤褐	SiC	○/△	焼土、かまどの火床
2	2.5Y4/2 暗灰褐	SiCL	○/○	住居址縮り方

カマド2

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	10YR2/1 黒	SiC	○/△	焼土径1cm以下を5%、炭化物径5cm以下を5%含む
2	10YR3/1 黒褐	SiC	○/△	焼土粒径1mmを1%、炭化物径3mmを1%含む
3	10YR4/3 にぶい黄褐	SiC	○/△	焼土粒径1mmを2%含む
4	10YR4/2 灰黄褐	SiC	○/○	焼土粒径1mmを3%含む
5	7.5YR3/2 黒褐	SiCL	○/○	焼土粒径3cm以下を1%、炭化物径5mm以下を3%含む
6	10YR4/3 にぶい黄褐	SiCL	○/◎	焼土粒径1cmを5%含む。カマド構築材、粘性強い



挿図 18　住居址 08

③住居址 21（SB21　挿図20・37　図版16・36）

DT00を中心に位置し、住居址18を切る。およそ半分が調査区外のため未調査であり、また中央部を撹乱で破壊されている。プランは方形あるいは長方形を呈し、規模は3.3×(2.3)m、主軸はN124°Eを指す。壁は急に立ち上がり、検出面からの深さは26cmである。床は軟弱で、幅は25cm、深さ6cmの周溝が西側の2辺で確認されている。

カマドは南東側の壁に設置されている。両袖式で川原石を芯材に粘質の強い土で構築されている。袖の外側で120cm、内側で50cm、焚口から煙道までは45cmを測る。煙道は断面で確認し、長さ40cm、緩やかに立ち上がり屋外に出ているが、ほとんど突出していない。火床は全体的に赤化している。

遺物はカマドの周辺から出土しているが、破片が多い。

本遺構は出土遺物より9世紀末～10世紀に位置付けられる。

（4）中世・時期不明

①柱穴（挿図21～23）

DR46の周辺に小規模な穴が分布する。覆土の状況と、市内の類例からして、中世の柱穴である可能性が高い。しかし、具体的に建物構造・規模を把握するには至らなかった。なお、DU40周辺に分布する縄文時代の柱穴と比べて、規模が小さく、覆土も黒色が強い傾向が認められる。

②土坑 04（SK04　挿図20）

DV42を中心に位置し、東側で撹乱を受けており、西側で縄文時代とみられる小柱穴を切る。平面は直径105cmの円形を呈するものとみられ、壁がほぼ垂直に掘り込まれている。深さは42cmを測る。時期、性格は不明である。

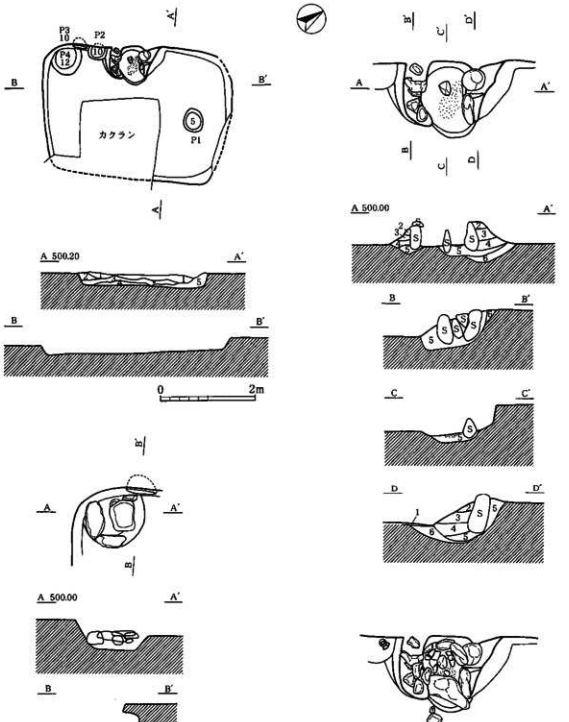
③土坑 05（SK05　挿図20）

DT48に位置し、住居址18を切る。150×125cmの楕円形を呈し、断面は深さ54cmのバケツ状である。覆土の状況からして、古代以降の遺構である可能性が高い。性格は不明である。

（5）遺構外等出土遺物（挿図36　図版29）

縄文時代中期中葉の土器片が住居址18・19・22・24、方形周溝墓01の周溝に混在している。図化したものの他にも、住居址24等に含まれている。方形周溝墓01の周溝内側からは、時代・系統ともに不明の土器片が少量出土している。今次調査では土偶は2点が確認されたにとどまり、172は右腕の一部とみられる。土製円盤は確認できなかった。

方形周溝墓01の周溝から古瀬戸産の天目茶碗片の砕片が出土しているが、図化できなかった。



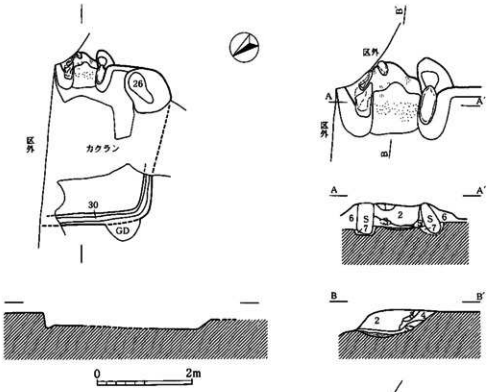
住居址

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	2.5Y4/2 暗灰褐	SiC	△/○	地山ブロック径1cm以下を10%、10YR2/1SiCのブロック径3cm以下を10%含む
2	2.5Y3/2 黒褐	SiC	△/△	地山ブロック径1cm以下を1%含む
3	2.5Y2/1 黒	SiC	△/△	地山ブロック径1cm以下を1%含む
4	2.5Y4/2 暗	SiCL	△/△	地山ブロック径1cm以下を1%含む
5	2.5Y4/2 暗灰褐	SiCL	△/△	地山ブロック径1cm以下を1%含む

カマド

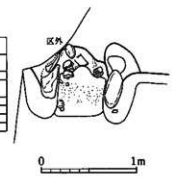
層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	2.5Y5/6 黄褐	SL	○/○	粘性
2	10YR2/1 黒褐	SiC	○/○	地山ブロック (2.5Y5/6黄褐SiCL) 径3cm以下を30%含む
3	2.5Y4/3 褐	SL	○/○	焼土粒径5cm以下、炭化物径2cm以下を3%含む。カマド構築材
4	2.5Y4/2 暗灰褐	SL	○/○	カマド構築材
5	2.5Y4/6 オリーブ褐	SL	○/○	カマドの左の掘り方
6	2.5Y4/2 暗灰褐	SiL	○/○	地山ブロック径3cm以下を30%含む、カマドの掘り方

挿図 19　住居址 19

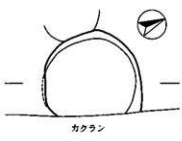


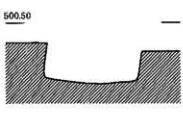
SB21　カマド

層位	色	土質	しまり/粘性	備考
1	2.5Y2/1 黒	SiC	△/△	後1cm以下の地山ブロックを5%含む。 カマドを廃した後に落ち込んだ土。
2	2.5Y4/2 暗灰黄	SiC	×/△	地山ブロック後2cm以下を20%含む。
3	2.5YR4/6 赤褐	SiC	○/△	焼土ブロックを主体とする土。煙道の天井。 2.5YR4/2SiCを40%含む。
4	10YR4/2 灰黄褐	SiC	×/△	地山ブロック後1cm以下を20%含む。炭分を含む
5	5YR4/3 に近い炭褐	SiC	×/△	焼土が廃ぶった土
6	10YR4/2 灰黄褐	SiC	○/○	地元の旋付器り方
7				カマド開掘材。焼土廃して不明

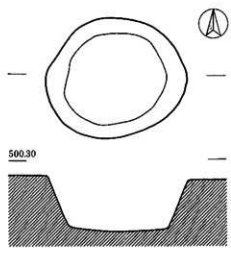


SB21





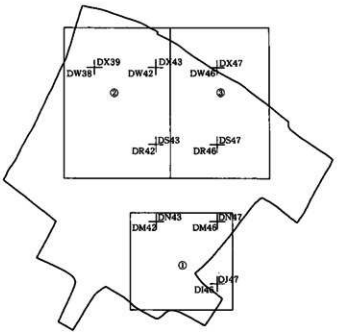
SK04

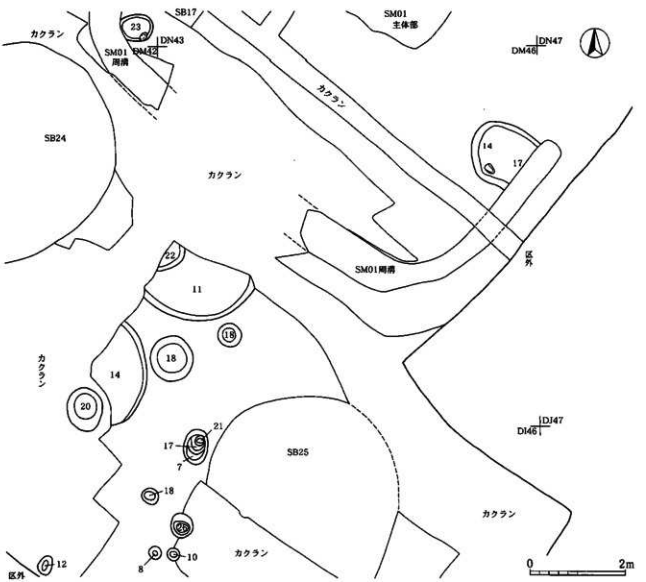


SK05

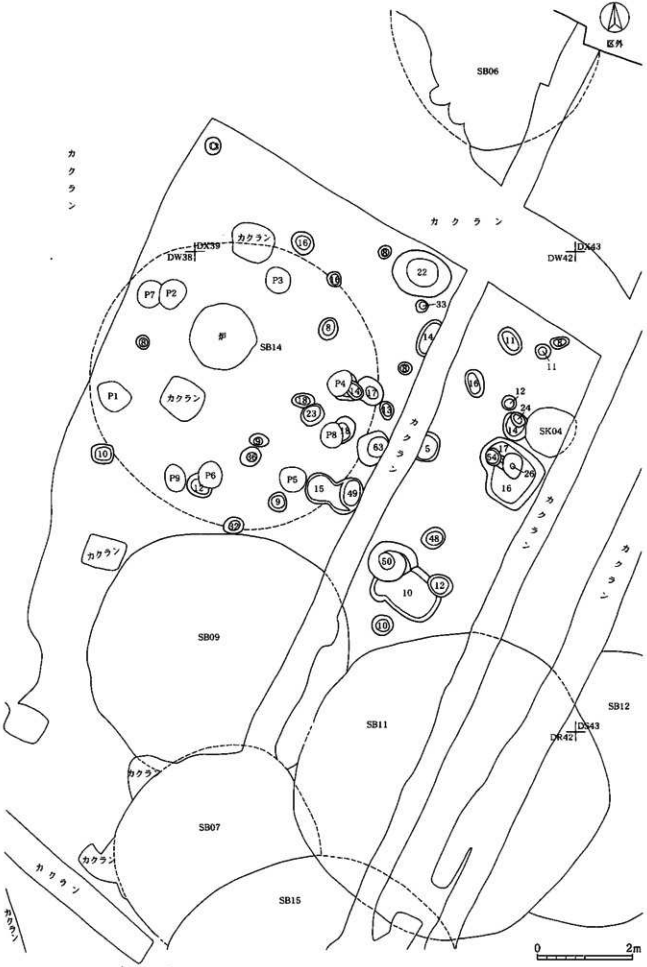
0　1m

挿図 20　住居址 21・土坑 04・05

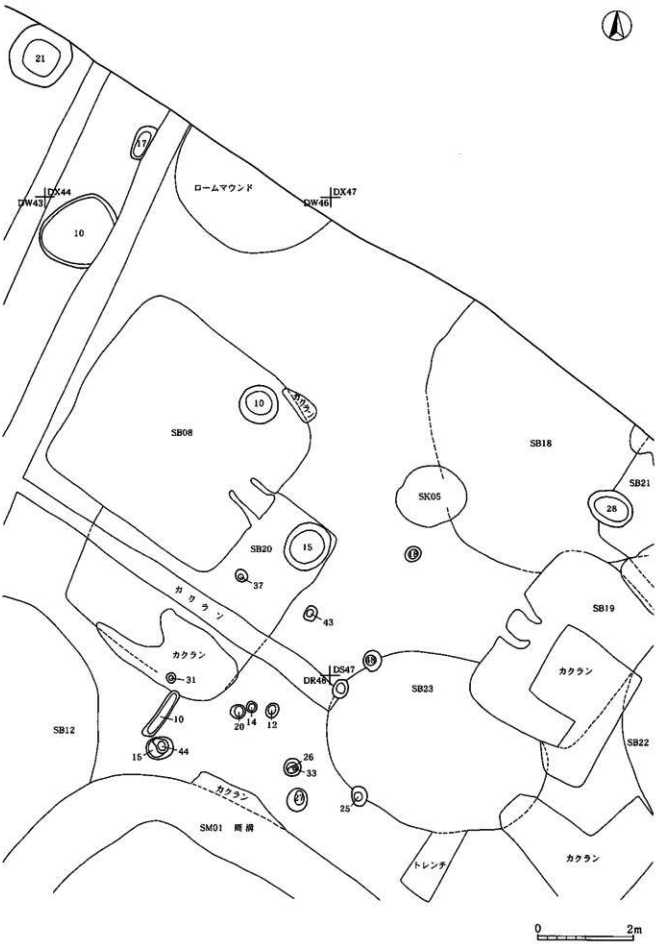

DX39
DW38
DX43
DW42
DX47
DW46
②
③
DS43
DR42
DS47
DR46
DN43
DM42
DN47
DM46
①
DJ47
DI46


カクラン
SB17
23
DN43
DM42
SM01
周溝
SM01
主体部
DN47
DM46
カクラン
SB24
カクラン
14
17
区外
22
11
SM01周溝
19
18
14
カクラン
20
21
17
7
SB25
DJ47
DI46
18
カクラン
12
8
10
カクラン
区外
0
2m

挿図 21　小穴割付図①


区外
SB06
カクラン
DW39
DW38
DW43
DW42
SB14
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
SK04
SB09
SB11
SB12
SB07
SB15
0
2m

挿図 22　小穴割付図②


21
17
DX44
DW43
10
ロームマウンド
DX47
DW46
10
カクラン
SB08
SB18
SK05
SB21
28
SB20
15
37
カクラン
43
SB19
カクラン
31
DS47
DR46
SB23
カクラン
10
20
14
12
SB12
15
44
26
33
SB22
カクラン
25
SM01 雨溝
トレンチ
カクラン
0
2m

挿図 23　小穴割付図③

第4章　遺　物

第1節　縄文時代中期中葉の土器

住居址25からは多くの遺物が出土した。出土状況は投棄と考えられるものの、市内で当該期の資料が多くはなく、貴重な事例といえる。そこで、系統毎にその特徴を述べることとする。

（1）在地系

135～137、141～152、156が該当する。大半が下伊那型櫛形文土器（以下、櫛形文と省略）の系統であるが、平出三類A土器（以下、平出三A）の特徴を持つものもある。

135はキャリパー形の器形である。口唇部を肥厚させ、口縁部下部には刺突のある隆帯を廻らし、頸部（胴上部）は無文となる。頸部の文様帯には、半円形の隆帯の脇に三角形の連続押引文を施している。口縁部くびれ部に刺突のある隆帯を廻して、櫛形文様を連続させている。平口縁で、三角形の突起が付かない可能性もある。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土に花崗岩起源とみられる4㎜以下の石英・長石・黒雲母を7％前後含む。器厚は7㎜前後、調整はナデによるものとみられ、焼成は良い。煮炊きに使用されたであろう、噴きこぼれの痕が残る。

136は、136－2からして、口縁に三角形の突起を持つキャリパー形の器形である。口唇部を肥厚させ、頸部との境は、弧状の隆帯を繰り返して区分している。口縁部は、隆帯に沿った半裁竹管による押引文で埋められる。頸部は無文。くびれには、刺突のある隆帯を廻し、その下に櫛形とは逆向き、下弦の弧状の隆帯を繰り返す。色調は褐灰色を呈し、胎土には花崗岩起源とみられる4㎜以下の長石・石英、黒雲母を3％前後含む。器厚は6㎜前後、調整はナデによるもので、焼成は大変良い。櫛形文様こそないものの、それ以外は全て櫛形文に共通する。

137は、キャリパー形とみられ、三角形の突起を持つか波状口縁である。口縁部文様帯の幅は狭い。口縁を肥厚させてはいるが、薄く不明瞭で、肥厚部隆帯上に施文している点は櫛形文とは異なる。横方向の施文は平出三Aの特徴であるが、沈線は押引によるもので櫛形文の特徴である。頸部は無文となっている。平出三Aと櫛形文両方の特徴を備えている。色調はにぶい黄褐色で、胎土は3㎜以下の長石・石英・黒雲母を7％前後含む。器厚は5㎜前後、調整はナデ。炊きこぼれの痕が顕著に残る。

141～143、145は、肥厚した口唇部の下に縦方向の押引文を施しており、櫛形文の一群であろう。一方、148～152は半裁竹管状工具による並行する沈線が特徴で、平出三Aの一群とみられる。156は櫛形文とみられる。135他が小型の深鉢であるのに対して、大型の深鉢である。全体として胎土の色調、混和材等は135～137に類似している。だが、赤黒くにぶい赤褐色を呈するもの（142・145・156）もあり、145は金色の雲母を10％前後含む。161は平出ⅢAの古い段階のものに類似する文様であるが、胎土は関東系のものに近い。金色の雲母を20％前後と多量に含む。混入の可能性もある。

遺構外からも櫛型文（165）、平出三A（166・167）が出土している。

（2）東海系

住居址23では153～155が該当し、北屋敷式に比定される。器厚３～４㎜と極めて薄い。器形は不明だが内湾しており、角状突起がある。口唇部を肥厚させ、その下に幅広の三角形の工具による押引文を丁寧に施す。胎土は、153・154は暗灰黄色を呈し、２㎜以下の白色粒子、白色半透明粒子を合わせて２％前後、１㎜以下の黒雲母を７％前後含む。155は灰褐色で、153に比べやや赤味を帯びる。３㎜以下の白色粒子・白色半透明粒子を合わせて７％前後含み、黒雲母はほとんど観察できない。同一個体とみられる小片がもう１片ある。いずれも器面はナデにより平滑にされており、外側は丁寧だが、内側は粗雑で接合や成形の圧痕が残る箇所もある。焼成は極めて良好で、固く焼き締められている。

住居址23では、山田平式とみられる133が出土している。器厚は６㎜前後。口唇部を隆帯で肥厚させ、下弦の半円形隆帯を巡らし、地と隆帯上に縄文を施す。色調はにぶい褐色を中心とし、胎土に花崗岩起源とみられる５㎜以下の長石・石英・黒雲母を合わせて10％前後含む。胎土は在地系のものに近似する。焼成はあまり良くない。

（3）関東系

住居址25では139・157～160が該当する。破片のため139を除いて器形は不明である。

139は無文の浅鉢。器厚10㎜前後、器面は磨かれている。明赤褐色を呈し、２㎜以下の白色・半透明粒子を15％前後含む。焼成は比較的良好である。

157の器厚は９㎜前後、黒褐色を呈し２㎜以下の白色粒子を７％前後、黒雲母を２％前後含む。焼成は比較的良好。159の器厚は11㎜前後、暗灰黄色で、径３㎜以下の白色、半透明粒子を合わせて７％前後、黒雲母を２％前後含む。焼成は良好。160の器厚は８㎜前後、２㎜以下の白色、半透明の粒子を15％前後、１㎜以下の黒色粒子、黒雲母を１％前後含む。焼成は比較的良好。157・160は藤内式に、159は新道式に比定されよう。158は器形不明、やや斜めの縦方向の撚糸文を施す。器厚は13㎜前後と厚く、橙色で、いかにも勝坂的である。２㎜以下の白色粒子、１㎜以下の黒色粒子をそれぞれ３％前後含む。焼成は比較的良好。時期は不明。

132の器厚は11㎜前後、器種不明だが内側におこげが付着している。134は新道式、器厚は８㎜前後。両者ともに、にぶい赤褐色を呈し、２㎜以下の細かい白色・半透明粒子を30％前後含む。焼成はそれほど悪くはないが、器面は剥落している。

162・163は遺構外だが、住居址23に近い位置で関連が窺える。両者ともに新道式に比定される。163は有孔鍔付土器で、鍔の口縁側の一部に朱の痕跡がある。164は井戸尻式の櫛形文土器である。

（4）北陸系

138は上山田・天神式の第２段階に相当するとみられる。遺存状態が悪いため器形はよくわからない。隆帯、半隆帯を除けば器厚はかなり薄い。口縁部で角度を変えて立ち上がり、口唇部を肥厚させている。その下は口縁に並行する半隆帯が２本走る。その下、頸部の最大幅となる箇所で、眼鏡状の小さな把手をつけ、そこから右斜め下へ隆帯が垂れる。隆帯上にさらに三角形の隆帯を貼付けている。垂れた隆帯の両脇には２本の隆帯が並行する。おそらく２単位の文様構成とみられる。垂れた隆帯の間は２本の隆帯もしくは半隆帯により横の楕円に区画され、区画の中は、櫛歯状の刺突が充填される。肉眼観察では、

胎土は褐灰色～にぶい黄褐色を呈し、径４㎜以下の白色粒子、白色半透明の粒子、径２㎜以下の赤色粒子をそれぞれ３％前後、径１㎜以下の黒雲母を１％前後含む。半透明の粒子は硬く、白色と赤色粒子は軟らかい。赤色粒子は、器面の調整の際に潰れて、色素が伸びているものもある。器面は磨かれて鈍い光沢があるが、ひび割れている。焼成は悪く脆い。

140は浅鉢とみられ、器厚は９㎜前後と厚手である。口唇部を僅かに肥厚させ、これと並行する２本の半隆起線が彫り出されている。ここまでの文様は138と共通し、以下は無文となる。胎土は、にぶい黄褐色で、部分的に褐灰色、明黄褐色である。径１㎜以下の白色粒子、白色半透明粒子を２％前後、径３㎜以下の赤褐色粒子を５％前後含む。粒子の特徴は138と共通する。全体的に精錬された印象を受ける。器面は内外とも工具によって丁寧に磨かれており、鈍い光沢がある。焼成は比較的良い。

第２節　縄文時代中期後葉の土器

当該期の土器は中期中葉と異なり、型式と土器の色調や胎土等が密接な関係にない。特徴については先学により纏められており、吉川金利氏による土器分類・編年が理解しやすい（吉川金利　2003）。氏は中期後葉をⅠ～Ⅳ期に大別し、Ⅲ期をa～ｃまでの３細分、Ⅳ期をａ・ｂの２細分している。本来ならば、当遺跡内での土器分類と編年作業を行なうべきであったが、担当者の力量不足により十分行なえなかった。調査区内で確認できなかった時期もあるが、氏の分類に準拠して記述する。

（１）在地系

Ⅱ期の在地系は下伊那Ａ型式であり、１・64・67・88～90が該当する。１は下伊那Ａ型式のⅢ型式であろう。口縁を肥厚させ、頸部は無文である。胴部との境に把手をつけ、その間に３本の隆帯を廻し、その間を連続した刺突で埋めている。胴部は入組文を施してⅡ期の様相が認められる。地文は条線。Ⅲ型式かもしれない。64は、縮小した把手と綾杉に近い沈線と、Ⅲ期の特徴を持つ。地文にわずかに縄文を施している。67・88～90は破片であるが、下伊那Ａ型式のⅡ型式の典型である。

５は、おそらく壷であろう。文様が共通することから本系統に含めた。

Ⅲａ期は上述した64の他に、114が該当する。114は湾曲の強い東海的な器形で、口縁と口縁部文様帯は中富式系型式である。波頂部の渦巻から頸部に隆帯が垂れ、その間は扇形の沈線を全面に重ねる。隆帯渦巻つなぎ弧文ではないが、このあたりの雰囲気は下伊那Ａ型式に近い。胴部以下は綾杉状の条線である。全体的に精緻な作りである。東海色が強いが中富式系型式とは異なる。系統不明にするべきかもしれないが、頸部の文様から、東海から強い影響を受けている在地系に含めた。

Ⅲｂ期以降は、下伊那Ｂ型式が本系統であり、72・73・122に代表される。72・73は地文が条線である。

25・80～84は該期の下伊那Ｂ型式の典型。唐草文型式の影響を受けている。

26は変わった器形だが、楕円の区画文から下伊那Ｂ型式の範疇であろう。市内では三尋石遺跡SB11に類例がある。

27～29は下伊那Ｂ型式の典型で、Ⅲｂ期の様相に近いが、26との関係から該期に位置付けた。Ⅲａ期から該期にかけては、資料が多い。

Ⅲｃ期からは新たに下伊那Ｃ型式が加わるが、遺跡内で該当する資料は不明である。

Ⅳ期以降は資料が少ない。110・111は本系統か加曾利Ｅ式系型式のⅣａ期に該当しよう。

（2）唐草文系

唐草文型式がⅢ期以降、終末まで続く。下伊那の唐草文は中信のものとは相違があり、あるいは在地系とするべきかもしれないが、下伊那型式とは異なるので別系統とした。

2は台付土器で、脚部は欠損している。外反した口縁を持ち、2つの把手がつく。頸部の括れには、両脇を交互に刺突した波状の隆帯が1周する。胴部の渦巻は、大柄渦巻文とは異なる。2本の隆帯により、S字に近い渦巻を横方向に貼り付ける。渦巻から隆帯が懸垂し、その間を沈線でうめているが、綾杉状ではない。この資料はⅢ期であるが、大柄渦巻文の隆盛期以前とみるか、以後とみるかによって異なり、不明である。

Ⅲａ期では68が典型である。口縁部を欠いているが、胴部に渦巻つなぎ弧文を施し、隆帯と沈線で区画し、綾杉文で充填する。

120はⅢａ期に位置付けられる住居址24の床面直上から出土した。沈線により大柄渦巻文を描き、地文は縄文である。隆盛期の唐草文とは異なり、Ⅲｂ期の前か後である。これより上層からはⅢｂ期の遺物（118他）が出土していることから、Ⅲａ期に位置付けられよう。

Ⅲｂ期は唐草文の隆盛期である。6・8・32・71・74・75・86・118・123他が該当する。118は胴下部の綾杉文は、沈線の向きがやや異質である。

Ⅲｃ期で該当する資料は不明。

Ⅳａ期では112が該当するとみられる。大柄渦巻文は確認できないが、樽形の器形であることと、逆U字状の区画が認められないことによる。

Ⅳｂ期の様相は不明である。

（3）東海系

Ⅱ期の東海系は中富式系型式であり、53・54・62・63が該当する。53・54は地文に縄文を採用している。62・63は頸部が無文で加曾利Ｅ式の影響を受けている。

Ⅲａ期は本系統の良好な資料に恵まれなかったが、他の型式との融合が多いことによるものと思う。

Ⅲｂ期は資料が極めて少ないが、76が該当する。波状口縁の突起部で先端を欠き、隆帯が剥がれた痕がある。器形はかなり大きい。神明式系型式の一群とみられ、神村透氏(1990)の、橋状突帯付土器のC類とみられる。隆帯上と口縁、隆帯に並行した沈線が施される。

Ⅲｃ期以降、本系統の状況は不明である。

（4）関東系

加曾利Ｅ式系型式である。Ⅱ期の下伊那北部タイプ(吉川　2005)は、加曾利Ｅ式系型式の在地化したものであるが、破片だけでは区分できないものも多く、在地系ではなく、当型式に含むこととした。

Ⅱ期は16・51・52・66が該当する。52は、口縁部文様帯に隆帯で弧状に区画し、縦の沈線を充填する。加曾利Ｅ式系型式のⅡ型式に分類されているものだが、多少異質である。神村透氏(2005)は在地系の土器群として認識している。近年類例が増加している。

113は、郡下でも類例の少ないⅢａ期の好資料である。器形は下伊那Ａ型式のⅢ型式、唐草文型式のⅡ型のものである。口唇部を幅広く肥厚させ、頚部は渦巻と半円形の組合せで４単位の区画をする。胴部との境は隆帯を一巡する。胴部は隆帯に並行した２条の沈線と、そこから底部付近まで下した２条の沈線により区画する。地文は縄文である。全体的に歪みがあり、作りは雑な印象を受ける。

Ⅲｂ期は36が該当する。頚部の外反は弱くほぼ鉛直に立ち上がる。口縁部の湾曲はほとんどなく、頚部と胴部の境もほとんど括れない。口唇部をわずかに肥厚させ、頚部には２本の隆帯と渦巻により、横位の楕円区画を行っている。区画内は沈線を縦に施す。括れ部へわずかに隆帯を設け、胴部以下は逆Ｕ字または楕円の区画となり、綾杉文が施される。該期の資料も市内では多くない。

Ⅲｃ期は47～50・70・102～104他が該当する。70は渦巻つなぎ弧文にさらに区画を加えている。結節は確認されないことから該期に含めた。半月状刺突文をもち、結節縄文でない105・106なども、本型式の該期に含めてもよいと思う。

（５）その他

３は胴部のみだが、頚部は外反するとみられる。胴部との境に２本以上の隆帯を貼り、その下に押引文を施す。波状の２本の隆帯が懸垂して縦に区画し、その中を綾杉状の条線で充填する。条線文様の谷部には、波状の沈線が垂れる。Ⅱ期に位置付けられよう。市内で類例は少ないが特徴的な文様であり、将来類例の増加すれば、分類もできるかもしれない。

４は単に残存状況が悪く、型式が不明、Ⅱ期からⅢａ期に位置付けられる。

69は波状口縁で、器形は加曾利Ｅ式系型式に近い。２本の隆帯で逆Ｓ字状の渦巻文様を横位に施し、渦巻から短いながらも隆帯を垂らしている。胴部との境付近に両脇を交互に刺突して波状の隆帯を１周させる。胴部には連弧状の沈線が施さる。地文は条線である。色調はあまりみない（灰オリーブ系の）灰色である。全体として、在地系、東海系の影響が窺え、時期は出土状況からⅢａ期であろう。

115は、東海的な器形に、横位のＳ字状の渦巻を２本の隆帯で作り出している。図では分かり難いが、Ｓ字が口縁に接する場所には、３条の沈線を刻む。渦巻の隙間は幅の広い縦方向の沈線で埋める。沈線に用いた工具は荒く、沈線内は条線が入り平滑でない。頚部は無文となる。系統は不明だが、沈線を主体とする中富式系型式とは異なる印象を受ける。時期は出土状況からⅢａ期とみられる。

116は平口縁、樽形の器形で唐草文型式のものである。全面縄文で渦巻文様はないため、唐草文型式からは外した。精緻な作りである。やはりⅢａ期に位置付けられる。

117はいわゆるキャリパー形の器形であろう。沈線でＳ字･変形したＳ字状の渦巻文を縦方向に重ねている。地文は縄文。衰退期の唐草文のような印象を受けるが、出土状況からⅢａ期に位置付けられる。

121は有孔鍔付土器とみられる。系譜は不明、時期も明らかでない。

97・108は、頚部と胴部の区分ができないが、口径が小さく典型的な樽形とは異なる。97はⅢｃ期、108はⅣ期に位置付けられる。

住居址10出土の18～24は無文・破片のため系統がわからない。半月状の刺突、２条の結節縄文からして、Ⅳａ～ｂ期に位置付けられよう。

第３節　その他の縄文土器

169・170は時期・系統ともに不明、同一個体とみられる。外反した波状口縁で、器厚は10㎜前後。口縁部は無文で、胴部に沈線を施し、列点文を並行させる。169は把手とみられ、２条の沈線でU字形の文様描き、その中に列点文を施す。色調は明黄褐色を主体とし、胎土に２㎜以下の丸みを帯びた砂粒を10%前後含む。砂粒は赤色系・青色系・黒色系・白色系と様々である。朱彩された可能性がある。

第４節　弥生時代

175～177は中期後半の北原式の壷とみられる。櫛描による簾状文・波状文・連続山形文が描かれる。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には花崗岩起源とみられる長石・石英等の５㎜以下の粗い粒子等を15%前後含む。内側の器面は荒れて剥落が著しい。器厚は８㎜前後。

173は後期の壷、または甕とみられる。胴部中央部やや上に櫛描による波状文を施している。器厚は６㎜前後と薄い。色調は明赤褐色を中心とし、２㎜以下の白色・半透明粒子を合わせて７%前後含む。175と比べて精錬されている。ナデの調整痕が外側・内側ともに残るが、外側器面は荒れている。

174は壷の胴部。色調・胎土等は175他と類似する。

178は壷の底部とみられる。器面はヘラミガキ。色調は明赤褐色、胎土は175他に類似する。

第５節　平安時代

図版	遺構	種類	器種	法量 (cm)				調整	底部	色調	釉薬
				口径	底径	胴径	器高				
180	SB08	軟質須恵器	杯	12.4	5.3	－	4.0	ロクロナデ	回転糸切	灰オリーブ	
181	SB08	施釉陶器	椀	14.3	7.0	－	4.5	ロクロナデ	－	淡黄色	刷毛・施釉？
182	SB08	灰釉陶器	皿/椀	13.7	7.2	－	4.0	ロクロナデ	－	灰白色	刷毛
183	SB08	灰釉陶器	皿	15.1	7.0	－	3.8	ロクロナデ	－	灰白色	刷毛
184	SB08	灰釉陶器	椀	－	6.8	－	－	ロクロナデ	－	灰白色	刷毛
185	SB08	灰釉陶器	壷	－	9.0	(17.4)	－	ロクロナデ	－	灰白色	刷毛
186	SB08	灰釉陶器	不明	－	－	－	－	ロクロナデ	－	暗オリーブ	－
187	SB08	土師器	不明	－	－	(11.4)	(7.1)	ロクロナデ	－	明褐色	
188	SB08	土師器	甕	26.4	－	27.0	(22.5)	ハケ/ナデ	－	灰褐色	
	SB08	青磁	不明	－	－	－	－	－	－	オリーブ灰色/灰色	
189	SB19	軟質須恵器	杯	12.6	5.6	－	3.9	荒れ	回転糸切？	にぶい黄褐色/灰色	
190	SB19	須恵器	杯	13.0	5.0	－	3.9	ロクロナデ	回転糸切	灰色	
191	SB19	灰釉陶器	椀	16.7	－	－	(3.6)	ロクロナデ	－	灰白色	刷毛？
192	SB19	灰釉陶器	椀	20.2	10.8	－	6.6	ロクロナデ	－	灰白色	刷毛？
193	SB19	黒色土器	椀	10.8	－	－	(3.8)	ナデ	－	黒色/褐色	
194	SB19	黒色土器	杯	－	7.0	－	－	ヘラミガキ	回転糸切	黒色/にぶい黄褐色	
195	SB19	土師器	甕	－	11.5	－	－	ハケ/ナデ	－	明赤褐色	
196	SB19	土師器	甕	22.0	－	22.2	(20.5)	ハケ/ナデ	－	にぶい褐色	
197	SB19	土師器	甕	26.0	－	(23.0)	(8.4)	ハケ	－	明褐色	
198	SB19	土師器	甕	22.6	－	22.6	(23.5)	ハケ/ナデ	－	赤褐色	
199	SB21	須恵器	杯	12.9	5.8	－	3.7	ロクロナデ	－	灰色	
200	SB21	土師器	甕	－	6.1	－	－	ハケ/ヘラ/ナデ	ヘラ	赤褐色/灰褐色	
201	SB21	土師器	甕	23.3	－	21.6	(43.3)	ハケ/ナデ	－	褐色/黒褐色	
202	SB21	土師器	甕	－	－	(24.4)	(20.7)	ハケ/ナデ	－	にぶい褐色/黒褐色	

第6節　縄文時代の石器

①打製石斧(挿図38・39　図版30)

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考	図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
203	SB06	硬	90	44	15	72	刃部磨耗	224	SB22	緑	91	38	10	52	刃部磨耗・煤
204	SB06	緑	99	37	13	60	刃部磨耗・赤化	225	SB22	緑	95	42	13	80	磨耗・煤
	SB06 複乱	硬	82	45	14	67	刃部磨耗		SB22	硬	(58)	(43)	(15)	(56)	刃部欠
	SB06 P1	緑	106	47	16	95	刃部磨耗		SB22	硬	(82)	(49)	(16)	(72)	上部欠
	SB06 P1	緑	83	45	19	86			SB22	緑	83	35	16	69	刃部磨耗・上部折
	SB06	緑	(40)	41	12	(30)	上部・刃部欠		SB22	緑	(70)	(40)	(9)	(37)	刃部欠
205	SB07 P4	硬	86	46	13	73	刃部磨耗		SB22	緑	(93)	(41)	(10)	(51)	刃部欠
206	SB07	緑	119	34	15	100	磨耗		SB22	緑	(71)	(43)	(17)	(70)	刃部欠
207	SB07	緑	101	38	17	96	刃部磨耗	221	SB23	緑	(72)	(43)	(18)	(86)	上部・刃部欠・黒化
	SB07	硬	(79)	(46)	(18)	(86)	刃部欠		SB23	硬	(42)	(46)	(15)	(38)	基部欠
	SB07	緑	(82)	(23)	(6)	(19)	右縁欠	227	SB24	硬	(97)	44	15	(83)	上部欠・刃部磨耗
208	SB09	硬	136	45	12	95	刃部磨耗・再生	228	SB24	硬	(109)	37	14	(60)	上部欠・刃部磨耗・赤化
209	SB09	緑	110	34	17	92	刃部磨耗	229	SB24 P5	硬	90	43	14	71	刃部磨耗
210	SB09	緑	104	35	10	57			SB24	硬	66	52	21	84	
	SB09	硬	(74)	(49)	(23)	(102)	刃部欠		SB24	硬	(42)	38	25	(22)	刃部欠
	SB09	緑	92	40	16	91	横線磨耗		SB24	緑	(82)	37	15	(44)	下部欠
	SB09	緑	77	40	11	51			SB24	緑	(51)	34	9	(23)	下部欠
	SB09	緑	(76)	(43)	(16)	(70)	刃部欠		SB24	緑	(54)	31	9	(17)	下部欠
	SB09	緑	80	42	11	62	刃部欠	232	SB25 P3	硬	124	55	23	192	
	SB09	緑	(58)	(44)	(20)	(63)	基部欠・刃部磨耗	233	SB25 7	硬	90	54	16	87	
	SB09	緑	(31)	(57)	(20)	(48)	上部・刃部欠	230	SB25	硬	111	43	16	90	
213	SB10 炉	緑	105	38	17	99	磨耗	231	SB25 11	硬	81	47	12	59	刃部磨耗
	SB10 炉	緑	(76)	(37)	(16)	(65)	磨耗・刃部欠		SB25 9	硬	(87)	(46)	(13)	(84)	刃部欠
211	SB11 複乱	緑	108	45	16	106	刃部磨耗		SB25	硬	(87)	(47)	(26)	(146)	刃部欠
212	SB11	緑	70	41	10	52			SB25	硬	(72)	(46)	(14)	(59)	上部欠
	SB11 上層	硬	(71)	(48)	(21)	(91)	刃部欠・再生		SB25 13	硬	(75)	(46)	(23)	(95)	上部欠・赤化
	SB11 上層	硬	(80)	(38)	(13)	(70)	刃部欠・磨耗・赤化		SB25	硬	(75)	(42)	(26)	(79)	刃部欠
	SB11 上層	緑	111	(18)	(10)	(22)	縦割れ		DL46P1	硬	111	48	31	198	刃部欠
	SB11	緑	(51)	(41)	(8)	(22)	刃部欠・磨耗・赤化		DU42P2	硬	102	72	29	256	上部欠
	SB11 上層	緑	(34)	(34)	(5)	(9)	基部・刃部欠		SM01	硬	126	47	19	142	刃部磨耗
214	SB12	硬	117	40	18	134	磨耗		SM01	緑	138	56	30	242	刃部磨耗
215	SB12	硬	(87)	(58)	(30)	(202)	刃部欠		SM01	硬	95	42	15	84	刃部磨耗
	SB12	緑	95	44	16	91			SM01	硬	84	41	16	78	
	SB12	緑	92	42	14	74	磨耗		SM01	硬	84	44	12	49	上部欠・刃部磨耗
	SB12	緑	74	38	11	40	刃部磨耗・赤化		SM01	硬	92	53	24	156	刃部欠
217	SB13	硬	108	56	19	140			SM01	緑	111	37	21	110	
218	SB13	緑	123	40	18	114	刃部磨耗		SM01	緑	79	53	15	82	基部欠
219	SB13	緑	111	34	21	99			SB21 竪	硬	96	54	21	132	礫
220	SB13	緑	93	41	18	74	刃部磨耗	226	SK05	硬	100	48	14	88	刃部磨耗
	SB13	硬	(83)	(48)	(19)	(79)	刃部欠		SB19	緑	73	42	14	53	弥生？石斧未製品
	SB13	緑	93	36	13	64			DX46	緑	76	35	12	52	磨耗
	SB13	緑	(92)	43	18	(102)	刃部欠		耕土	硬	88	50	15	97	刃部欠
	SB13	緑	(100)	41	16	(91)	赤化・刃部欠		耕土	緑	86	45	19	112	上部欠
	SB13	緑	(73)	39	14	(50)	上部欠		耕土	緑	105	33	16	81	刃部磨耗
	SB15	緑	(57)	(39)	(12)	(33)	基部欠		耕土	緑	72	40	19	65	基部欠
216	SB16	硬	112	49	14	76			ZZZ	硬	124	69	27	232	
	SB16	硬	(77)	(42)	(15)	(72)	刃部欠		ZZZ	硬	127	44	21	162	
222	SB18	緑	133	42	15	102	刃部磨耗		ZZZ	硬	95	39	19	85	刃部磨耗
223	SB18	硬	97	41	13	70	刃部磨耗		ZZZ	硬	91	60	20	122	上部欠・刃部磨耗
	SB18	硬	87	40	10	44			ZZZ	緑	114	40	16	112	刃部磨耗
	SB18	硬	92	38	10	37			ZZZ	緑	79	42	15	63	上部欠
	SB18	硬	(27)	(33)	(9)	(7)	基部欠・刃部のみ		ZZZ	緑	50	36	14	33	下部欠
	SB18	緑	(91)	(44)	(14)	(49)	刃部欠		SB09	緑	(31)	(57)	20	48	頭部・刃部欠損

②磨製石斧　(挿図42　図版31)

図版	遺構	石材	法量 (mm) 縦	横	厚	重量	備考	図版	遺構	石材	法量 (mm) 縦	横	厚	重量	備考
270	SB07 P1	緑	119	31	16	92	未製品	278	SB13	緑	73	20	9	22	礫
275	SB09	緑	73	22	8	23	礫・赤化	279	SB14	硬	(54)	(27)	(11)	(21)	刃部欠損
271	SB11	硬	146	48	18	176	局部磨製　土掘り具	281	SB18	緑	(112)	(54)	(40)	(424)	頭部欠損
272	SB11 上層	緑	(138)	(50)	(31)	(360)	未製品・刃部欠損	280	SB18	緑	(56)	(43)	(11)	(49)	片刃・刃部のみ
273	SB11 上層	緑	(109)	(47)	(43)	(220)	破片	282	SB22	結	(103)	54	23	(218)	頭部欠損
276	SB12	緑	92	44	11	75			SB24	緑	(72)	(45)	(17)	(77)	破損品
277	SB12	緑	82	34	12	58		283	SB25	緑	131	37	20	128	未製品
274	SB13	緑	122	47	22	238	敲石に転用か		SB19	緑	36	81	33	130	未製品・破損

③横刃形石器（挿図39～41　図版30・31）

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
234	SB06 埋壁1	硬	56	69	20	57	二次加工
235	SB07	硬	88	110	16	138	
236	SB07	緑	86	83	22	196	二次加工
237	SB09	硬	50	(100)	12	(68)	左縁欠・微細剥離
238	SB09	硬	65	(72)	14	(67)	右縁折
239	SB09 炉上	硬	50	65	19	56	抉入
240	SB09	石	111	75	25	228	二次加工
	SB09	緑	(31)	(57)	20	48	頭部・刃部欠損
	SB09	硬	51	94	11	53	
	SB09	硬	52	59	8	26	
	SB09	硬	(49)	68	7	(25)	打点欠
	SB09	硬	37	71	9	21	
	SB09	硬	46	54	12	29	微細剥離
	SB09	緑	46	82	6	38	
241	SB11 上層	硬	86	120	19	210	
242	SB11 上層	硬	79	97	18	132	微細剥離
243	SB11	緑	50	93	10	68	磨製石斧割片利用
244	SB11	硬	72	55	17	63	微細剥離
245	SB11 上層	硬	94	100	27	280	交互剥離
	SB11 上層	硬	50	98	15	80	二次加工
	SB11	硬	(45)	(86)	(12)	(45)	刃部欠
	SB11	硬	54	69	12	37	微細剥離・摩
	SB11	硬	40	74	11	26	微細剥離
	SB11 上層	硬	(56)	(34)	(14)	(23)	基部欠
246	SB12	硬	50	142	13	106	微細剥離
247	SB12	硬	86	84	18	106	微細剥離
248	SB12	硬	50	74	8	37	微細剥離
	SB12	硬	47	74	20	50	微細剥離
	SB12	緑	61	86	12	74	微細剥離
249	SB13	硬	79	110	23	222	打面創二次加工
250	SB13 P4	硬	48	(66)	7	(26)	左縁欠
	SB13	硬	52	(57)	7	(23)	右縁欠
	SB13	硬	39	(57)	8	(19)	左右縁欠
	SB13	緑	63	75	12	65	
	SB13	硬	94	56	21	136	
255	SB14	硬	62	96	20	126	微細剥離
254	SB14 P1	硬	39	99	15	47	二次加工・赤化
251	SB15	硬	59	84	14	80	微細剥離

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
252	SB15 P2	硬	55	64	8	34	
253	SB15	硬	64	72	9	27	
	SB15 P2	硬	46	83	10	35	
	SB15	硬	71	63	11	(55)	ガジリ
256	SB18	硬	78	91	16	132	
257	SB18	硬	70	(82)	12	(81)	微細剥離・右縁欠
258	SB18	硬	69	91	23	154	二次加工
	SB18	硬	48	66	10	34	微細剥離
	SB18	硬	60	81	18	108	
	SB18	粘	41	68	8	30	微細剥離
	SB18	緑	48	54	11	42	微細剥離
259	SB22	硬	60	86	16	100	微細剥離
	SB22	硬	76	41	8	28	微細剥離
	SB24	硬	67	116	20	162	
260	SB24	硬	58	99	16	97	微細剥離
261	SB24	石	67	77	19	120	二次加工・縁角縁
262	SB24	硬	55	73	14	51	微細剥離
263	SB24	硬	72	87	24	146	微細剥離・赤化
264	SB24	硬	39	61	9	23	抉入部・微細剥離
	SB24	硬	54	77	17	61	
	SB24	硬	49	(68)	11	(46)	左縁欠・赤化
	SB24	硬	(45)	(74)	(10)	(33)	刃部欠・微細剥離
	SB24	硬	53	(29)	16	(23)	右縁欠・微細剥離
265	SB25	硬	55	55	12	38	
266	SB25	硬	33	54	10	23	弥生石包丁？
	SB25	硬	50	90	18	93	微細剥離
	SB25	硬	50	54	8	24	赤化
	SB25	硬	(44)	(41)	(13)	(21)	右縁欠
	SB25	硬	(35)	(72)	(14)	(32)	左縁欠・赤化
267	耕土	硬	61	72	13	74	二次加工
268	SB08	硬	50	73	13	57	縄文 抉入
	SM01	硬	44	90	9	45	縄文 微細剥離
	SM01 周溝	硬	59	35	10	26	縄文 右縁欠
	耕土	硬	64	97	21	134	二次加工
	耕土	硬	60	92	21	110	微細剥離
	DU41	硬	45	57	10	29	微細剥離
	ZZZ	緑	61	89	21	134	
269	SB09	硬	88	(47)	15	(76)	器種不明・抉入部・折損

④敲石（挿図42　図版32）

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
286	SB05 埋壁1	砂	58	53	27	108	
284	SB09	緑	90	76	48	398	
	SB11 上層	緑	61	52	15	79	使用頻度少

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
285	SB22	緑	67	61	20	110	使用頻度少
287	DT41P2	緑	68	64	41	300	

⑤礫器（挿図43　図版31）

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
288	SB06 埋壁1	砂	60	55	25	104	礫の縁辺に二次加工
289	SB12	緑	40	29	10	15	小礫に微細剥離

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
290	SB13	硬	59	68	16	90	礫の縁辺に二次加工
291	SB18	硬	66	95	16	148	面擦状の二次加工

⑥石錘（挿図43　図版32）

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
292	SB06 炉	サ	75	44	14	69	
293	SB25	硬	47	49	13	36	

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
294	SM01 周溝	硬？	56	36	14	39	

⑦磨石（挿図43　図版32）

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
295	SB07 炉	花	116	86	47	730	
296	SB18	花	134	93	56	1020	風化・礫？

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
297	SB25	閃計	(89)	(76)	(42)	(368)	下部欠損

⑧石皿（挿図43　図版32）

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
299	SB06	花	236	282	80	7900	
	SB06 No.6	花	420	330	61	10900	敲？埋壁の蓋・接合

図版	遺構	石材	法量 (mm・g) 縦	横	厚	重量	備考
300	SB13 No.1	花	250	271	73	7150	
298	SB24 5	花	(262)	(207)	(69)	(5000)	上部欠損

⑨剥片類（掻図44・46　図版32　※砕片は割愛）

図版	遺構	石材	法量 (mm・g)				備　考
			縦	横	厚	重量	
302	SB06	石	63	44	10	27	自然面
	SB06 覆土	緑	38	10	3	2	打斧再生
308	SB09	緑	39	62	12	29	磨斧製作
309	SB09	緑	63	27	6	18	磨斧製作
	SB09	硬	39	55	17	42	横刃破損？
	SB09	緑	85	35	6	15	磨斧製作
	SB09	石	46	68	19	73	
303	SB11 上層	石	52	60	14	46	礫打面
304	SB11 上西	石	77	56	22	97	礫面あり
	SB11 上層	緑	80	36	15	44	打斧再生・様
	SB11 周溝	硬	56	58	12	37	敲磨剥離・横刃？
	SB11 上西	硬	48	36	10	17	横刃？・赤化
	SB11 上層	硬	36	78	8	18	赤化
	SB11 上層	緑	83	41	15	63	赤化・摂理
	SB11 周溝	緑	34	65	8	23	石斧生産
	SB11 上層	緑	28	17	5	6	打斧再生
	SB11 上層	石	35	29	8	5	剥離面不明
310	SB12	緑	43	61	9	22	打斧再生
	SB12	緑	18	43	8	6	打斧再生
	SB14	硬	(63)	(39)	(10)	(26)	基・刃部欠損・赤化
	SB15 炉	硬	62	46	16	57	横刃？
	SB13	緑	62	28	10	17	打斧再生／欠損品
	SB13	緑	(63)	18	7	(12)	打斧再生／欠損品
305	SB13 P4	石	55	43	13	22	礫打面・目的的
	SB13 P4	緑	34	15	2	2	
	SB18	緑	33	42	5	11	打斧刃部再生
	SB18	緑	55	16	4	4	打斧刃部再生
	SB18	緑	33	9	4	1	打斧刃部再生
311	SB22	粘？	64	30	10	33	石斧製作関連
	SB22	緑	58	43	12	43	版石関連
	SB22	緑	61	60	30	61	礫面あり
306	SB24	石	68	67	22	67	蝶
307	SB24	石	50	26	10	15	ポジポジ
312	SB24	緑	33	52	6	9	打斧製作
313	SB24	緑	81	30	6	27	打斧製作
	SB24	硬	22	37	5	5	打斧製作
	SB24	緑	28	27	7	7	表面礫面
	SB24	緑	31	16	6	2	打斧製作
	SB24	粘？	39	33	10	15	二次加工？・現代？
	SB24	緑？	31	21	8	6	現代？
	SB25	硬	32	59	10	16	打斧製作
	SB25	硬	29	27	6	4	
	SB25	硬	36	19	5	3	打斧製作
	SB25	粘	26	29	6	4	
	SB25	緑	20	75	6	10	打斧製作
	SB25	緑	35	13	4	3	打斧製作
	SB25	緑	58	62	20	132	磨斧製作
	SM01 周溝	緑	60	39	12	40	弥生？石斧製作
	SM01 周溝	緑	48	104	11	63	石斧製作
	SM01 周溝	緑	28	68	5	9	石斧製作・右欠損
	SM01 周溝	緑	55	16	4	5	石斧製作
	SB08	緑	50	52	12	37	
	SB19	緑	34	55	7	16	石斧製作
	SB20	緑	45	25	11	13	縄／弥
	SB20	硬	35	27	18	7	石斧製作
	SB20	粘	57	22	6	8	石斧製作
	SB20	緑	39	30	6	9	石斧再生
	DU42P2	硬	22	66	12	17	打斧製作
	DU42P2	サ	36	45	12	23	末端欠損
	DL46P1	緑	26	38	7	11	石斧製作
	DS47	硬	55	79	15	65	弥生？二次加工
	SB06	黒	25	13	8	3	微細剥離
	SB06	黒	26	15	7	2	二次加工
	SB06	黒	16	12	4	1	白濁、被熱？
	SB08	下	45	54	11	18	二次加工
	SB09	黒	21	28	4	2	微細剥離
	SB09	黒	29	26	12	7	白濁・被熱？
	SB09	黒	33	29	8	7	目的的
	SB09	黒	(24)	(21)	(5)	(2)	頭部折損・目的的
	SB09	黒	(21)	(14)	(7)	(2)	末端折損・目的的
	SB09	黒	24	17	5	2	
	SB09	黒	(27)	(18)	(4)	(1)	頭部折損・目的的

図版	遺構	石材	法量 (mm・g)				備　考
			縦	横	厚	重量	
	SB09	黒	20	15	6	1	
	SB09	黒	19	15	5	2	
	SB09	黒	22	13	2	1	
335	SB11 上層	黒	25	15	7	2	微細剥離・摂痕
	SB11 上西	安	41	35	13	18	二次加工
	SB11 上層	黒	22	37	14	8	微細剥離・ポジポジ
	SB11 P1	黒	30	15	4	1	微細剥離
	SB11 P1	黒	33	20	4	2	微細剥離
	SB11 上層	黒	26	19	8	3	
	SB11 上層	黒	26	23	4	2	目的的
	SB11 上西	黒	23	19	7	2	
	SB11 上層	黒	(23)	(15)	(3)	(1)	末端欠損・目的的
	SB11 P2	黒	28	14	10	3	
	SB11 上層	チ	26	22	7	3	
	SB12	黒	31	23	10	6	二次加工
337	SB13 P3	黒	54	35	10	21	二次加工
339	SB13 P3	黒	26	34	6	5	目的的・微細剥離
	SB13	黒	31	21	4	2	目的的
	SB13	黒	26	16	2	1	
	SB13	黒	28	10	2	1	
	SB15	黒	27	18	9	3	被熱？
340	SB16	黒	22	26	5	3	目的的剥片
	SB16	黒	24	19	10	2	
	SB18	黒	46	32	11	11	目的的
	SB18	黒	28	20	5	2	目的的
	SB22	下	33	18	11	4	
336	SB23	黒	20	15	4	1	二次加工
	SB24	黒	29	24	10	5	目的的
	SB24	黒	36	23	7	4	目的的
	SB24	黒	36	14	5	2	目的的・微細剥離
	SB24	黒	35	17	6	2	目的的・微細剥離
	SB24	黒	23	31	4	3	目的的
	SB24	黒	21	17	12	5	原石
	SB24	黒	29	19	6	2	
	SB24	黒	29	17	6	2	目的的
	SB24	黒	23	23	10	2	目的的
	SB24	黒	26	12	7	2	目的的・ポジポジ
	SB24	黒	24	19	3	1	目的的
	SB24	黒	20	36	8	2	表面白濁
	SB24	黒	18	21	4	2	目的的
	SB24	黒	20	16	7	1	
	SB24	黒	17	20	3	1	微細剥離
	SB24	黒	23	11	1	1	微細剥離
	SB24	黒	19	22	4	1	
	SB24	黒	19	11	6	1	
	SB24	黒	17	20	4	1	
	SB24	黒	20	22	3	1	
	SB24	黒	18	14	3	1	
	SB24	黒	21	12	5	1	
	SB24	黒	14	22	4	1	
	SB24	黒	20	9	5	1	
	SB24	黒	20	13	3	1	
	SB25	黒	21	9	4	1	
	SB25	黒	15	11	4	1	
	SB25	黒	19	15	14	4	
	SM01 周溝	下	32	19	7	3	縄文？
	SB19	下	23	22	6	5	
	SB20	黒	26	16	7	3	二次加工・基本製品？
	SB20 覆乱	黒	18	16	6	2	二次加工
	SB21	黒	17	29	9	3	
	DV38P1	黒	30	28	16	8	
338	ZZZ	黒	45	34	13	14	微細剥離
	DN46	黒	21	14	9	2	二次加工
	DU41	黒	20	15	3	1	
	DX46	下	16	27	9	3	
	ZZZ	黒	31	22	13	7	微細剥離
	ZZZ	黒	31	19	6	2	
	ZZZ	黒	23	16	10	3	
	ZZZ	黒	16	20	7	2	二次加工
	ZZZ	黒	15	15	9	2	末端欠損
	耕土	黒	28	28	10	6	目的的
	耕土	黒	13	25	3	1	二次加工

⑩石核（挿図44・46　図版33）

図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考	図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考
			縦	横	厚	重量					縦	横	厚	重量	
301	SB11 上層	石	58	148	81	625		344	SB24 4	黒	40	68	22	45	
	SB09	黒	25	17	10	3		345	DR46	黒	41	38	11	18	円盤形・削器転用？
341	SB10	黒	20	33	19	7		342	ZZZ	黒	33	32	28	35	サイコロ形
	SB20	黒	20	15	10	2		343	ZZZ	黒	36	29	20	19	

⑪石鏃（挿図45　図版33）

図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考	図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考
			縦	横	厚	重量					縦	横	厚	重量	
314	SB06	黒	(20)	(11)	(3)	(1)	脚部欠	319	SB15	黒	24	22	6	3	
315	SB09	黒	(14)	(14)	(1)	(1)	両脚欠	320	SB24 床	黒	(17)	(15)	3	(1)	脚部欠
316	SB11	黒	13	12	3	1		321	SB24	黒	(20)	(16)	3	(1)	脚部欠
317	SB11	黒	24	14	4	1	未製品	322	SB24	黒	(16)	(10)	3	1	
	SB11	黒	(12)	(12)	(2)	(1)	基部欠・未製品？	323	SB25	チ	16	13	4	1	
	SB11	黒	(20)	19	5	(2)	先端欠		DU42 P1	黒	22	10	3	1	脚部欠
318	SB13	黒	(19)	14	3	1	失敗品・先端欠		ZZZ	黒	20	13	4	1	脚部欠

⑫石錐（挿図45　図版33）

図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考	図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考
			縦	横	厚	重量					縦	横	厚	重量	
324	SB06	黒	(14)	(8)	(3)	(1)	基部欠損	326	SB24	黒	22	11	5	1	
325	SB11 P6	黒	24	9	4	1									

⑬器種不明（挿図45）

図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考	図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考
			縦	横	厚	重量					縦	横	厚	重量	
327	SB09	黒	11	9	4	1		328	SB14	黒	14	14	3	1	石錐？

⑭石匙（挿図45　図版34）

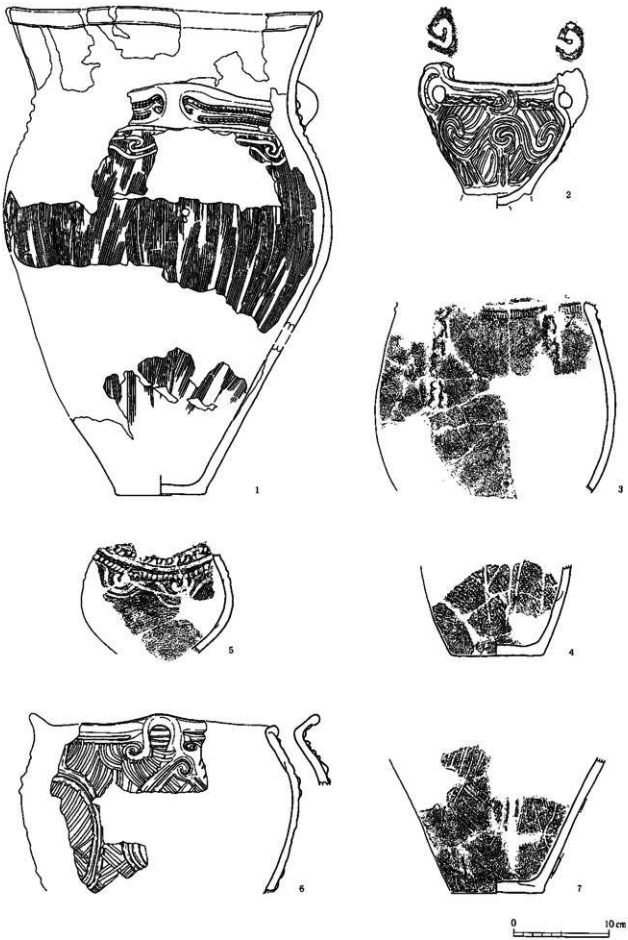
図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考	図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考
			縦	横	厚	重量					縦	横	厚	重量	
329	SB14 P1	安	110	40	14	58		330	SB22	黒	33	34	9	7	横方向擦痕顕著

⑮削器（挿図45　図版33）

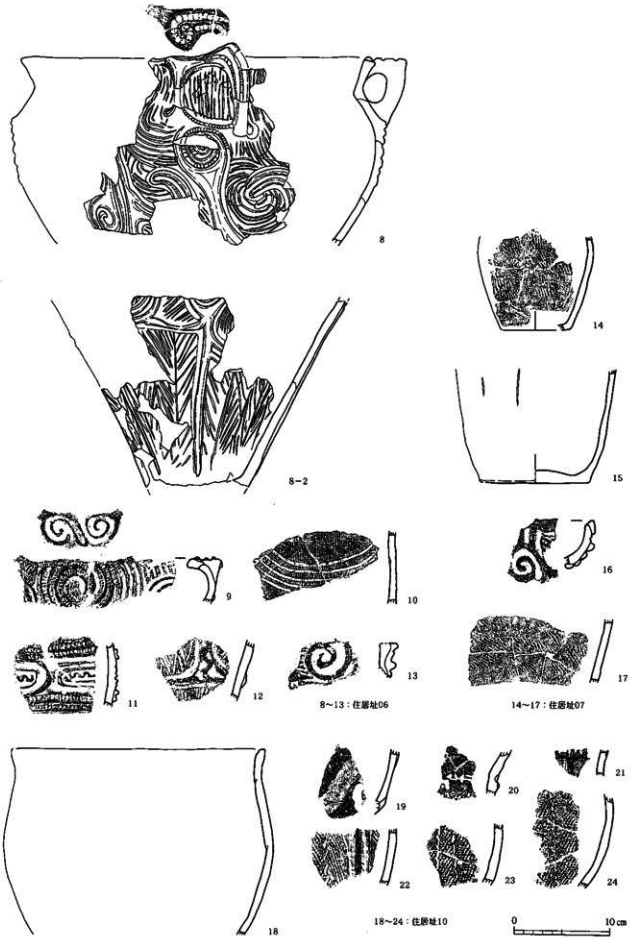
図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考	図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考
			縦	横	厚	重量					縦	横	厚	重量	
334	SB09	黒	27	32	5	4		332	SB12	黒	23	16	4	2	抉入
331	SB11 上層	黒	27	17	5	2	緩曲縁	333	ZZZ	黒	42	26	13	12	両面調整

⑯両極石器（挿図47　図版33）

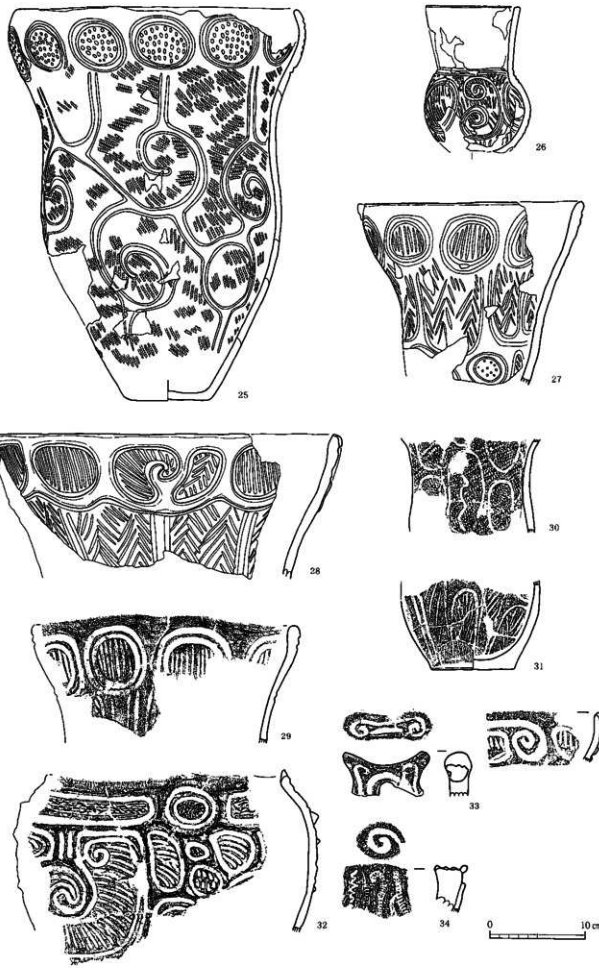
図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考	図版	遺構	石材	法量（mm・g）				備考
			縦	横	厚	重量					縦	横	厚	重量	
347	SB09	黒	16	13	10	3			SB15 炉	黒	21	9	3	1	
	SB09	黒	28	13	8	2		356	SB16	黒	12	7	6	1	
	SB09	黒	19	15	6	3		357	SB18	黒	27	14	12	2	
	SB09	黒	27	13	9	3			SB18	黒	13	21	5	1	
348	SB11 上層	黒	14	12	5	1			SB18 炉	黒	24	10	5	1	
349	SB11 P6	チ	30	17	9	4		358	SB22	チ	30	37	15	11	
	SB11 上層	黒	25	13	5	1		359	SB24	黒	19	10	8	1	
	SB11 上層	黒	22	10	6	1		360	SB24	黒	17	10	4	1	
	SB11 上層	黒	16	9	5	1		361	SB24	黒	21	17	6	2	
	SB11	黒	16	11	4	1			SB24	黒	17	16	8	2	
	SB11	黒	11	12	5	1			SB24	黒	18	11	8	1	
350	SB12	黒	21	20	4	2			SB24	黒	15	8	5	1	
	SB12	黒	13	12	8	1			SB24	黒	10	10	5	1	
353	SB13	黒	19	12	6	1			SB24	黒	18	5	2	1	
351	SB13	黒	22	14	8	2			SB25	黒	10	8	2	1	
352	SB13	黒	17	16	9	2			SB17	黒	23	23	10	4	
	SB13	黒	26	9	6	1			SB20	黒	17	15	5	1	
	SB13	黒	16	14	4	1			SM01 周溝	黒	15	6	3	1	
	SB13	黒	15	9	2	1			SM01 周溝	チ	20	9	5	1	
	SB13	黒	20	8	3	1			ZZZ	黒	29	20	8	5	
	SB13	黒	23	11	4	1			ZZZ	黒	21	12	4	1	
354	SB14	黒	21	14	8	2			ZZZ	黒	13	15	4	1	
	SB14	黒	15	9	3	1		346	ZZZ	チ	80	57	35	196	
355	SB15	黒	15	13	3	1									



挿図 24　住居址 06　出土土器

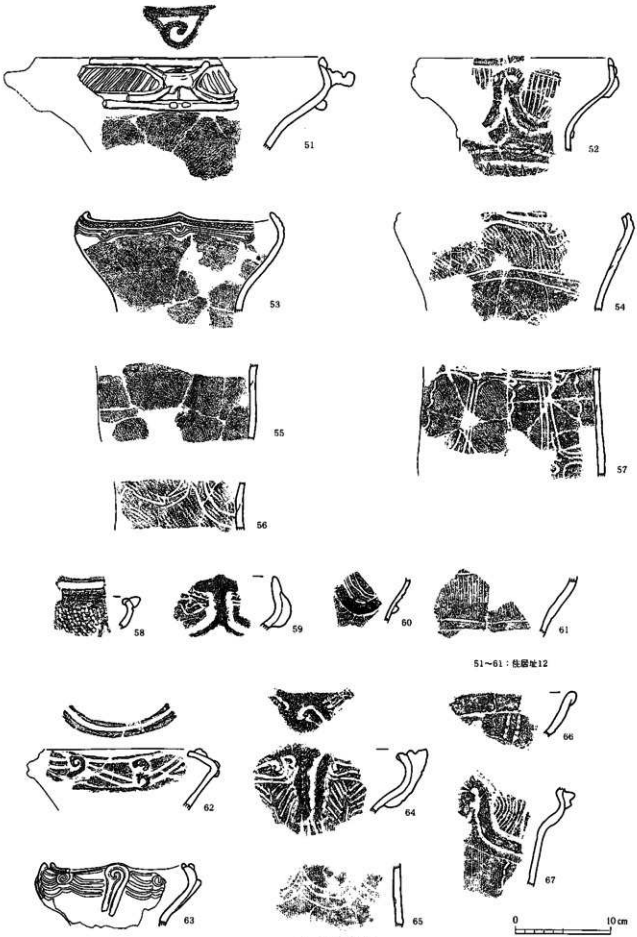


挿図 25　住居址 06・07・10　出土土器

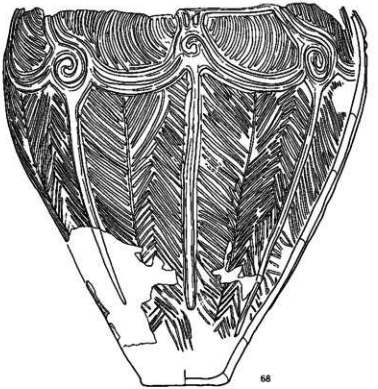


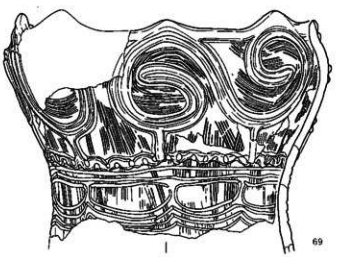
挿図 26　住居址 09　出土土器

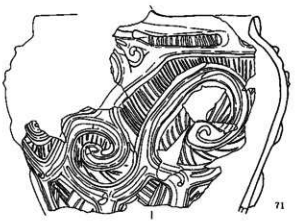
挿図 27　住居址 11　出土土器

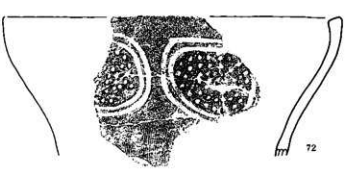


挿図 28　住居址 12・14　出土土器

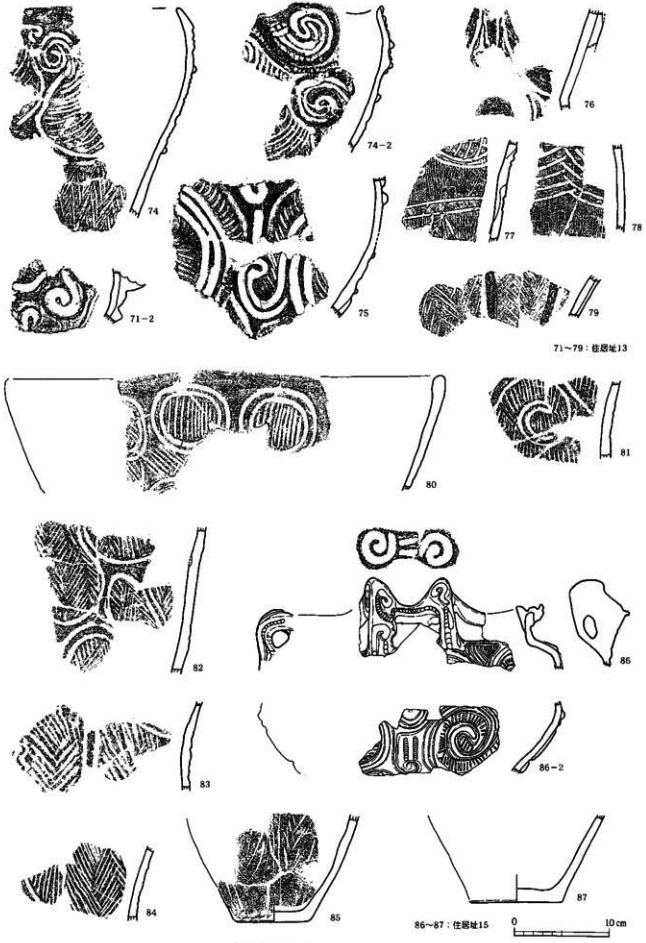






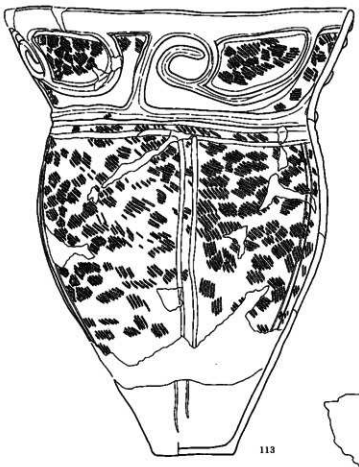


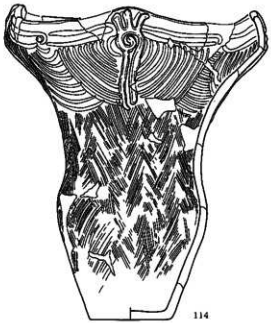
挿図 29　住居址 13　出土土器

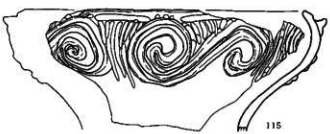


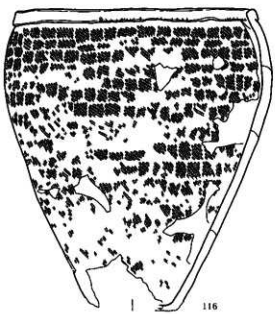
挿図 30　住居址 13・15・16　出土土器

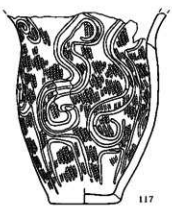
挿図31　住居址 18・22　出土土器



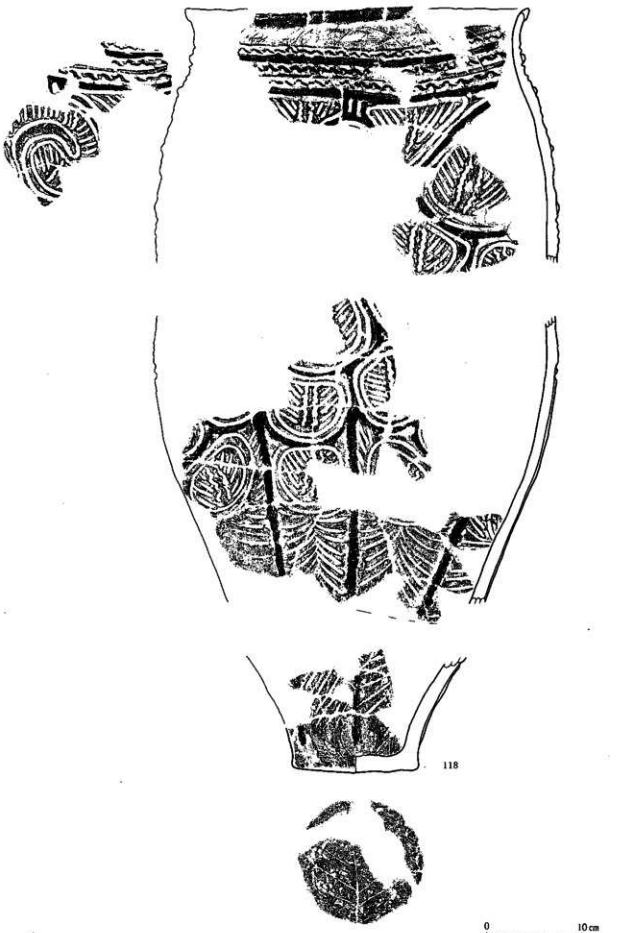




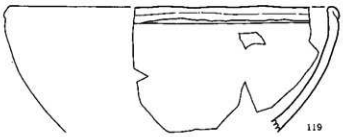


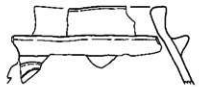


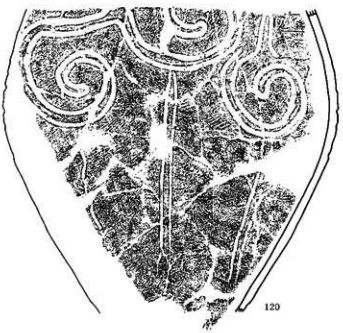
挿図 32　住居址 24　出土土器

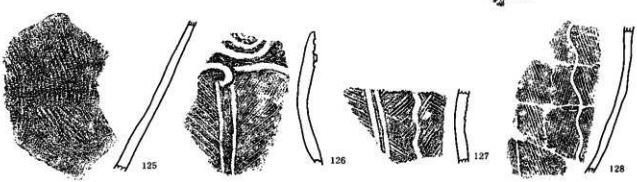


挿図 33　住居址 24　出土土器





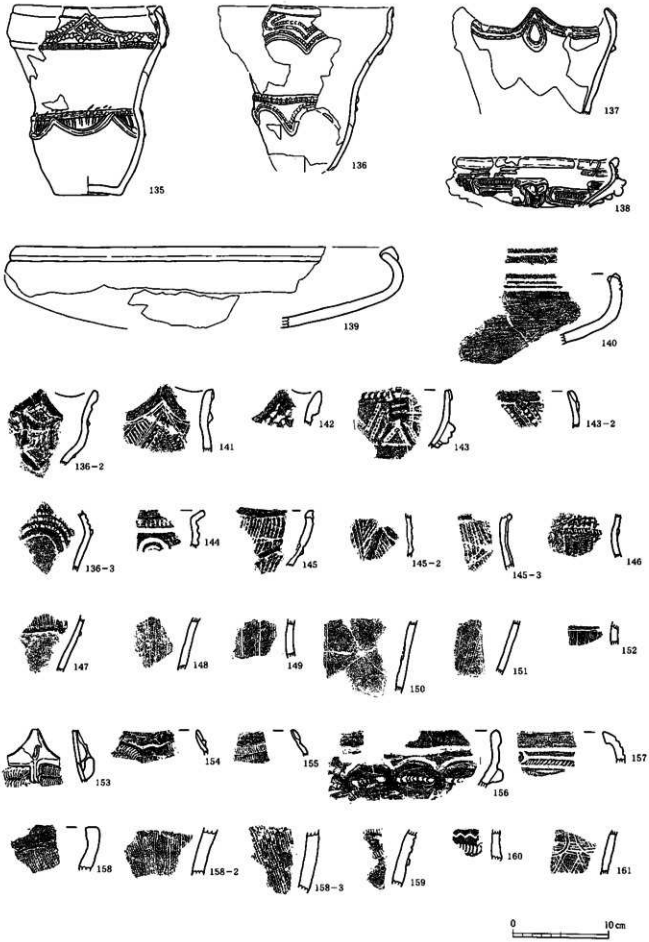




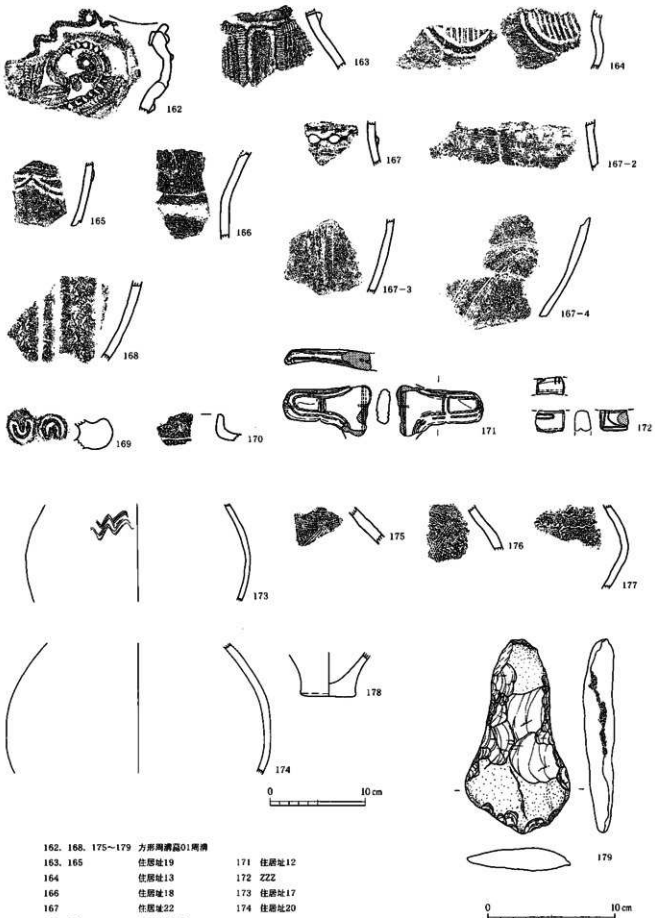
119～131：住居址24

132～134：住居址23

挿図 34　住居址 23・24　出土土器

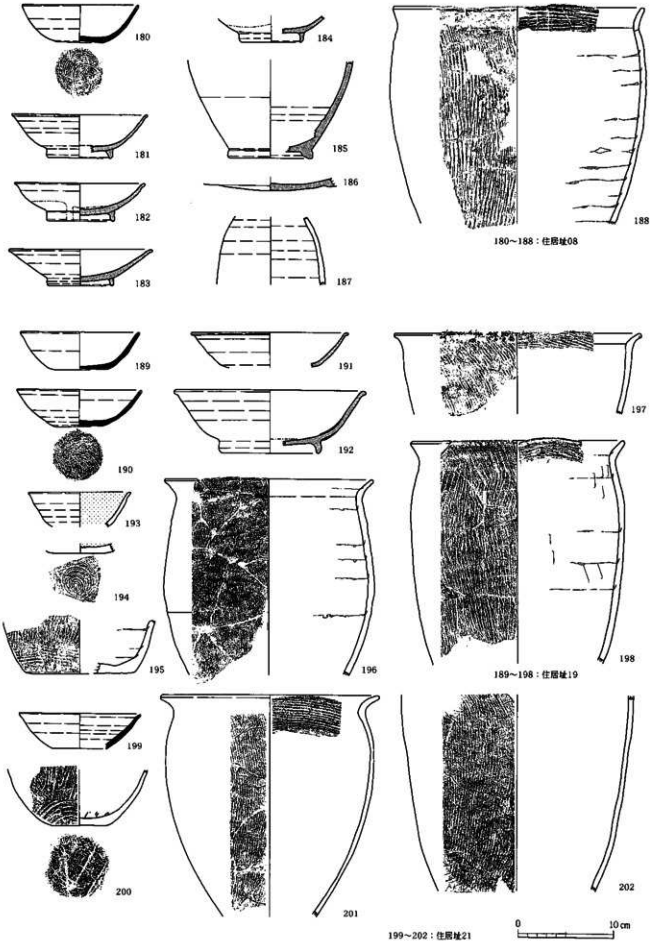


挿図 35　住居址 25　出土土器

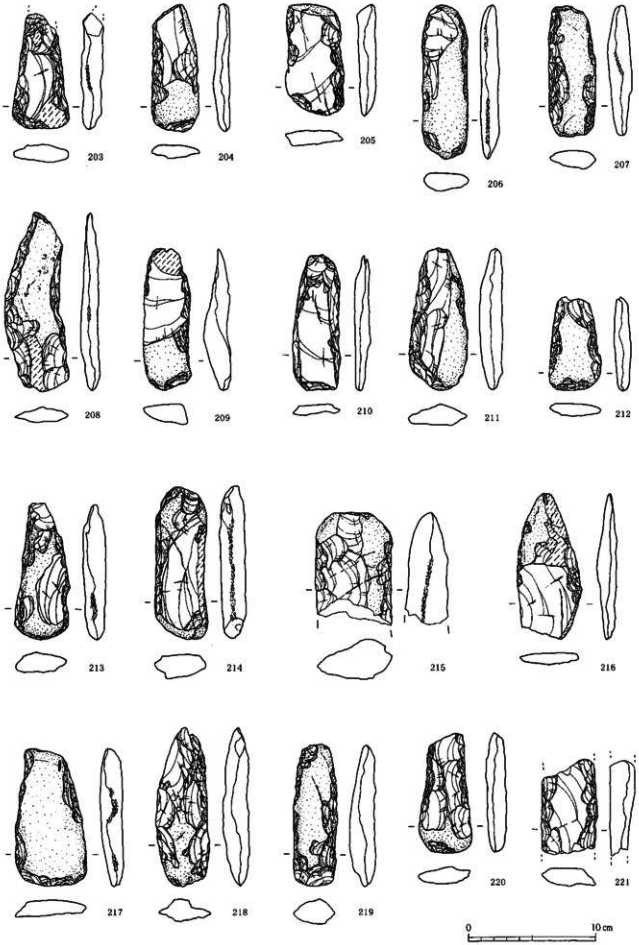


162. 168. 175~179 方形周溝墓01周溝
163. 165 住居址19
164 住居址13
166 住居址18
167 住居址22
169. 170 方形周溝墓01
171 住居址12
172 ZZZ
173 住居址17
174 住居址20
179

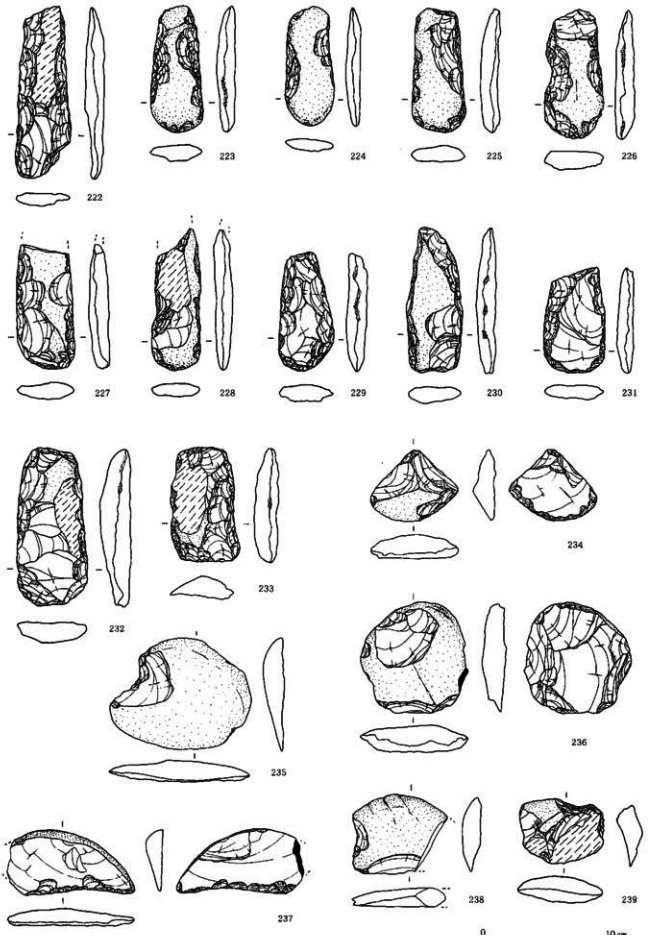
挿図 36　遺構外出土縄文土器・土偶・住居址 17・20　方形周溝墓 01　出土遺物



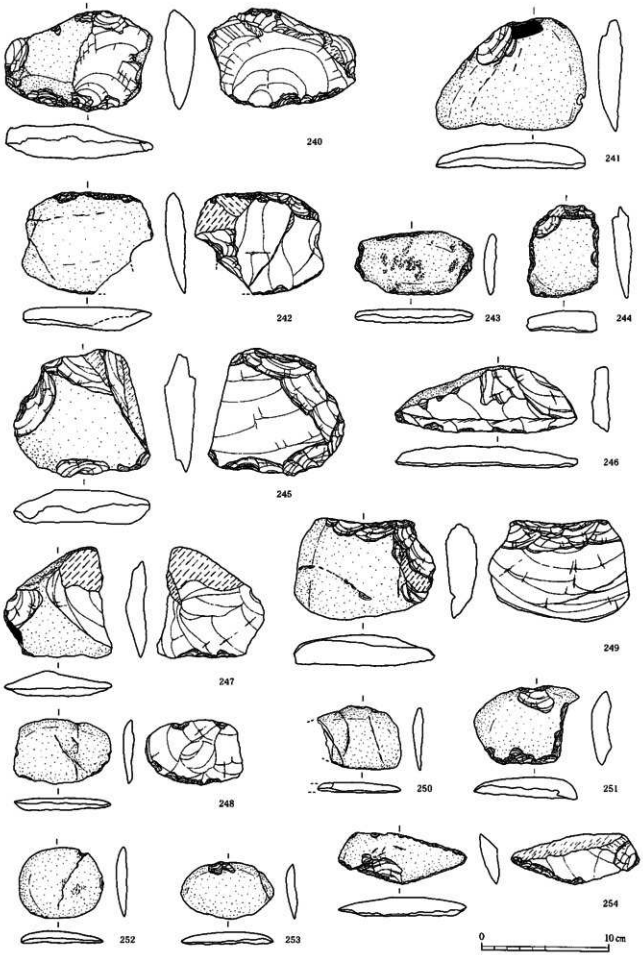
挿図 37　住居址 08・19・21　出土土器


203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
0
10cm

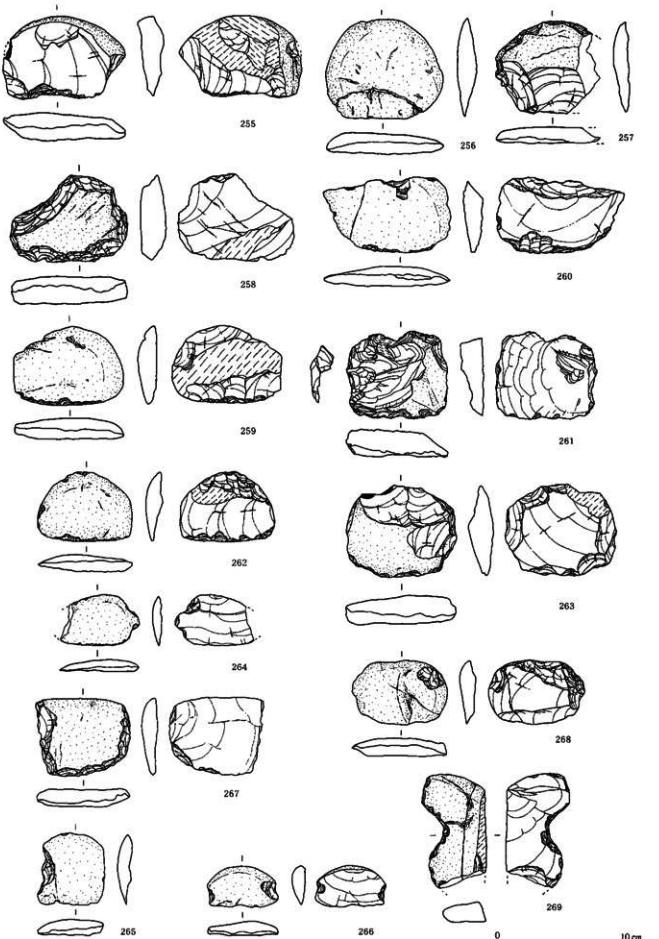
挿図 38　打製石斧



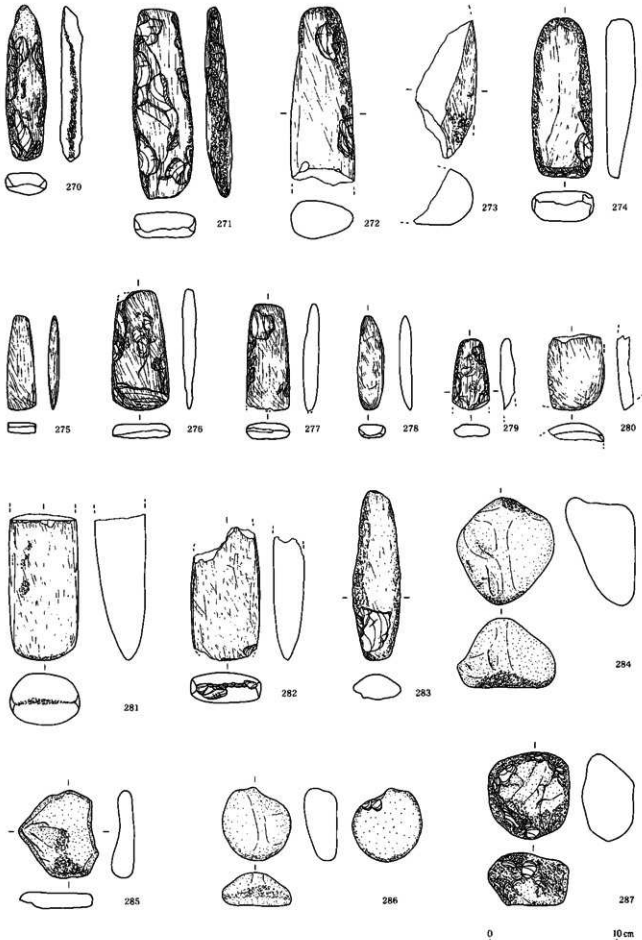
挿図 39　打製石斧・横刃形石器


240
241
242
243
244
245
246
247
249
248
250
251
252
253
254
0
10cm

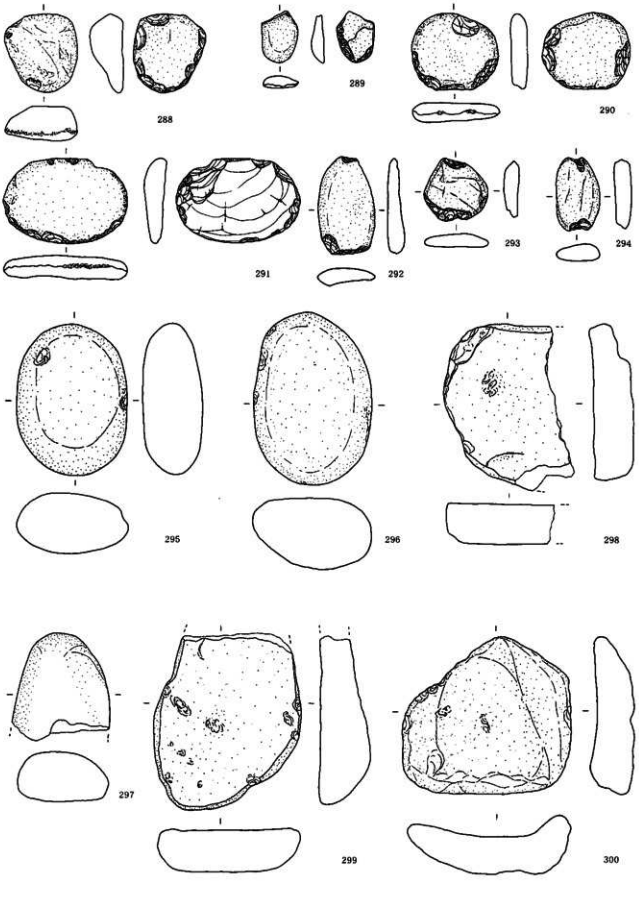
挿図 40　横刃形石器


255
256
257
258
260
259
261
262
263
264
268
267
265
266
269
0
10cm

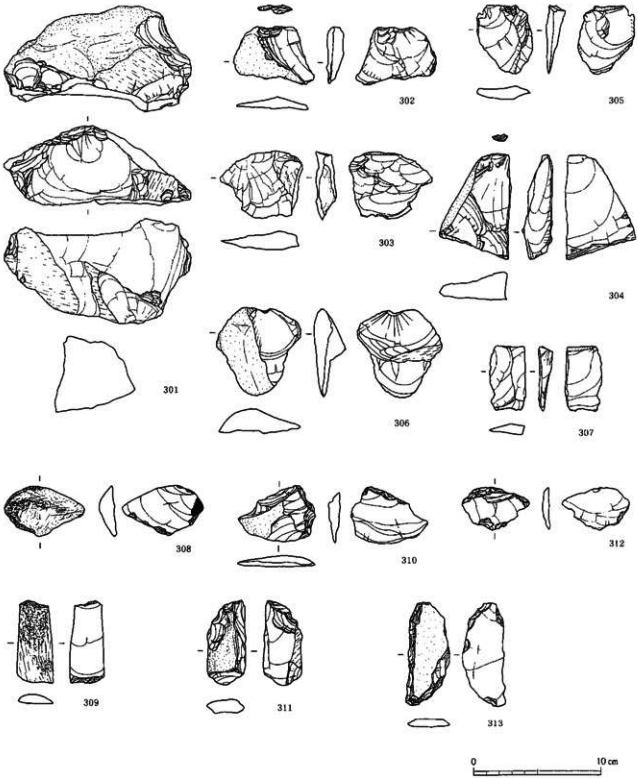
挿図41　横刃形石器


270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
0
10cm

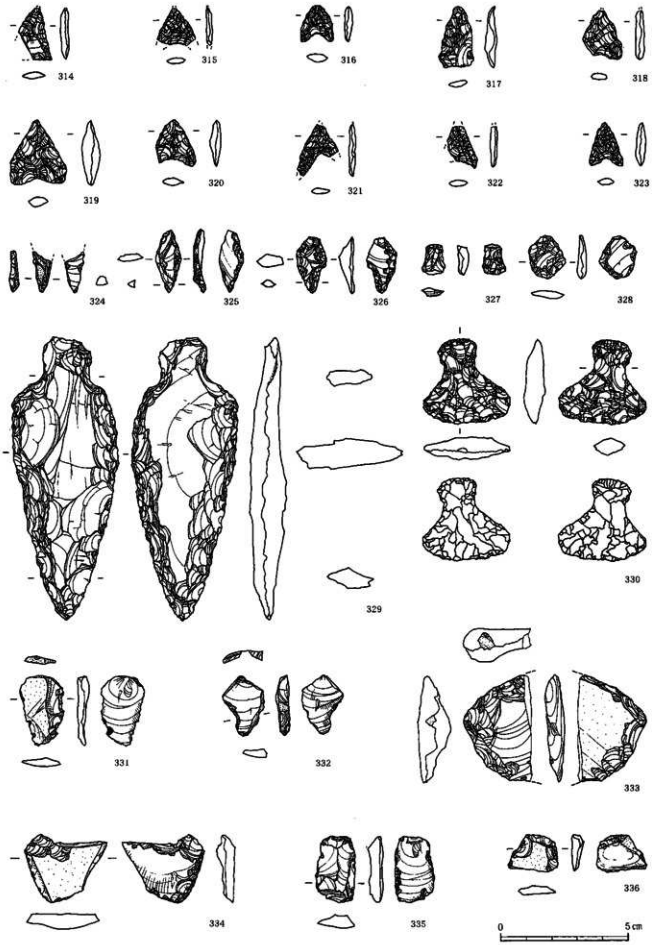
挿図 42　磨製石斧・敲石



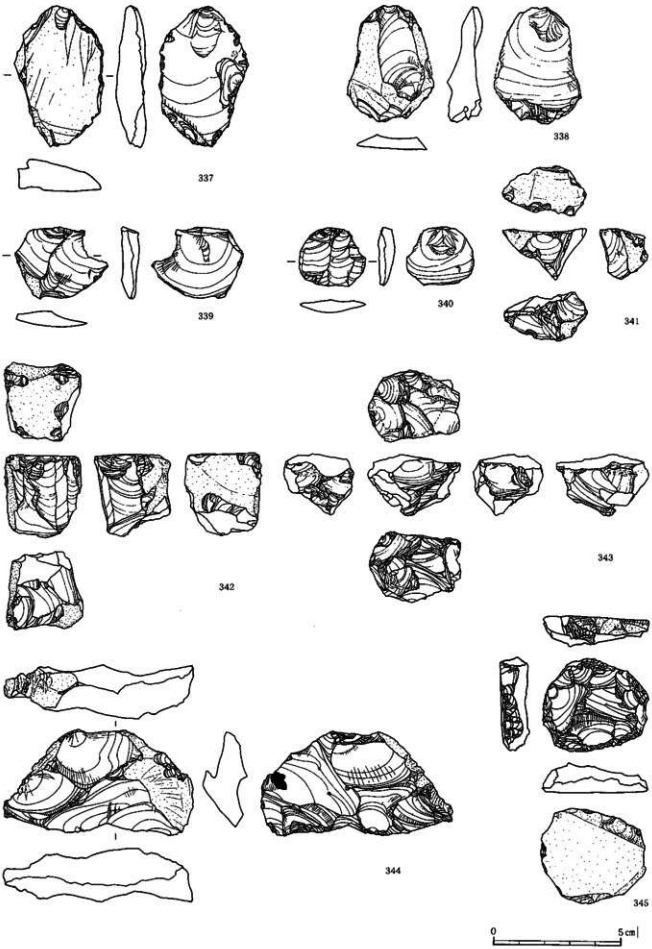
挿図43　礫器・石錘・磨石・石皿



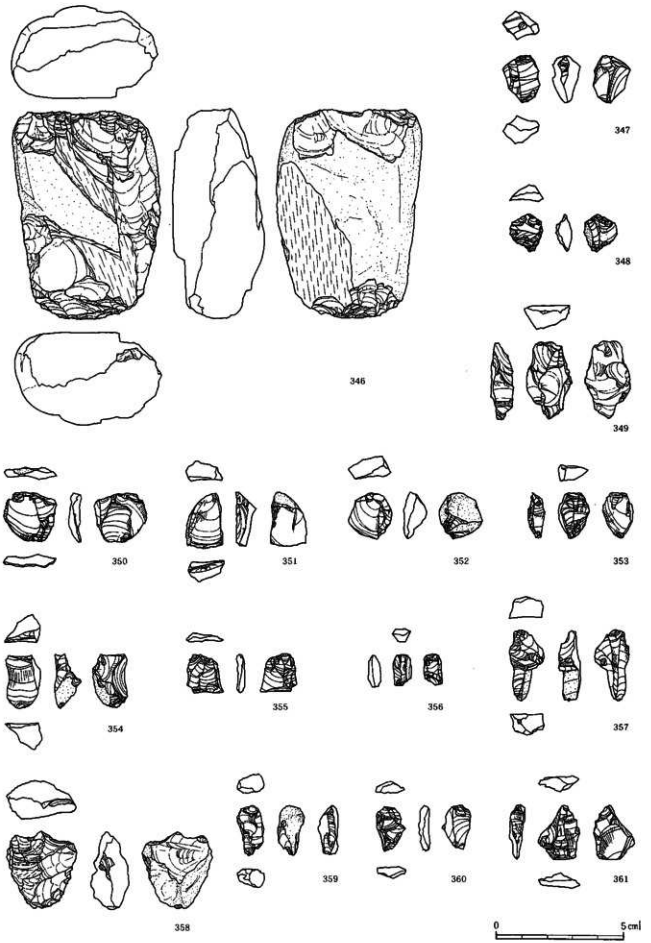
挿図 44　石核・剥片



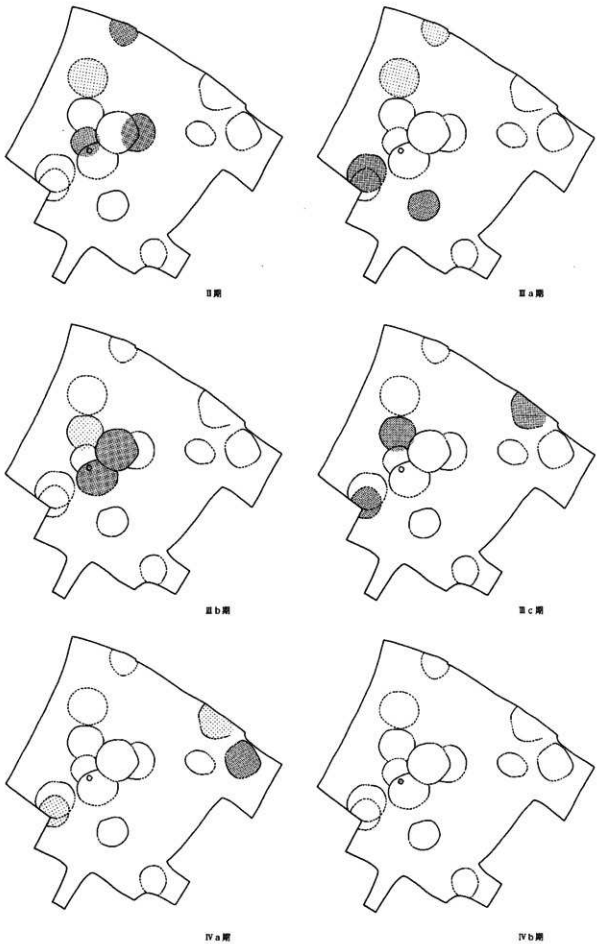
挿図 45　石鏃・石錐・不定形石器・石匙・削器



挿図 46　剥片・石核


346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
0
5cm

挿図 47　両極石器



挿図 48　縄文時代中期後葉住居址変遷図

第５章　調査のまとめ

第１節　集落の変遷

（１）縄文時代

本遺跡で最も古い遺構・遺物は、隣接地で出土した縄文時代早期の土器片である。流れ込みであることから、北西側に集落が存在した可能性がある。今次調査区内では確認できなかった。

遺構として確認できるのものは、縄文時代中期中葉、新道式期の住居址23が最も古く、藤内期に位置付けられる住居址25がこれに後続する。以降、中期後葉までは暫く断絶している。

縄文時代中期後葉になると、一気に隆盛を迎える。当該期については、本章でも前章と同様、吉川氏による土器編年区分（吉川金利　2003）に従い、記述を進める。今次調査区内で遺構の重複が著しく、遺跡の中心となる次期であるので、該期についての変遷図を作成した（挿図48。図では、濃い網はその時期に属す遺構を、薄い網は時期が明確に把握できなかった遺構を示した。隣接地で調査された住居址04は、時期が不明なので割愛した）。

Ⅱ期の住居址は住居址07・12が該当する。また、住居址18の覆土にも一定量当該期の土器が混在しており、付近に当該期の遺構が存在した可能性があろう。これに後続して、住居址14がⅡ期からⅢ期にかけての遺構と考えられる。１は住居址06の炉に敷かれていた。前節で述べたように炉の廃棄に関連する行為のものであれば、住居址06の中でも最も新しい遺物となり、当然埋甕１・２よりも新しい。両者がⅢａ期のもので並行する可能性もないわけではないが、２が１に先行することには抵抗がある。本址は重複等の可能性があるが、今次報告ではⅢ期の可能性を残したⅡ期の遺構として扱った。

Ⅲａ期は住居址13・24が該当する。

Ⅲｂ期は、住居址11・15が該当する。住居址11は、覆土出土遺物はⅢｃ期のものが多いが、P6出土遺物を重視すれば該期に位置付けられよう。この２軒は重複しており、住居址11の方が切り合いと覆土出土遺物からみて新しい。また住居址13・24の２軒は、Ⅲａ期の遺構で廃屋後の当該期に土器捨て場とされたとみられる。両者から同一個体とみられる破片（75・124）が出土したことは、両者が同時期に窪地となっていたことを示している。

Ⅲｃ期は、住居址09・16・18が該当する。住居址09は埋甕の25の年代だが、覆土出土遺物を考慮すれば、よりⅢｂ期に近い位置付けとなろう。住居址18覆土からは、各時期の遺物が出土しているが、炉出土の105からして該期に位置付けられるが、遺構の類似性を考慮すれば、より住居址22に近い時期とみられる。

Ⅳａ期は、住居址22の１軒が該当するとみられる。

Ⅳｂ期の遺構は、住居址10のみである。

以上のような変遷を辿るとみられる。中期後葉のⅡ期から集落が形成され、Ⅱ期からⅢ期にかけてが、最も栄えた時期である。Ⅳ期にかけてはやがて集落は萎縮し、後葉の終末とともに一旦集落は断絶する。

集落の構造としては、隆盛期であるⅡ期からⅢ期にかけて、同時期の住居址が近くで２軒づつ分布している点が興味深い。撹乱による影響を考慮すれば、西側にも多くの住居址が分布していた可能性も高く、今次調査区は、台地の先端であるため集落としても縁辺部にあたるものとみられる。

通常、縄文時代中期の集落は、住居址の他に中央広場と土坑群・柱穴列等が特徴的な環状・馬蹄形を呈する場合が多い。今次調査では、住居址以外の遺構としては、貯蔵穴1基（土坑06）の他は、柱穴と考えられる小穴で、土坑群や中央広間は確認できなかった。前回調査の北側隣接地では、縄文時代の遺構は僅か1軒である。どのような集落の広がりがあったの判断はできず、今後の課題といえる。

後期以降は、隣接地で若干の土器片が出土しているのみで、今次調査で遺構・遺物の確認はない。近隣に集落の存在が予想される。

（2）弥生時代

上段で中期後半、北原式期とみられる住居址20が確認された。住居址20出土の174は無文であり、北原式と断定はできない。しかし、方形周溝墓01の周溝の175～177は北原式であるが、色調や器面、胎土が類似することから、該期の遺構と判断した。隣接地の調査でも同時代の埋甕が出土しており、該期の住居址は掘り込みが浅いことから、住居内施設であった可能性がある。

今次調査区の住居址が中期後半の遺構であるとするならば、市内の上段では初の事例となる。当地方では弥生時代後期以降、高燥した上段にも集落が展開してくが、その嚆矢となる集落として注目される。

後期では、住居址17と方形周溝墓01が確認された。住居址は1軒のみで、限られた面積ではあったが、大規模な集落が継続した様相はない。これに後続し、台地の縁辺部に方形周溝墓01が築かれ、墓域に変わっている。方形周溝墓も1基だけで、大規模な墓域は形成されていない。およそ500m離れた飯田城下町遺跡の本町1丁目では、比較的近接した位置で方形周溝墓5基が確認されている。具体的な状況は不明だが、本遺跡の墓域とは状況が異なるといえる。集落と墓域との関係も不明である。

（3）古墳時代

今次調査区から明確な古墳時代の遺構は確認されていない。しかし、方形周溝墓01は、弥生時代後期以降のもので、古墳時代前期に位置付く可能性もある。源長川を挟んで200m程北側の市役所裏では、古墳時代中期の遺物の出土事例がある。

（4）奈良・平安時代

9世紀末から10世紀に位置付けられる住居址が3軒確認された。住居址19と21は位置からして重複しているが、新旧関係は不明である。両者とも主軸が短い長方形の平面形が特徴的で、住居址19は西側に、住居址21は東側にカマドを設置している。住居址08は新旧のカマドを有しており、火床のみ確認された古いカマドは西側に、新しいカマドは東側に設置されている。

隣接地では、同時代とみられる住居址が4軒調査され、やはりカマドの位置が東西の2者に別れる。

周辺で注目されるのは、飯田城下町遺跡の本町1丁目では、平安時代の可能性がある道路址が調査されていることである。道路址は2本の直線的なもので、官道の支道の可能性も残されている。今次調査の住居址08からは緑釉とみられる施釉陶器が出土しており、古代伊那郡の郷戸荘にかかわる可能性があるものとして、今後の研究に期待したい。

（5）中近世

室町時代、愛宕神社の地には坂西氏が愛宕城（飯坂城）を築いたといわれる。調査区東側に隣接する洞が堀の役割を果たしていたものとみられ、今次調査区はその城下にあたる。結果は、中世とみられる小柱穴が散見されたが、具体的な建物構造は把握できず、城館に関する遺構を把握することができなかった。遺物は天目茶碗の小片が一片出土している。

当地は、近世には城下町として整備され、飯田城の絵図からは足軽長屋があったことがわかる。飯田城下町の調査では、区画石積、井戸、地下室、便所等が出土し、町人屋敷の町並が復元されているが、今次調査でこれらの遺構は確認できなかった。

第2節　縄文時代中期の土器について

（1）中期中葉の様相

該期の土器群は、その系統と色調・胎土に密接な関係が認められる。今回、その特徴を客観的に記すために土色帖の記述方式に従ったが、逆に特徴が伝わり難くなってしまった。主観的な判り易い言い方をすれば、在地系は粗い花崗岩粒子を多く含み褐色で薄手、東海系は薄手で黒っぽく堅い、関東系は厚手で精錬した胎土で赤黒い、北陸系は白っぽい土器、となる。同じ中葉でもより古い段階、東海系山田平式に比定される土器は、133では北屋敷式に位置付けられる153他よりも焼きが甘く、あまり堅緻でない。胎土も在地系に近似する、といった相違がある。市内では、城陸遺跡で狢沢から藤内期の土器群が出土し、山田平式も出土しているが、やはり焼成は甘い。

住居址25出土遺物は、平出三Aから櫛形文への過渡期の遺物といえる。ただし、市内の藤内期の遺跡では、このように平出三Aと櫛形文と両方が混在するのがほとんどである。両者は短期間に置き換わったものではなく、比較的時間を要したものと考えられる。

注目されるのは、遠隔地である北陸系の土器と、在地系土器群に少なからず影響を与えている東海系の土器が出土したことである。理化学的分析を経ていないが、おそらく伊那谷で製作されたものではないだろう。北陸系の伝播経路は、県内を南下するルートの他に、飛騨地方を南下し、木曽地方・東海地方を経て入った可能性も、その分布からすれば考えられる。必ずしもその分布の中心地で製作されたものとは限らないが、北陸系の土器が当地方まで流入している点は、当時の交流を考える上で興味深い。

東海系の土器は、当該期の市内の遺跡において少量だがほとんどの場合確認される。在地系の土器群との共通点も多い。在地系の土器群の成立に少なからず影響を与えているものとみられる。城陸遺跡では東海系の良好な資料が得られた。狢沢から新道期にかけての住居址02の東海系土器群の特徴は、薄手であることから始まり、器形も在地系の土器群と類似する。文様の特徴としては、口唇部と口縁部と頸部の境を肥厚させていること、頸部が無文の一群があること、上弦・下弦の半円形・逆三角形の区画を有すること、文様は半隆帯により描かれていることが挙げられる。これらの特徴は、当遺跡住居址25出土遺物、藤内期から出現するといわれる櫛形文の特徴と共通する部分が多い。中でも上弦半円形の区画は櫛形文様と類似する。今回は資料提示に土器群の特徴を抽出するにとどまったが、今後確かな資料で在地系・東海系土器群の編年を整えていく作業が必要であろう。特に、藤内期の前段階にあたる新道期、後続する井戸尻期の様相を明らかにすることが求められる。その結果、下伊那型櫛形文土器の成立と終

焉、さらに後続する中期後葉の土器群の成立についても理解が深まるであろう。

（2）中期後葉の様相

①Ⅱ期

各地域の土器群が多く流入し、在地系の独自型式が形成されている。特に、下伊那A型式で類例の少ないⅢ型式の良好な資料が得られた。

遺構は住居址07・12、及び住居址18覆土出土遺物が該当する。また、住居址14は該期から次期にかけての遺構とみられる。住居址06はⅢａ期の可能性がない訳ではないが、Ⅱ期として扱う。

住居址07は遺物が少なく、詳細は不明ながらも、地文が縄文であること、加曾利E式系型式があるなど、土器は関東色が強い。

住居址12は、加曾利E式系型式が6～7割、中富式系型式が3割程度である。ただし、加曾利E式系型式には、胴部のみで下伊那A型式と区別し難いものも含んでいる。しかし、地文をみると縄文が卓越しており、やはり関東系の影響が強い。

一方、住居址14では、型式は東海系が多く、地文も条線が多く東海系の影響が強い。

住居址22覆土の資料は、下伊那A型式が多く、加曾利E式系型式、中富式系型式が少量ある。在地系が多いこと、地文に条線が多いことが挙げられる。

このように、同時期でありながら住居址間で型式組成に差異がある事例は、これまでも指摘されているが、理由は不明である。いずれにせよ、各地の土器の要素を採用して該期の土器群が成立している。

②Ⅲａ期

2が該期かは不明であるが、69・115にみられるような2本の隆帯による横位のS字状の渦巻文様が、資料は少ないが印象的である。

住居址24・13からは該期の資料が条件良く出土しているが、Ⅱ期的な要素がかなり残っていること、各型式の要素が混在していずれの系統とも言い難い資料が多いことが挙げられる。このことは、該期がⅡ期までの土器型式の衰退期とみることも可能であろう。Ⅲ期の設定は唐草文型式の変遷を基準としているが、在地系、東海系の様相からは、Ⅲａ期とⅢｂ期の間に画期がありそうである。他地域との比較を考えるとき、吉川自身が指摘しているとおり(2008)、該期はⅡ期の新相に位置付けることも視野に入れていく必要がある。

③Ⅲｂ期

住居址11・15が該当するが、両者とも該期の遺物は少ない。住居址13・24の覆土からは多く出土している。

④Ⅲｃ期

住居址09は、図化していないものも含めて下伊那B型式の遺物が圧倒的に多い。唐草文型式、加曾利E式系型式は極少数である。一方、該期の遺物を多く出土した住居址11の覆土では、加曾利E式系型式の遺物が卓越している。Ⅱ期と同様、遺構間で系統毎の組成比率に顕著な差異が認められる。

⑤Ⅳa期

住居址10では様相が良くわからない。住居址22では、半月状刺突文と1条の結節縄文が認められるが、その系統については不明である。資料が少ないこともあるが、型式差が少ない。

⑥Ⅳb期

住居址10・遺構外で極僅かに2条の結節縄文が認められる程度で、実態は不明。Ⅳ期以降、資料数が減少していくのが、本遺跡に限らず、当地方の特色でもある。

第3節　縄文時代の石器

当地方の打製石斧・横刃形石器は、硬砂岩製と緑色岩製でほとんど占められている。母岩は直線距離4kmの天龍川氾濫原に転石としてある扁平な円礫である。今次調査では、打製石斧の出土数量に対して、製作時の剥片・砕片、残核の量が少ない。僅かな剥片の中には、背面が磨耗したものもあり、製品の再生剥片とみられる。遺跡内で母岩からの石器製作は行なわず、原石採取地である天龍川川原でほぼ完成品に近い形にして遺跡内に搬入し、遺跡内では、若干の機能部再生を行なう程度であったと推測される。横刃形石器も同様で、刃部に微細剥離や二次加工があるものはこの類の可能性が高い。

一方、磨製石斧については、未製品や失敗品、製作過程で生じたとみられる剥片も割合多く認められる。磨製石斧は敲打と研磨の工程があり、製作に時間を要する。今次調査では敲石の数量が少ないが、礫の自然面をもつ剥片が出土していることから、剥離による成形から敲打による整形までの工程は、集落内で行なったとみられる。研磨の工程については、砥石が出土しなかったことと水を多量に必要とすることから、集落外、川原で行なったと考えられる。

このように、大型粗製の石器は、天龍川氾濫原で産出する硬砂岩・緑色岩と強い繋がりを持つ。遺跡外での、扁平円礫打割法（飯田市教育委員会　1986）による剥片石器製作と、集落内で磨製石斧を製作していることが下伊那の特色といえる。こうした石器製作上の特色と、前節で述べた在地系土器群との関係、黒曜石や下呂石等の遠隔地石材の搬入と、他系統の土器群との関係を追求していくことが、当時の様相を明らかにする上で今後の課題といえる。ただ今回、各種制約で、これらの資料を実測図で十分提示できなかったことは、誠に遺憾でお詫び申し上げる次第である。

さて、今次調査ではこれと異なる石英斑岩の石器群が少量出土している(240・261・301～307)。この石材は、中央アルプス一帯に分布する花崗岩に貫入したものである。今次調査区においては、ローム層（Ⅵ層）中から、少量ながら拳大～小児人頭大の亜角礫として産出することを確認したが、市内の他の遺跡でこのような事例の報告は確認できなかった。

石器の素材として伊那谷で一般的な硬砂岩等と比較して、緻密で硬いが劈開性が乏しい特徴を持つ。だが黒曜石や下呂石ほど鋭利でなく、利器には適さない。このため、硬砂岩よりも丈夫で鋭い刃部の形成が可能であるが、劈開性を利用した扁平円礫打割法で効率よく素材剥片を得ることができない。また、加工には労力を要する。石材の産出状況からは、天龍川まで移動の必要がないが、掘削が必要であること、安定した量を計画的に確保できない、といったことなどが挙げられよう。

具体的に資料をみてみると、器種は石核・剥片・二次加工を有する製品と、少数ながら各工程の資料が揃っている。石核301は、亜角礫を2つに分割し、自然面を打面にし、打面を固定したまま後退して剥離している。打面側に剥離面はあるが、打面調整なのか、作業面の転位なのか不明である。剥片はほとんどが石器に適さない小さなもので、調整剥片とみられる。打面は自然面・調整打面の両者がある。表側の剥離面は、主要剥離面と同一方向のものが多いが、それ以外のものもある。製品は横刃形石器(240・261))で、素材剥片の長辺に二次加工を施して刃部としている。形状が適せば打面側であっても刃部としている。これらのことから、剥片剥離は規格的、計画的とはいえない。

今次調査区内では採掘坑とみられる遺構は確認されなかった。

以上のことから、石英斑岩の石器群は、竪穴住居等掘削の際、偶然出土した石材を石器に利用したと推測される。今次調査区のように、地山から剥片石器の利用に可能な石材が産出する事例は珍しく、市内で類例は知られていない。あくまで特殊な1事例と考えられ、普遍化は難しい。

第4節　住居址06･24にみられる炉内への土器敷行為について

(1) 住居址06・24での出土状況

今次調査で調査された住居址06・24では、炉内に土器片を敷く行為が確認された。

住居址06は縄文時代中期後葉(Ⅱ期)に位置付けられる遺構である。炉址は中央部北寄りに位置し、その形態は掘り方の平面形で楕円形を呈し炉縁石が全て外されていたが、元は方形の石囲炉と思われる。出土状況は、覆土上層の黒褐色土を掘り下げると扁平な炉縁石の一部が廃棄された状態で出土し、その廃棄された炉縁石を取り除きさらに掘り下げると底部付近より土器片がまとまって出土した。土器は打ち欠いた底部を炉内の中心に据え、その周りに外面を上にした土器片が粗雑に敷かれていた。出土した土器は所謂「下伊那A型式」の範疇に含まれる大型の深鉢1個体(1)で、2/3ほどが残存していた。この土器片の下層には若干の黒褐色土層がみられ、その下で炉址の底部が確認された。火床部における焼土は部分的に確認されたが少量であった。

住居址24は縄文時代中期後葉(Ⅲa期)に位置付けられる遺構である。炉址は中央部北寄りに位置し、炉縁石が全て外されていたが、元は方形の石囲炉と思われる。検出状況は覆土上層の黒色土のほぼ中央部で口縁部が欠けた深鉢1個体(117)が置かれたような状況で出土し、その下を掘り下げると、底部中央付近から壁面にかけて敷かれた土器片が出土した。土器は住居址06と同様に打ち欠いた底部を中心に据え、その周りに外面を上にしたものや内面を上にした土器片が丁寧に敷き詰められていた。出土した土器は深鉢3個体分で、「加曾利E式系」の大型深鉢1個体(113)、「下伊那A型式」の範疇に含まれる深鉢1個体(114)、口縁部に横S字状の隆帯を持つ深鉢1個体(115)である。「加曾利E式系」と「下伊那A型式」の2個体はほぼ完形に近い残存状態だったのに対し、横S字状の隆帯を持つ深鉢は口縁部が1/4出土したのみであった。この土器片の下には黒色土が堆積しており、その下で炉址の底部となった。火床部における焼土は比較的少量であった。

(2) 伊那谷における他遺跡の様相

住居址06･24で見られるような炉内に土器片を敷く行為は、細部で様相が異なるものの、他の遺跡の

住居址でも散見される行為である。箕瀬遺跡を含む管見にふれた伊那谷の遺跡では別表のとおり15遺跡32軒の住居址で出土事例を確認した。内訳としては飯田市５遺跡11軒、喬木村３遺跡４軒、松川町１遺跡４軒、飯島町１遺跡８軒、駒ヶ根市１遺跡１軒、伊那市２遺跡２軒、南箕輪村１遺跡１軒、辰野町１遺跡１軒である。これらの遺跡の中で、調査面積にも影響されると思われるが、飯田市の北田遺跡で４軒、飯島町の尾越遺跡で８軒出土しており、集落内における位置付けを検討する上で参考となり得る事例である。

（３） 炉内への土器敷行為の形態分類

上述の出土事例を集成し、その傾向について下記のように形態を分類した。

①炉の形態

1　炉の形態……石囲炉（石組炉）

2　炉の平面形……方形（29）　円形（3）

3　炉縁石の状態……全て残存（12）　全て抜（9）　一部抜（9）　不明（2）

4　炉内の遺物……土器のみ（23）　土器と石（7）　＊石のみ（2）

②炉底の状態

Ⅰ類　土器片を平に敷く

A. 土器の外面を上にして敷く

B. 土器の内面を上して敷く

C. 土器の外面や内面を上にして敷く

D. 炉底部の半分に土器を敷く

E. 敷いた土器片の上に半分に割った土器を敷く

F. 詳細不明

Ⅱ類　土器もしくは土器の一部を中央に据え、その周りに土器片を敷く

A. 土器の底部を中央に据え、その周りに土器片を敷く

B. 土器の下半分を中央に据え、その周りに土器片を敷く

C. 浅鉢を中央に据え、その周りに土器片を敷く

Ⅲ類　その他

A. 石を敷き、石の隙間に土器片を入れる

B. 土器の底部を中央に据え、その周りに石を敷き、石の隙間に土器片を入れる

C. 石と土器片を半分づつ敷く

D. 石のみを敷く

集成した各住居址について、炉址自体はそのほとんどが炉縁石を伴う（伴った）石組炉であり、平面形は方形であるものが多い。炉縁石は全て残存するものが12例、一部もしくは全て抜かれているものが18例であり、後者が若干多いと思われる。

炉底の状態については様々なバリエーションがみられるが、土器片を敷く行為については大きくⅠ類

表　伊那谷における炉内への土器敷行為がみられる縄文時代住居址一覧

No.	地域	遺跡名	遺構名	炉の形状		炉縁石の状態	炉底の遺物	炉内における土器敷の状態	時期	
1	飯田市	中村中平遺跡	1号住	石囲炉	方形	一部抜	土器	炉底に外面を上にした土器片を敷く（二次焼成の痕跡ほとんどなし）	中期	後葉
2	飯田市	中村中平遺跡	37号住	石囲炉	方形	全有	土器	炉の壁面と底部に土器片を敷く	中期	後葉
3	飯田市	北田遺跡	8号住	石囲炉	方形	全抜	土器	炉底に土器片を敷く	中期	後葉（3b～3c期）
4	飯田市	北田遺跡	24号住	石囲炉	方形	一部抜	土器	炉底にその大部分が内側を上にした土器片を敷く	中期	後葉（2期）
5	飯田市	北田遺跡	33号住	石囲炉	方形	全抜	土器	炉底に内側を上にした土器片を敷く（焼土が付着していた）	中期	後葉（4a期）
6	飯田市	北田遺跡	35号住	石囲炉	方形	全抜	土器	炉底から炉壁にかけて3～5重に土器片を敷く（二次焼成の痕跡あり）	中期	後葉（3c期）
7	飯田市	箕瀬遺跡	6号住	石囲炉	方形	全抜	土器	炉底中央に土器底部を据え、その周りに土器片を敷く	中期	後葉（2期）
8	飯田市	箕瀬遺跡	24号住	石囲炉	方形	全抜	土器	炉底中央に土器底部を据え、その周りに土器片を敷く（炉の覆土上層の中心部に深鉢1個体が置かれたような状態で出土）	中期	後葉（3a期）
9	飯田市	増田遺跡	2号住	石囲炉	方形	全有	土器	炉底の東側半分に土器片を敷く（西側半分には焼土がみられた）	中期	後葉（3b～3c期）
10	飯田市	大原遺跡	2号住	石囲炉	円形	全有	土器	炉底に土器片を敷く	中期	中葉末
11	飯田市	大原遺跡	8号住	石囲炉	円形	一部抜	土器・石	炉内より石（3個）と石皿出土、北側の壁面に土器片が張られる	中期	中葉末
12	喬木村	地神遺跡	1号住	石囲炉	方形	全有	土器	炉底に土器片を敷く	中期	後葉（3c期）
13	喬木村	地神遺跡	9号住	?	方形	全抜	土器	炉底中央に浅鉢を据え、その周りに土器片を3～4重に敷く	中期	後葉（3b期）
14	喬木村	阿島郷遺跡	20号住	石囲炉	方形	全有	石？	炉底に石？を敷く	中期	後葉（1～2期）
15	喬木村	帰牛原城本屋遺跡	14号住	石囲炉	方形	一部抜	石	炉底に石を敷く	中期	後葉（4a期）
16	松川町	的場遺跡	3号住	石囲炉	方形	一部抜	土器	炉底に土器片、土偶胴部が置かれる（炉址の上に石が積まれ、土偶脚部、土器片が出土している）	中期	後葉（2～3a期）
17	松川町	的場遺跡	9号住	石囲炉	円形	全有	土器・石	炉底に石を敷き、隙間に土器片を入れている	中期	後葉（2期）
18	松川町	的場遺跡	13号住	石囲炉	方形	一部破	土器	炉底に土器片を敷く	中期	後葉（2期）
19	松川町	的場遺跡	6号住	石囲炉	方形	一部抜	土器	炉底に土器片を敷く	中期	後葉（4a期）
20	飯島町	尾越遺跡	8号住	石囲炉	方形	全有	土器・石	炉底の半分に土器片が敷かれ、もう半分に大型礫（1）が敷かれる	中期	後葉（3期）
21	飯島町	尾越遺跡	11号住	石囲炉	円形	全有	土器・石	炉底に円礫を敷き、その間に土器片を入れている	中期	後葉（2期）
22	飯島町	尾越遺跡	13号住	石囲炉	方形	一部抜	土器・石	炉底に円礫を敷き、その間に土器片を入れている（東角に副炉、北東炉縁石際に逆位に埋められた土偶あり）	中期	後葉（2期）
23	飯島町	尾越遺跡	15号住	石囲炉	方形	全抜	土器	炉底中央に土器下半部を埋設し、その周りに土器片を敷く	中期	後葉（2期）
24	飯島町	尾越遺跡	16号住	石囲炉	方形	一部抜	土器	炉底中央に土器底部を埋設し、その周りに土器片を敷く	中期	後葉（2期）
25	飯島町	尾越遺跡	17号住	石囲炉	方形	全抜	土器	炉底に土器片を敷き、その上に1個体の土器を半分に割って口縁と口縁を重ねるように置いている	中期	後葉（3期）
26	飯島町	尾越遺跡	22号住	石囲炉	方形	全抜	土器・石	炉底中央に土器底部を埋設し、その周りに円礫を敷き、その間に土器片を入れる	中期	後葉（2期）
27	飯島町	尾越遺跡	28号住	石囲炉	方形	一部抜	土器	炉底に土器片を敷く	中期	後葉（3期）
28	駒ヶ根市	辻沢南遺跡	29号住	石囲炉	方形	全有	土器	炉底の一角に土器片を敷く	中期	後葉（2期）
29	伊那市	北丘B遺跡	3号住	石囲炉	方形	全有	土器・石	炉底に扁平石と土器片を敷く	中期	後葉（2期）
30	伊那市	百駄刈遺跡	2号住	石囲炉	方形	全有	土器	炉底に土器片を敷く	後期	
31	南箕輪村	北高根A遺跡	11号住	石囲炉	方形	全有	土器	炉底中央に土器下半部を立て、その周りに土器片を敷く	中期	後葉（1～2期）
32	辰野町	宮垣外遺跡	5号住	石囲炉	方形	一部破	土器	炉壁に、数個体の土器を縦に割り口縁部を下に向けて内側が見えるように貼っている（被熱による劣化があまりみられず）	中期	後葉（4期）

＊時期については、吉川金利　2003「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』102・2009「唐草文系土器」『総覧縄文土器』を参照

「土器片を平に敷く」Ⅱ類「土器に一部を中央に据え、その周りに土器片を敷く」の２種類に分類される。その中で内容の差異によって細分されるが、それぞれ1軒から多くて4軒の出土例である。報告書の事実記載や写真だけでは判断できずⅠ類Fとしたものが最も多い事例となってしまったが、Ⅰ類全体は18例を数え、Ⅱ類の６例に対して多い傾向を示している。また、土器片に加えて石を使用するものをⅢ類「その他」とした。石と土器片の組合せによって行為が細分されるが、Ⅲ類全体としては８例あり少なからず存在する。炉底の状態は事例的にはⅠ類が主体と思われるが、Ⅱ類・Ⅲ類においてもⅠ類でみられる各要素が含まれることが予想され、多様な様相を示すと考えられる。住居址06・24は２軒ともⅡ類Aに分類されるが、土器の底部周辺に敷かれた土器片は外面や内面を上にして敷かれていた。

遺構（住居址）の時期は、縄文時代中期中葉末から縄文時代後期にわたるものであり、軒数的には縄文時代中期後葉前半（Ⅱ～Ⅲa期）の時期のものが多い。遺構の時期と遺構に伴う炉址の状態との比較からⅠ類→Ⅱ類・Ⅲ類という大枠での変遷が現状では推定されるが、詳細は今後の更なる類例の集成に基づいて判断すべきものである。

（4） 炉内への土器敷行為がもつ意味

炉内に土器が敷かれる事例は県内外の報告書で報告されているが、この行為が何を意味しているのかについては不明な部分が大きい。近年の研究では、『炉としての機能的な役割』（富山市教委　2002）や『炉に対する廃棄行為』（関間　2008）（佐野　2008）として検討がなされている論考がみられる。『炉としての機能的な役割』とは、「土器や粘土を露呈に敷き詰めることで地山の低地熱や湿気を遮る」とする炉の機能としての考え方である。一方、『炉に対する廃棄行為』とは、住居址の廃棄行為に伴う炉の廃棄行為としての考え方である。これは、調査で観察された内容から炉に対する行為の復元を検討し、敷かれた土器と火床面との間の間層、土器自体の二次的な被熱痕跡が認められない点等を根拠に炉の機能終了後に土器を割り、炉内に敷くという行為を想定したものである。

伊那谷における各遺構について上述の観点を参考にみてみると、敷かれている土器自体の二次的な被熱痕跡についてはその記述が明確でないものが多い。それ故実見可能なものを幾つか観察したが、二次的な被熱痕跡と思われるものは確認されなかった。また、敷かれた土器と火床面との間層の存在については、各報告書中の断面図から検討したが、黒褐色土等の間層が観察されるものがある一方、火床面直上に土器が敷かれているもの、判断がつきかねるものが少なからず存在する。

住居址06・24についてみてみると、住居址06は土器片と火床面との間に黒褐色土の間層を観察でき、土器片の上で扁平な炉縁石が廃棄された状態で出土している。また、敷かれた土器には二次的な被熱痕跡が見られなかった。住居址24でも土器片と火床面との間に黒色土の間層を観察でき、炉の覆土上層の中心では深鉢１個体が置かれたような状態で出土した。また、土器片には深鉢土器として使用された時のものと思われる焦げが残存しているのみで、その他の二次的な被熱痕跡はみられなかった。さらに、住居址06・24の炉底における土器敷の状態は共に土器底部を中心に据え、その周りに土器片を敷いているという視覚的にも特殊な様相を示していた。これらの状況から、住居址06・24における炉内への土器敷行為は炉としての機能が終了した後に行われた行為の可能性が考えられ、何らかの意味を伴うものとすれば「炉の廃棄に関連する行為」を想定したい。

上述のように、住居址06・24を含む伊那谷における各遺構での出土状況は一様ではなく、「機能的な

役割」や「炉に対する廃棄行為」等の観点を含む多角的な検討がさらに必要である。

（5） 今後の課題

住居址06・24でみられたような炉内への土器敷行為は、「炉の廃棄に関連する行為」を含む多様な形態を持つ可能性が想定されるが、依然として不明な部分が多い。その一つは集落内における同時期の住居址間にみられる行為の有無であるが、この行為の有無の違いは何を示すのか、機能的な面やその他の面からみても普遍的な行為なのか特殊な行為であるのか検討を要する。また、今回の事例集成は伊那谷のみであるが、県内では松本平、木曽地域、上田・佐久地域等でも出土事例が確認されている。さらに、県外でも管見のかぎりでは山梨県・愛知県・岐阜県・富山県・新潟県等での出土事例がみられ、その中でも岐阜県高山市の赤保木遺跡（岐阜県　2007）８号住居址の事例では炉内に「下伊那タイプ」の深鉢が1個体敷かれている点で注目される。このように、分布の範囲はさらに広がることが予想され、伝播経路等を理解するためにも今後はさらに広域的な事例集成を行っていく必要がある。

このように「炉内への土器敷行為」に対する検討課題は多いが、早急の課題は、個々の遺構においてその行為を復元する事が可能となるような調査視点・手法の構築（閏間　2008）といえる。

第５節　終わりに

縄文時代中期を中心として各時代の集落を概観した。当地は近世の城下町形成以来、現在まで飯田下伊那の中心地である。近世の城下町以前の状況は不明な点が多かったが、原始から古代にかけて、幾度かの断絶があるものの、長期にわたり集落域や墓域としての利用を経て、現在の町並に変化してきた実態が明らかとなった。

特に、縄文時代中期後葉においては、市内でも有数の集落の１つに挙げることができる。そして、長期にわたって集落が継続されたこと、炉からは特殊な土器の出土状況がみられたこと、良好な土器資料が得られてその様相の一端が明らかになったことである。弥生時代では、中期の集落が確認されたことであり、上段では最も古い集落址である。今回、弥生時代の集落構造や生産活動を解明することはできなかったが、当該期の集落の存在が確認されたこと自体が、弥生時代後期、上段に集落が進出し伊那谷独自の文化を形成する過程を解明する上で、重要な成果といえる。古代においては、伊那郡郷戸荘の一部であろう集落の一端が確認された。施釉陶器を所持しており、輸入磁器も所持していた可能性がある。

以上、発掘調査の成果は大変大きいものがあった。本章で再度整理して若干の考察を行ない、課題を確認することでまとめとした。しかし、弥生時代以降の状況について十分な検討を加えることができず、この点については反省しなければならない。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたり多大なるご理解、ご協力を賜りました日本たばこ産業株式会社様には、深く感謝申し上げます。

引用・参考文献（全章共通）

飯田市教育委員会　1986『恒川遺跡群　――一般国道153号座光寺バイパス用地内埋蔵文化財発掘調査報告―　遺物編』
飯田市教育委員会　1998『美女遺跡』
飯田市教育委員会　1999『大門原遺跡』・『三尋石遺跡Ⅲ』・『三尋石遺跡Ⅳ』
飯田市教育委員会　2001『妙前遺跡』・『黒田垣外遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・見城垣外遺跡』
飯田市教育委員会　2002『箕瀬遺跡』
飯田市教育委員会　2003『城陸遺跡』
飯田市教育委員会　2004『飯田城下町遺跡』
飯田市教育委員会　2005『恒川遺跡群（田中倉垣外・恒川A・恒川B・阿弥陀垣外・新屋敷・薬師垣外地籍）－遺物編　その1（古代・中世）－』
飯田市教育委員会　2006『飯田城下町遺跡』・『梨屋元遺跡』
飯田市教育委員会　2008『川路大明神原遺跡　－個人住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
神村透　1986「下伊那型櫛形文土器」『長野県考古学会誌』51　長野県考古学会
神村透　1990「縄文中期後半の橋状突帯付土器」『伊那』1990　5月号　伊那史学会
神村透　2000「平出遺跡口号住居址出土土器から　－条線地文沈線唐草文土器－」『平出博物館　紀要』第17集
神村透　2005『縄文中期後半「下伊那タイプ」土器私考　－風土が醸成する地域の土器型式－』『地域と文化の考古学Ⅰ』明治大学文学部考古学研究室編
小島俊彰　2008「上山田・天神山式土器」『総覧　縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
下伊那地質誌編纂委員会　1976『下伊那の地質解説』
下伊那誌編纂委員会　1991『下伊那史』第一巻
長野県史刊行会　1988『長野県史　考古資料編　全一巻（4）遺構・遺物』
長野県教育委員会　1970『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　－飯田地区－』
増子康眞　2008「北裏C～北屋敷Ⅱ式土器」『総覧　縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
山下勝年　1998「知多半島における中期前半東海系土器　－山田平遺跡出土土器の分類と編年を中心として－」『縄文時代中期前半の東海系土器群　北屋敷式土器の成立と展開』　静岡県考古学会
吉川金利　2003「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』102　長野県考古学会
吉川金利　2005『下伊那唐草文土器　～縄文時代中期後葉伊那谷南部の地域性～』飯田市上郷考古博物館
吉川金利　2008「唐草文系土器」『総覧　縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

第４章　第４節関連

飯田市教育委員会　1979『大原遺跡・富田窯址』
飯田市教育委員会　1988『北田遺跡』
飯田市教育委員会　1994『中村中平遺跡』
岩田崇　大石崇史　2003「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』
関間俊明　2008「屋内炉の関わる廃棄行為について」『考古学ジャーナル』10月臨時増刊号
春日井恒　長谷川幸志　2003「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』
上郷町教育委員会　1989『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』
駒ヶ根市教育委員会　1988『辻沢南遺跡』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2007『荒保木遺跡』
佐野隆　2008「縄文時代の住居廃絶に関わる呪術・祭祀行為」『考古学ジャーナル』10月臨時増刊号
喬木村教育委員会　1977『柿牛原城本屋』
喬木村教育委員会　1981『地神遺跡』
喬木村教育委員会　1993『阿島郭遺跡』

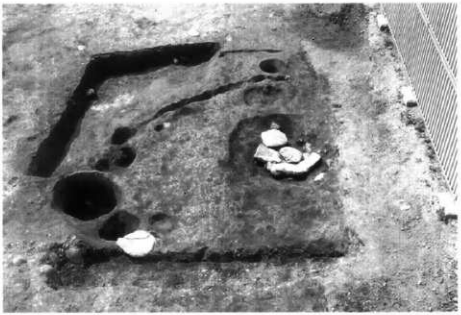
辰野町教育委員会　2009『宮垣外遺跡』
富山市教育委員会　2002『富山市境野新南Ⅱ遺跡・池田東遺跡発掘調査報告書』
長野県教育委員会　1972『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　上伊那郡飯島町地内その1　昭和46年度』
『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　伊那市西春近　昭和47年度』
西野麻野　2006「富山県における石組炉に関する一考察」『富山考古学研究』第9号
松川町教育委員会　1973『的場遺跡』
目黒吉明　1995「住居の炉」『縄文文化の研究　8　社会・文化』
山本暉久　2007「屋内祭祀の性格」『縄文時代の考古学11　心と信仰－宗教的観念と社会秩序－』

写真図版

北側調査区（部分）

南側調査区

図版２



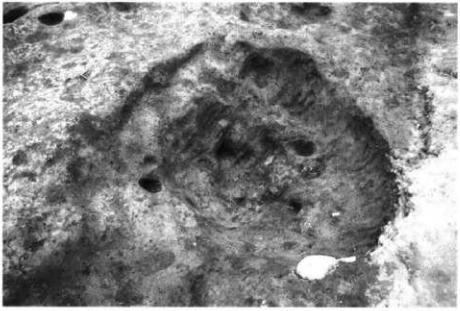
住居址06

住居址06　埋甕

住居址06　埋甕　断面

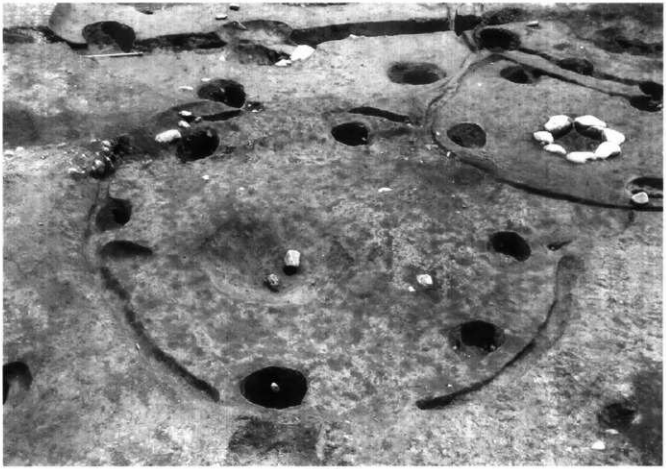
住居址06　炉　礫出土状況

住居址06　炉　土器出土状況

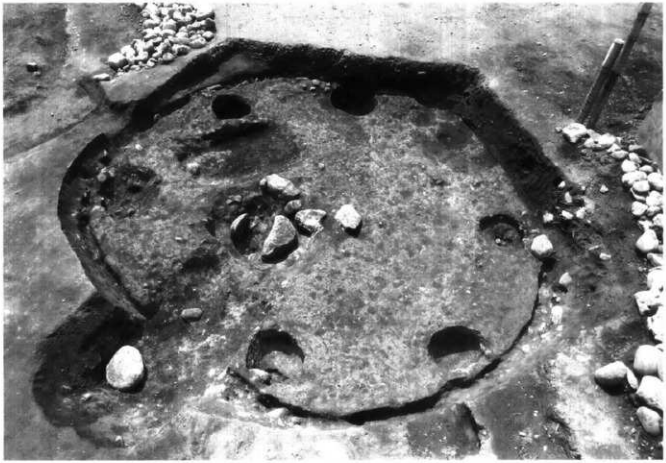


住居址06　炉　完掘

図版4



住居址09



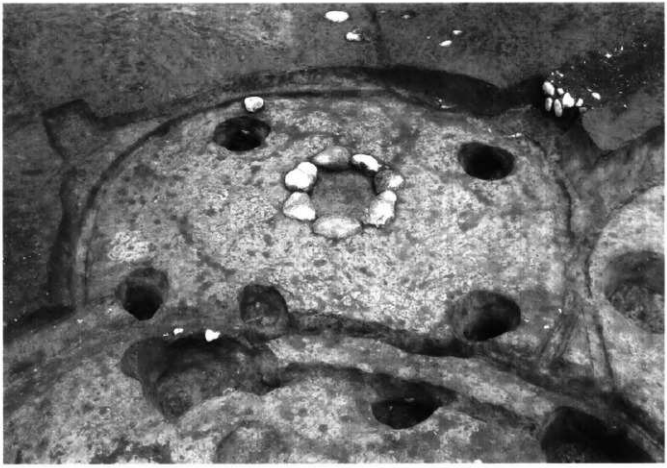
住居址13

住居址09　埋甕

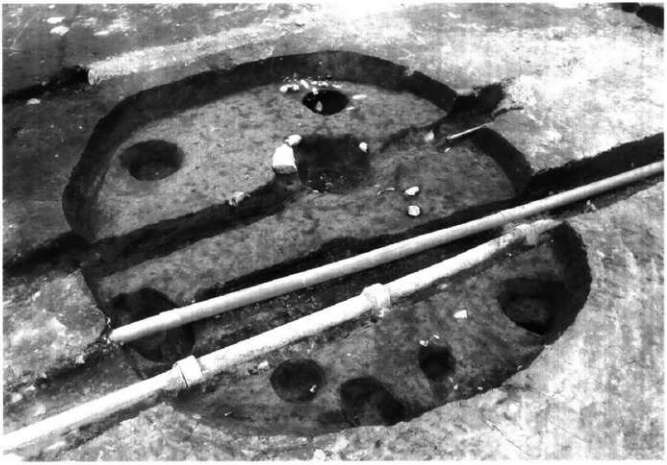
住居址13　埋甕

住居址10

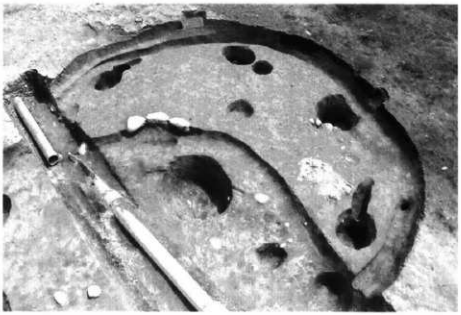
図版6



住居址07



住居址11



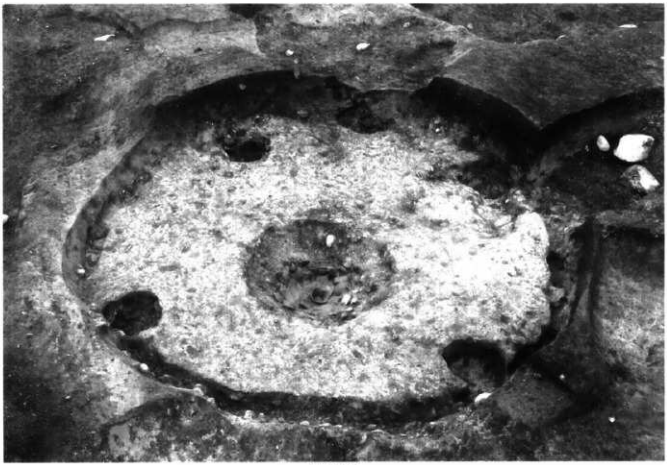
住居址12

住居址14

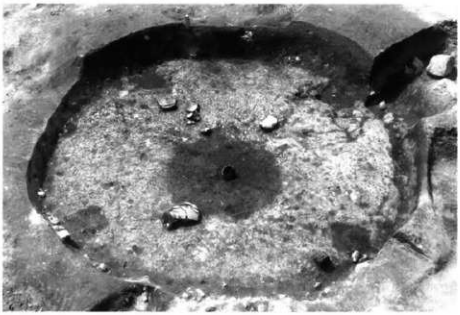
住居址15

図版8

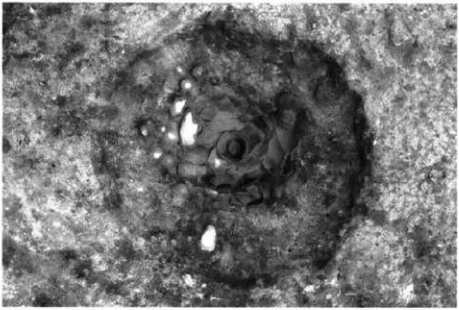
住居址22



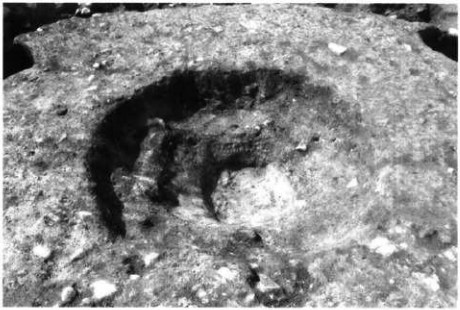
住居址24



住居址24　遺物出土状況

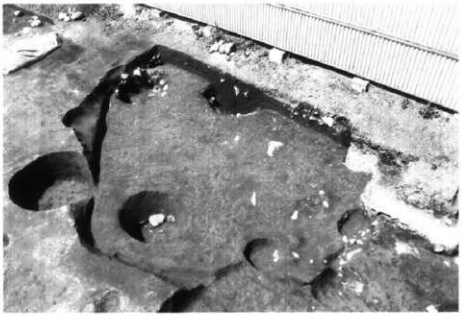


住居址24　炉　土器出土状況



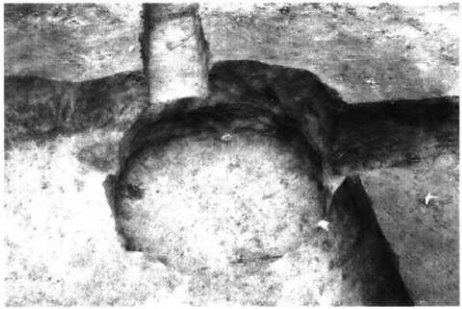
住居址24　炉　完掘

図版10

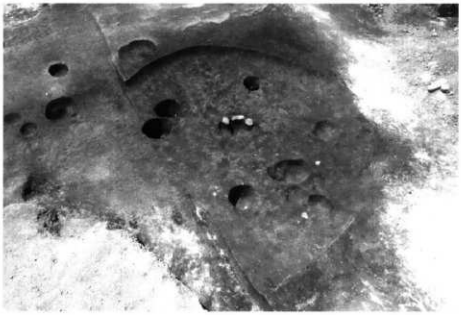


住居址18

住居址23



土坑06

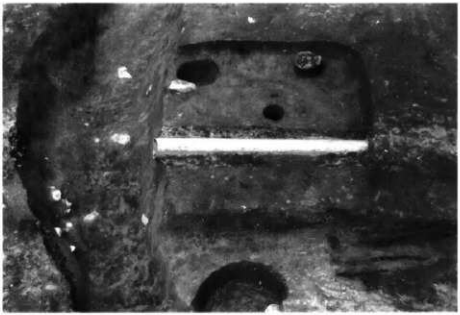


住居址25

住居址25　遺物出土状況

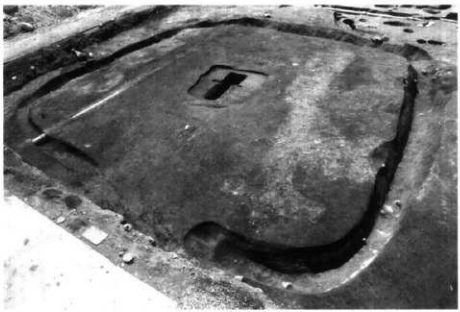
住居址25　遺物出土状況

図版12

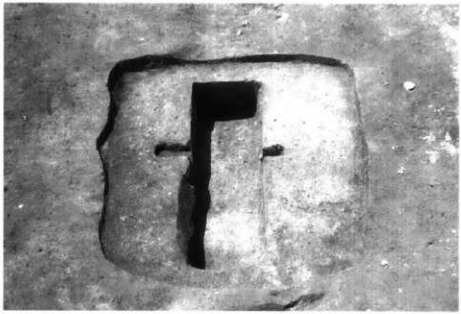


住居址17

住居址20

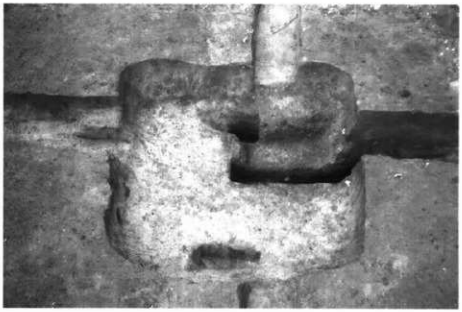


方形周溝墓01



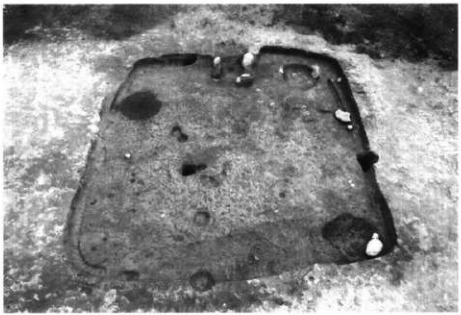
方形周溝墓01　主体部

方形周溝墓01　主体部　断面



方形周溝墓01　主体部　掘り方

図版14



住居址08

住居址08　カマド1

住居址08　カマド2

住居址19

住居址19　カマド

住居址19　遺物出土状況

住居址19　P3

住居址19　P4

図版16

住居址21

住居址21　カマド

住居址21　遺物出土状況

遺跡近景（平成13年度撮影）

作業風景

現地見学会風景

住居址06（1）

住居址06（2）

住居址06（3）

住居址06（4）

住居址06（7・8）

住居址06

住居址09（25）

住居址09（26）

住居址11（48）

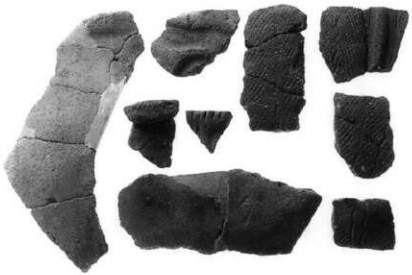
住居址12（53）

住居址11

住居址12

図版22 遺物

住居址07



住居址10

住居址15

住居址13（68）

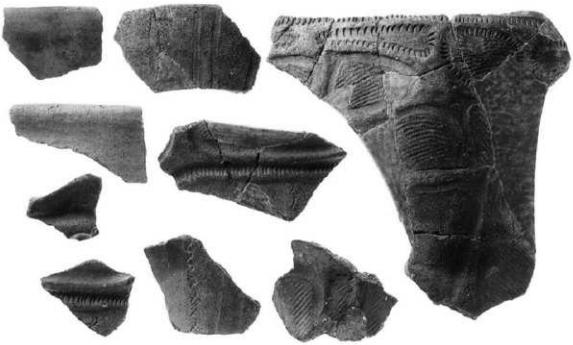
住居址13（69）

住居址13

住居址14

住居址16

住居址18



住居址22

住居址24（113）

住居址24（114）

住居址24（115）

住居址24（116）

住居址24（117）

住居址24（118）

住居址24

住居址24（120）

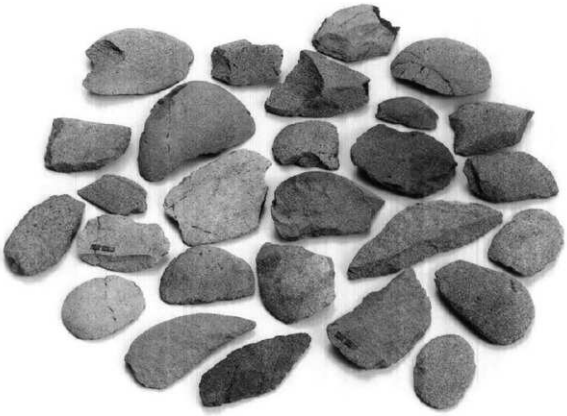
住居址25（138）

住居址25（135）

住居址25（136）

右：土偶
中：住居址23
下：遺構外

打製石斧



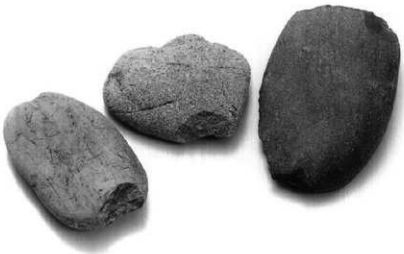
横刃形石器

磨製石斧

横刃形石器（2）

礫器他

石皿・磨石



石錘

敲石・剥片

石鏃

石錐

石核・両極石器

削器

石匙（329）

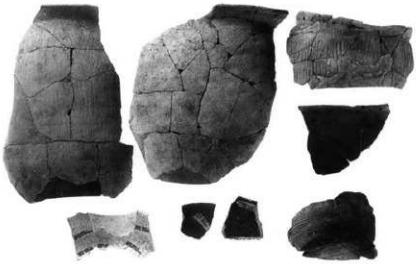
石匙（330）

住居址06　埋甕２内礫

弥生時代石器（179）

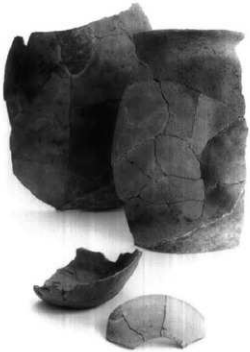
住居址17

方形周溝墓01



住居址19

住居址19



住居址21

住居址08

住居址08（炭化米）

報告書抄録

ふりがな	みのぜいせき
書名	箕瀬遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	羽生俊郎　坂井勇雄
編集機関	飯田市教育委員会
所在地	〒395－8501　長野県飯田市大久保町2534番地　TEL 0265-22-4511
発行年月日	西暦2010年３月（平成22年３月）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
箕瀬遺跡	飯田市箕瀬 二丁目 2561番地1	20205	35° 51′ 28″	137° 81′ 96″	2008.4.15 ～6.26	1500	造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箕瀬遺跡	集落址	縄文時代	住居址・土坑	土器・石器	市街地では有数の縄文時代中期後葉の集落。 炉の廃棄の際に、土器を敷き詰めた状況が確認された。 上段の弥生時代では最も古い集落。 焼失住居から施釉陶器等が出土。
		弥生時代	住居址・方形周溝墓	土器・石器	
		平安時代	住居址	土器・炭化米	

要約

縄文時代中期後葉の住居址が13軒調査され、重複も多い。攪乱により検出・調査できなかった部分も考慮すればかなりの数になるものとみられ、市街地ではもちろんのこと、市内でも有数の集落を形成していたものとみられる。またこの時代の住居址で、炉の廃棄の際に、土器を敷き詰めた状況が２例確認された。

上段に展開する弥生時代の集落では最も古い、北原式期の住居址が確認された。

古代においては市内でも集落が広がる９世紀末から10世紀にかけての集落が確認されたが、うち１軒は焼失家屋であり、緑釉とみられる施釉陶器が出土した。

箕瀬遺跡

2010年3月発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印　　刷　龍共印刷株式会社